

文明元年是歲

水不そく岩根かくれふつとひきて  
いそへえるあふ沙ハみちり  
浦かせや出行ふねを送るらん  
名残かすめるあかつき此月  
春のよの別うさしき袖引て  
泪ふちらはなやうらみん  
草ふかき故郷此ひとの秋の暮  
松虫の音をひとりきくまろ  
問かしの風も身ふいる山はれく  
柴折うくるすまおさひしも  
舟維く河へしつ々日は落て  
音にしらるゝ水のゆくすゑ  
軒端よりたもとふゑる春の雨  
ねさぬ哀ふみとそふらん  
わひ人々あす此我身を猶去らて  
今はた同く暮もたのます  
わするなと契すてつる歸るさに

長 剱 興 俊 眞 敬 雅 祇 敏 祥 孝 助 藤 茂 敬 眞 祇 敏 祥

いひし詞をゆめみあすなよ  
身こそあれ浮名はいかゝ消もせん  
苔のくさふもさすういそあす  
朝日さす山路ふのる虫の聲  
霜ふ夜さむをいとふあろも手  
旅人をやとすもかか秋の暮  
しつつけき物をたゝく柴の戸  
古を去のふるくを此まつ此風  
朽て咲ちる花とよもあし  
春過る片山河此捨小舟  
むとり鷹鳴江そ此とあある  
影遠き入日此くもふゆきえれて  
のなる烟ふさとほみえりり  
秋かせ此くさの末折野を淺と  
ふしといつくにをしう行らん  
月ふのみよるはすからふ立うくれ  
むあしくおくる鐘はうらめし

雅 助 剱 敬 眞 祇 敏 祥 孝 助 藤 茂 敬 眞 祇 敏 祥

文明元年是歲



文明元年是歲

一聲此法をはとのむ身とあして  
 思ひかへす墨染のそて  
 心よりふかくも住るやまさとふ  
 志くるゝころは都ともあし  
 ふゝ迷ふ道ふこのそ此散しきく  
 行とゝこほるみつそすくあき  
 河嶋やふねも別れてくたるせふ  
 たのむやすゑのちきりからまし  
 在明ふうつれ忍ふる夕月夜  
 いとふこゝろもあらし秋あせ  
 折てみる花とふおしきま萩原  
 尾上のみや此はま木とる道  
 替り行むかゝ此跡ふ袖ぬれて  
 これもあとのひと此一筆  
 たちちねを守りとたのむ旅のそら  
 心あてしてあへるぬるさと  
 道絶て結ひし草もあるゝ野ふ

真 祇 孝 敬 祥 藤 祇 助 敬 茂 敬 真 敬 雅 敏 敬 真 祇

たてるや雪の岩代此まゆ  
 神垣ふかひく白ゆふ風吹て  
 身に志みたりあむあふ俵  
 今更ふ驚く老のますかゝみ  
 をつるゝ袖ふ何をあはん  
 ひち笠もぬれぬる道此村雨ふ  
 たちよる不かたとの須磨の山里  
 物おもふまくらふさやく涙もうし  
 すゝきちる夜此風此さひうさ  
 きりくす傾く月ふ聲ぬけて  
 あくとも何に秋をうらまん  
 あちきなき身ふはあらん暮もあし敬  
 待ならひけんことそくやしき  
 きのふ咲花かとみればうつろひて  
 夢ふあらしふえる此世の中  
 ゑと先ふつるゝ霞此沖つ舟  
 半天ひとす海そえるるき

助 孝 雅 敏 祥 敬 真 祇 茂 藤 敬 敏 祥 真 雅 孝 助

文明元年是歲



河のさる月此鉤(の原)不そきよふ  
 あくるうよハきこほ此下うを  
 さりととも心ふくくるかひもあし  
 さのち此世そりすれ勝なる  
 春ふめて秋ふ愁ふる身を古(こ)て  
 命おもへるとのまれもせず  
 入かとし望ありともうとの道  
 雪をふろみきこり山賤  
 櫻花谷此ひき散添て  
 とはれぬ庭そころかすめる  
 うせ絶ぬともしひ白き春のよふ  
 舟もうころ江ハふけふなり  
 遠くある影さへおしき水此月  
 一むらあひく薄霧此そら  
 色みらいみえぬ竹此は未ふ秋くれて  
 ねふゆく鳥や宿まよふらん  
 駒とめて狩人とまる山のかけ

敬 祇 雅 剝 茂 藤 眞 敏 敬 助 祇 敬 敏 眞 藤 茂 敏 祇 敬 祥 孝 茂 敏 祇

袖打ばらふしもの下くさ 眞  
 今こんととのめし床を起出て 幾弘

ころみしかくわれやゆかまし 敬  
 玉のをぬくけて契ると君もしれ 助  
 代ふつかへてはうへりみもせず 雅

心敬十六 長敏八 興俊一 道眞十一 長糾三 幾弘二 宗祇十三 永祥七 満  
 助十 中雅九 義藤四 印孝八 修茂八

何人 第二〇連

祇十三 雅八 剝四 敬十六 敏十一 俊二 藤五 茂九 祥一 眞十一 弘七  
 助七 孝六

何船 第三〇連

雅九 助七 俊二 敏十一 藤六 茂八 敬十四 祇十一 剝二 眞十一 孝五  
 弘八 祥七

山何 第四〇連

孝七 敬十五 助一 眞十一 敏十一 雅七 祥八 藤六 剝三 茂八 弘九  
 祇十三 俊二



白何歌第五〇連

弘七 祇十三 敏十 俊三 眞十一 剝三 孝七 助八 祥一 藤四 雅八 敬十五 茂十

初何歌第六〇連

敏十 眞十一 雅九 剝三 孝五 弘六 助七 敬十五 俊一 茂十 藤五 祇十二

薄何歌第七〇連

茂九 敬十六 俊一 祇十四 助七 孝八 雅九 眞十一 弘一 敏十 剝二 祥九 藤三

何路歌第八〇連

助七 祥八 祇十二 弘八 茂八 俊一 藤五 敏九 剝一 孝五 眞十一 敬十六 雅九

二字反音歌第九〇連

藤八 祇十四 茂一 孝五 雅七 俊一 祥七 弘九 剝一 助九 敬十五 敏十二 眞十一

何木歌第十〇連

眞十二 茂八 助七 敬十七 敏九 剝四 弘九 孝九 祇十二 雅七 藤五 俊一

道真

(資清) 太田備中入道

幾弘

栗原入道 藤原實入

義藤

近上杉衆 藤原

長敏

鈴木

中雅

禪僧

滿助

鎌田

修茂

大胡

長剝

山下

○是ヨリ先宗祇百韻連歌ヲ白河ニ行ヒシコト、應仁二年十月二十二日ノ條ニ、東國ヨリ上洛ノコト、本年七月十一日ノ條ニ見エタリ、竝ニ參看スベシ、此條蓋シ七月以前ノコトナルベシト雖モ、月日詳カナラザルニヨリ、姑ク此ニ掲グ、

近江金剛寺、火アリ、

〔翰林葫蘆集〕

蒲生郡 書館本

金剛寺幹縁

江州路景瑞山金剛禪寺乃太守源判官氏頼法諱崇永挿草之地也湖光山色一方勝槩矣凡自門至寢百色悉備殿內安大覺世尊像俛迦葉阿難及四天王侍衛焉宋沙門宗鑑論三佛同殿更、有謂曰、中央設釋迦、葉居左、阿難居右、是



此土之像也、今之像設、取則於此者也、太守曾見天龍國師、頂戴衣盃、竟拜國師、(疎石)  
 爲本寺開山始祖、爾來一百年、東湖之上、祖師生悉、凜然可見矣、文明之初、寺燬  
 于兵、但聖像猶存焉耳、前東山始彥和尚、適移守大檀祖塔、嘆曰、吾佛坐金剛處、  
 六自在王將十八億軍、決其得失、智惠力、故魔軍大敗績矣、嗚乎、天下喪亂、焚寺  
 毀佛、比々在焉、而聖像無恙、所謂坐金剛處、之所致歟、然而光趺缺落、在一莓苔  
 中、視之如秦越肥瘠、則不可也、竊施衣資、欲補苴之、費用浩繁、單力難辦、從我者  
 爲誰也耶、小比丘梵久聞此一舉、感激莫措、謹持短疏、遍扣十方、伏望安坐放光、  
 頓復舊觀、所獲勝報、豈易測乎、

太守修廢寺於湖心

維昔唐典所載

神僧裝瑞像於江左

至今吳人所歸

自非四天飛鉄輪

焉得一尊脫兵火

星移物換

肩有蛛網、頂有鵲巢

雨沐風梳

髮如螺旋、領如獅子

師兄金色聚墨

侍者紅粉委泥

普通年間

銅趺鑄六尺高座

元嘉時節

金薄造一尋圓光

道其興乎

天之常也

東錢西錢七十八十

箇々打破慳囊

南珠北珠一分二分

塵々成就法寶

不隔無邊刹界

盡是有力檀那

○金剛寺燒失ノ年詳ナラズ、姑ク、コ、ニ收ム、

播磨姫路城主赤松政則、置鹽山ニ城キテ之ニ移リ、家臣小寺豐職ヲシテ

姫路城ヲ守ラシム、

〔嘉吉之記〕

○播磨ル、上文ハ、赤松政則、姫路城修築ノコトニカ、文明元年

新築置塩山城移、令家臣小寺伊勢守豐職居姫路城、赤松再興、置塩山城主始

○赤松諸家大系圖、政則、豐職ノ條、播磨古城記、竝ニ異事ナシ、

〔赤松諸家大系圖〕

三連綿之記、○播磨替、飭西郡、赤松兵部少輔政則、應仁元

年、再領姫路城也、在城三年也、文明元年、新築置塩城、藤丸

○是ヨリ先政則、姫路城ヲ修築セシコト、應仁元年十一月十一日ノ條

ニ見エタリ、參看スベシ、



置塩山城

〔播磨鑑〕

飾西郡古城跡並構居 置塩山城 藤丸城云、高百五十間、惣廻卅二丁半、置塩郷町村亥子ヨリ四方

一本ニ云、本丸東西廿二間、南北十五間、二丸東西廿三間、南北同、本丸ヨリ一段下リ未ノ方、本丸ヨリ三ノ丸東西廿四間、南北廿八間未申ノ方、

〔赤松諸家大系圖〕

連綿之記 ○播磨替 饒西郡 文明元年、新築置塩山城、號

鞍山下號  
ス  
鷹丸  
アキトノ丸

鞍山、本城二十間、南北十五間、鷹丸ト號、東西二十三間、南北十五間、アキトノ丸ト云、東西廿四間、南北廿六間、一ノ門(マ)、二菊ノ門、中ノ門、櫻門號、大工赤星外記、小工藤原三郎兵衛、治工谷口作左工門、奉行衣笠式部、志水主計也、

大内政弘、周防石城神社ヲ造營ス、

〔颯雲捉風〕

大内家工藝考土代 建築

周防國熊毛郡鹽田村石城神社 文明元年、大内政弘の造替ありと云ふ、

〔長防風土記〕

熊毛郡卷之十五 神社 石城山式内三社大權

現 神主 石原出羽 祭神 大山祇命 雷命 高靈命

本地佛 釋伽 普賢 文珠也

構造

但御殿桁行三間、梁行九尺、入毛や作り、三ツ戸二重を縁、志け堂、漆木、外圍桁行九尺、四方松雜木作り、瓦葺拜殿、桁行三間、梁行貳間半、松雜木造り、茅葺之畢、

〔參考〕

〔古社寺保存會 明治四十年五月 指定特別保護建造物調書〕

石城神社本殿

普通名稱

所在地名 山口縣熊毛郡鹽田村大字石城山石城神社境内

所有者 石城神社

創立沿革

社傳ニ、敏達天皇三年創立ト云フ、三代實錄ニ、清和天皇貞觀九年八月十六日壬午、周防國正五位上出雲神、石城神、比美神、並授

從四位下、延喜式ニ、周防國十座、熊毛郡二座(淳名倉太)、石城神社、總國風土記ニ、石城山、此山有洞穴、良材藥草、中倉大珠、數尊御宇祭大山

祇神、圭田二十五束、文明元年七月再建、永正十一年九月、明曆二年閏四月、寛政十年、安政四年等ニ修繕スト云フ、

寸尺 桁行十八尺三寸 梁間九尺四寸 軒高十三尺八寸 棟高二

文明元年是歲



十尺七寸

構造裝飾 桁行三間、梁間壹間、春日造柿葺、軒二重、繁垂木、斗拱唐樣三ツ斗、斗拱間蟻股、圓柱二重、長押附、向拜方柱、正面格子戶、左右側面前壹間各引戶、次二間各簀板、後面總簀板、四方廻椽、正面勾欄、木階六級、登勾欄附、內部內陣正面板唐戶、幣軸附、內外陣共、板違格天井、拭板敷、內外丹塗、

九州探題澁川教直等、使ヲ朝鮮ニ遣シ、歲遣船ヲ約ス、其他關西沿海ノ將士、亦各使ヲ朝鮮ニ通ズ、

〔海東諸國記〕

坤 西海道九州 肥前州

澁川教直

節度使 (文明元年) 己丑年、遣使來朝、約歲遣一二船、書稱九州節度使源教直、或稱九州

都元帥、或稱九州總管、居肥前州阿也(絳部)、非知、有小城、在博多南十五里、民居一千

餘戶、正兵二百五十餘、總治九州之兵、對馬島入宗大膳等言、初教直助大內、及

小二復土、懼棄所居、潛投肥後州也(山鹿カ)、望加知、(少貳頼忠ノ太宰府ヲ復セシコト)、五月是月ノ條ニ見エタリ、

佐志源次郎

源次郎 己丑年、遣使來朝、書稱肥前州上松浦佐志源次郎、受圖書、約歲遣一

艇、小二殿管下、能武才、有麾下兵、稱佐志殿、

五島貞茂

貞茂 己丑年、遣使來朝、書稱(肥前松浦郡)五島悼大島太守源朝臣貞茂、以宗貞國請接待、

五島盛

居五島源勝管下微者、

藤原盛 己丑年、遣使來朝、書稱五島日島太守藤原朝臣盛、以宗貞國請接待、

居五島源勝管下微者、

彼杵清男

清男 己丑年、遣使來朝、書稱肥前州彼杵郡彼杵遠江清原朝臣清男、以宗貞

國請接待、

薩摩州

種島吉國

吉國 己丑年、遣使來朝、書稱薩摩州內種島(大隅熊毛郡)太守吉國、以宗貞國請接待、

島津持永

持永 己丑年、遣使來朝、書稱薩摩州島津藤原朝臣持永、以宗貞國請接待、

筑前州

秋月成直

成直 己丑年、遣使來朝、書稱筑前州(總)聽政所秋月太守源成直、以宗貞國請接

待、大友殿管下、稱秋月殿有武才、

對馬島 尼老郡

宗職盛

職盛 故代官宗盛直之子、(應仁二年)戊子年、遣使來朝、己丑年、又遣使來朝、請繼父遣艇、

以無島主之書不從、書稱對馬州平朝臣宗四郎職盛、

文明元年是歲



文明元年是歲

一五八

平彦次郎

護軍皮古時羅（崇次郎）平茂持弟甲申年受職己丑年受圖書來則賜米豆并十石

鹽津留經

源經主之己丑年受圖書約歲遣一二船書稱上松浦鹽津留助次良源經

四宮忠義

山陽道八州備後州

伊賀羅貞

忠義己丑年遣使來朝書稱備後州守護代官山名四宮源朝臣忠義以宗貞

緣野義保

國請接待

藤原義忠

長門州

山陰道八州

貞成己丑年遣使來朝書稱長門州（阿武郡）三島尉伊賀羅駿河守藤原貞成以宗貞

伯耆州

國請接待

出雲州

義保己丑年遣使來朝書稱伯耆州大守緣野源朝臣義保以宗貞國請接待

隱岐州

義忠己丑年遣使來朝書稱出雲州留關海賊大將藤原朝臣義忠以宗貞國請接待

源秀吉

源朝臣宗全之蹤宗全書亦曰我所領八ヶ州悉與義安○本書長祿三年條三、

山名義安

馬伯耆備前備後八ヶ州總太守山名彈正少弼源朝臣義安續父山名左金吾

深修庵用書記

源朝臣宗全之蹤宗全書亦曰我所領八ヶ州悉與義安○本書長祿三年條三、

司果信盈

甲斐政盛

藤原安吉

甲斐遠尾越濃四州守其使以巨酋例接待

同茂村

用書記己丑年遣使來朝書稱深修庵住持用書記以宗貞國請接待

藤氏母

因葬于東郊其母命安吉來侍朝仍守父墳安吉死弟茂村又來侍朝為副司果

文明元年是歲

安吉母時々遣船稱藤氏母大友殿管下

一五九

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州

〔海東諸國記〕坤 西海道九州筑前州



年末雜載

神社

伊勢內宮  
正月一日  
神拜

〔一禰宜氏經神事記〕

○玖神宮文庫所藏

應仁三年己丑正月一日

天晴

宮司忠康參

半夜參候神宮予三四五六七八九十五串貞重物忌父等如常宮司一殿之內  
二候仍憤之軒由貴殿ニ著ス于時裾ヲ引テ通宮司神拜祗承師秀番文番兼村司對  
面

白散酒肴館祝以下如常子良館祝並子良之節等如常

外宮神拜

次外宮參予三四五六七八九十權任守成氏賢經貞泰春守泰俊守榮經平守  
誠公文所兼音與本政所氏秀師秀忠親兼村次第如常但九守隆自門前退出其故

ハ千日參籠禁魚鳥仍不合歸立之饗此儀背神宮之法者也

二日神拜

二日內宮參如常

卯杖神事

六日初卯日卯杖神事宮守物忌行之供用下行如常

御籠木奉納神事

十五日御籠木奉納神事予三四五六七八九十如常但二經與服氣奉納ニ不  
合不削而由貴殿ノ軒ニ立置權任木五十七荷合點皆御堀倉ニ納予之祝七

八參水量五尺四寸

鍬山神事

神態

二月一日

雨

鍬山神事役人等山入時分宮司忠康神宮十人玉串大內人貞次着

座一殿內外物忌等方々神態以後着座于時一方之副物忌御盃ヲ居銚子ヲ

取テ予之前ニ蹲踞一薦向爲勸盃予之前ニ蹲踞シテ云子良館葺料無沙汰

之間不可參司中勸盃之由也仍政所氏秀ヲ召件子細如何神事停滯不可然

之由司中侍藤倉氏ニ相尋氏則宮司ニ伺神事之障得不可然之間可致其沙

汰之旨領掌此旨物忌中ニ申合仍二薦興本司中勸盃配膳宮守副物忌參酒

肴次神態如常役人等指笠隔子机在九前可如何之由自酒肴雜掌所注進隔

子机者就造營自造宮所任例十二前被作進畢八長內人令奉行之彼ニ可尋

之由返答一前令紛失在十一前仍玉串ニハ以之机居件酒肴依雨降一殿良

角ニ立屏風營進之仍各着座寄前

晴

十一日神態神事十氏綱參雨溢之間於一殿行之饗膳無沙汰料田

十二日同神事十參中世古二郎兵衛之跡役沙汰以外間押之處主依重服不

參於以後者可致勤厚之沙汰之由佗申間用之又橋爪饗膳巡番七文字屋令

他行無沙汰無謂可被改役由也

晴

十一月十一日神態神事十氏綱參酒肴等令無沙汰仍手水モ不進云々

神態神事  
中世古二  
郎兵衛  
橋爪饗膳



御笠神事

晴 十二日、同神事、十參、諸役無沙汰、但有橋爪饗、尾崎麴屋沙汰、

〔一禰宜氏經神事記〕

○玖 神宮文庫所藏

四月十四日、御笠神事、十八參、次第

撰錢

如常、但御管自佐伊田(度會郡齋田)一荷ニ卅二抱備ヲ七抱下行、當年御管多間、八十蓋奉  
縫之由笠縫内八申、件管去七日自佐伊田持參、例飯五十文、霽朝飯臺御器庭  
ヲ給之由申、諸神領無其儀之由下知、近代悉依無下行不備、然ヲ可有下行旨  
觸承參之由、依五十文並彼是代卅文皆撰錢、霽朝飯ヲ喰セ、酒一度吞ス、件管  
或二百文、或以二百五十文賣之、煩不少、殊當年依無管、御事可闕之處持參所  
令然神慮也、

贅海神態

晴 六月十五日、贅海神態、二、五、八、十、予代 三代 七代 四代 六代 九代氏賢、永尙守賴、守誠、定榮、氏世、鹿海、小濱之海

士等勤厚也云々、件鯛一(喉力)鯨、予料、家司持參、七守則神主ハ、雖加灸穢、今日過明  
間、任近例代官ヲ進、

御占神事

同夕、與玉神態、予、二、三、四、五、六、八、九、十、與玉神態ノコト出ダス、次御占神事、同衆從、

篠島御贅

召立兼村、玉串ハ 眞重參、  
晴 十六日、篠嶋御贅鯛昨日不參、今日早旦備折檻之處、檢扶富士參、仍代官無沙

汰云々、

宮比矢乃  
箒神事

晴 十八日、内御神態、宮比矢乃箒神事、予、二、三、四、五、六、八、九、十、大物忌父兄部尙重、

荒祭宮神  
態

申大内人物忌與本、兼元時忠等者令退出云々、自由子細也、次荒祭宮神態同  
衆從、

宮比矢乃  
箒神態  
荒祭宮祭  
禮  
懸力稻

九月十八日、宮比矢乃箒神態、荒祭宮祭禮、予、二、三、四、五、六、七、九參、予ハ夕退出、  
懸力稻下給、

晴 十二月十八日、宮比矢乃波々岐神態、予、二、四、五、六、七、八、十、宮守物忌弘盛、俊重、  
同副、

次荒祭宮祭同衆、但大物忌尙重、御前自退出時分馳參、

〔一禰宜氏經神事記〕

○玖 神宮文庫所藏

六月十六日、同夜御饌、次瀧祭、宮祭、

瀧祭  
櫻宮祭

晴 次櫻宮祭、次曉御饌、予、二、三、四、五、六、八、九、十、供奉次第如恒、

瀧祭神態

晴 十九日、瀧祭神態、予、二、三、四、五、六、八、九、十、從、在酒肴、

祭歟 九月十九日、瀧祭禮、予之酒肴送館、

晴 十二月十六日、同夜御饌、瀧祭神事、櫻宮神事、曉御饌、予、二、三、五、六、七、八、十、從、

晴 十八日、同夜瀧祭祭禮、予、二、五、六、七、八、十、從、在酒肴、



瀧原並兩宮幣使

〔一禰宜氏經神事記〕

○玖 神宮文庫所藏

六月廿二日、瀧原並兩宮幣使、九守

隆參、

瀧原並兩宮祭禮

九月廿二日、瀧原並宮祭禮、六守氏代守榮參、依連日雨洪水、柳瀬ヨリ通七丁、ケ歟

十二月廿二日、瀧原並宮祭禮、八經房參、

八王子祭

〔一禰宜氏經神事記〕

○玖 神宮文庫所藏

二月廿四日、八王子祭、十參、

八月廿二日、八王子祭、予參、中世古物忌營沙汰、雨神事時分晴、夕又降、

山宮祭 木目神事

〔一禰宜氏經神事記〕

○玖 神宮文庫所藏

三月十六日、山宮祭、木目神事、八經

房神主參、

四月氏神祭

〔一禰宜氏經神事記〕

○玖 神宮文庫所藏

四月六日、初申、氏神祭、雖爲三永量

地祭

神主巡番、老體乘馬依難叶、八經房神主參勤、大物忌父尙重是預所雜掌也、地

祭物忌父時忠參、

十一月氏神祭

十一月四日、初申、氏神祭、十氏綱參、物忌尙重、時忠神事如常、

興玉神態

〔一禰宜氏經神事記〕

○玖 神宮文庫所藏

六月十五日、同夕興玉神態、予、二、三、

興玉祭 御占神態

九月十五日、興玉祭、予、二、三、四、五、六、七、九、玉串代貞久從、次御占神態同衆召立、

兼村讀進、

十二月十五日、興玉神態、予、二、三、四、五、六、七、八、十、玉串貞重、次御占同衆、召立兼

村、

六月月次祭

〔一禰宜氏經神事記〕

○玖 神宮文庫所藏

六月十七日、月次祭、宮司忠康、神宮

予、二、三、四、五、六、八、九、十、玉串貞重、物忌父等如常、予東寶殿、御鑑ヲ給、然而段

階危、其上御鑲不輒之間、二神主ニ與奪、二以下各辭退、仍十氏綱供奉、一殿並

御遊、六、八、十參、次第等如常、但御遊事、原役人中ヨリ注進云、雖不存子細、自宮

河關所追返間、參勤不可叶之由也、雖然琴姓、歌元、鳥名子等大略參、但笛姓不

參之間、可有御遊否、如此之諸役人少々雖不參、可遂神事之由、上古被下綸旨

畢、又外宮有無宮司ニ相尋之處、被遂御遊之由也、仍在之、於向後四所不參者、

不可有御遊歟、縱少々雖參、歌元内人參、十二、歌ヲ不奉仕者、難遂歟、能々可有

思慮子細也、御大内人ハ自津布良一人參、貞治六年有勅裁、雖不參、役人可遂

神事之由也、仍氏顯代雖四所不參、在御遊、

文安六年六月、琴姓雖不參、遂御遊畢、

永享十二年、庚申六月、四姓不參、然而任近例等可有御遊之處、鋪設、酒立等不參、

貞治六年 勅裁

役人不揃 雖毛御 遊ヲ行フ



十二月  
次祭

仍退出、  
十二月十七日、同夜、月次祭、宮司忠康祗承時延、予、二、三、四、五、六、七、八、十、御遊八、  
十、御火役一人  
來、請用也、

月讀伊佐  
奈岐兩宮  
祭禮

〔一禰宜氏經神事記〕  
○神宮文庫所藏  
六月十九日、月讀伊佐奈岐兩宮祭  
禮、十氏綱參勤、在饗膳、

九月十九日、月讀宮祭禮、七守則參、

十二月十九日、月讀伊佐奈岐祭、十參、在酒肴、

小朝熊宮  
祭禮

〔一禰宜氏經神事記〕  
○神宮文庫所藏  
六月廿日、小朝熊宮祭禮、予、二、三、四、  
五、六、八、九、十、物忌父從、祝權長不參、仍彼役出納等勤、無酒肴、

九月廿日、小朝熊宮祭禮、予、依父遠關日不參、

廿一日、交替二番文番師秀、予、潔齋遲々、仍不參、然而昨日小朝熊饗膳里宿  
二送、每年役所別儀也、十神主分ハ不送、

十二月廿日、朝熊宮祭禮、予、二、三、四、五、六、七、八、十、酒肴送館、

〔一禰宜氏經神事記〕  
○神宮文庫所藏  
六月廿五日、風日祈宮祭禮、十人從、  
酒肴送館、

風日祈宮  
祭禮

九月廿五日、風日祈宮祭禮、予、三、四、六、七、九、從、酒肴無沙汰、二經興神主ハ、自廿  
四日犬死穢、

十二月廿五日、風日祈宮祭禮、予、二、五、六、八、十、從、御火内人不參、同宮役館御概勤  
之、別儀、

節分  
立春

今夜節分、仍各祗候宿館、廿六日立春、遂神拜退出、

伊雜宮祭  
禮

〔一禰宜氏經神事記〕  
○神宮文庫所藏  
六月廿五日、伊雜宮祭禮、十氏綱代  
永尙參如常、

九月廿五日、伊雜宮祭禮、五守朝神主參、

十二月廿五日、伊雜宮祭禮、七守則代守賴參、

輪越神事

〔一禰宜氏經神事記〕  
○神宮文庫所藏  
六月卅日、輪越神事、予、二、三、四、五、六、  
七、八、九、十、洪水間一鳥前居脫カ、河列向烈坐布向、洪水間例所ニ行事不叶、仍於爰  
越之例也、月是暴風雨ノ條ニアリ、先鳥居西河端ニ麻ヲ立、家司常延向河御祓勤  
仕之後、各手兩端、其後家司麻ヲ次第ニ奉振掛、又如元立置、於鳥居左柱前奉  
越輪、家司北向禰宜南向各越畢、出納兄部輪ヲ抱、鳥居砌、於置石之西子良母  
良物忌等ヲ越、于時各退出、神拜ハ思々也、其後出納輪ヲ館ニ持來、家子殿原



中間以下ヲ越、在一獻、其後輪ヲ里ニ持參、女中君達ハ家司越進、下様ハ出納

柏流神態

七月四日、柏流神態二、三、四、五、七、八、九、十、從杉山不法、仍無衆饗、予ハ依雜熱不

拔穗神事

參、六、ハ母遠闕日、九月十四日、拔穗神事、六守氏參、在酒肴、拔穗御稻奉持祝當年三人參食、五文

竈拔河原祓

宛下行、〔一禰宜氏經神事記〕〇玖 神宮文庫所藏 六月十六日、晴 御巫內人各宿館之竈被勤仕ス、其後河原祓、予二、三、四、五、六、八、九、十、玉串貞重、物忌等如掌當歟、次神拜一同、祇承兼音御稻奉下、予參、皆從、

九月十六日、河原祓、予二、三、四、五、六、七、九、玉串代貞久、於一殿行、次神拜、三永量ハ退出、御稻奉、予皆從、

十二月十六日、御巫竈祓、次河原祓、次神拜、祇承兼音御稻奉下、予皆從、九人、

若菜御饌木闕乏

〔一禰宜氏經神事記〕〇玖 神宮文庫所藏 正月七日、若菜御饌、予三、四、五、六、七、八、九、十、供奉次第如常、御饌料御竈木拂底之間、忌火屋殿ハ薪二荷荒祭忌火屋殿ニ一荷下行、

桃花御饌洲走

三月三日、桃花御饌、予二、四、五、六、八、九、十、玉串貞次、神事下行如常、但無洲走間、其代ニ名吉一下行、酒肴送館、

名吉

五月五日、菖蒲粽等御饌、予二、三、四、五、七、八、九、十、參、玉串內人不參、相鹿瀨山芋(度會郡)等不備、神事次第如常、但依一殿葺破損、酒肴送進、

菊花御饌

九月九日、菊花御饌、予二、三、四、五、六、七、九如恒、

御饌腊

十二月十七日、預御饌腊、九守隆神主爲灸穢間行水、竈ヲ是ハ可納之由被申被送、然者御饗竝腊等可爲同前、不及其沙汰不審、

御神田禰宜守隆千日參籠

〔一禰宜氏經神事記〕〇玖 神宮文庫所藏 五月十九日、御神田禰宜九人、九守隆ハ千日參籠、權任守成、永家、氏倍、氏賢、經貞、泰春、泰俊、守誠、氏林、守賴、氏繼、經彦、經任、守顯、經德、守晨、守辨、公文、所兼音、與本、氏秀、政所、尙重、忠親、師秀、兼村等也、

常番長依指合、俄警古之間、七折目歌首計申、寬正五年御神田如此云々、〔一禰宜氏經神事記〕〇玖 神宮文庫所藏 正月十一日、番文予三、四、五、六、七、八、九、十、加判、番兼音交替、予皆從、祓事、

〔一禰宜氏經神事記〕〇玖 神宮文庫所藏 正月十一日、番文予三、四、五、六、七、八、九、十、加判、番兼音交替、予皆從、祓事、

番文 禰宜等加判番組



子良館葺

二月一日、雨、頻降間、予ヲ不相待十氏綱神主交替參、番文番尙重、予十加判、以出納各宿館ニ送進、三永量神主遲參、宮司相待之間、雖無彼判、調政印司對面、二經輿如常、宮司忠康着束帶參、依三神主指南、直衣冠之大物忌、一臈來申云、子良館葺料、宮司ニ致催促之處、令秘計、可有沙汰之由、申間數ヶ度催促、刻致十月所務之間、十月ニ自前宮司方(氏長)可請取處、無其儀條、無沙汰之至也、當方不可沙汰之由申、每年月迫ニ沙汰也、無沙汰者、今日宮司之勸盃配膳ニ不可參之旨、物忌中儀定由申之、

晴 十一日、番文十八加判、番師秀之代兼村、交替予皆從、

晴 三月十一日、番文予、二、四、五、六、八、九、十加判、番兼音、交替予皆從、

晴 廿一日、番文予、二、三、四、六、七、八、九、十加判、番兼音、交替予皆從、

晴 四月一日、番文十人判、番尙重代師秀、交替予皆從、依狐荒長共申沙汰、予之館ニテ万度祓、在朝飯、予筒一のしハ出、伴朝橘屋館火付則打消、其後於四禰

宜館万度天下祈、開白指南、

晴 十一日、番文予、二、三、四、五、六、七、八、九、十加判、番師秀、交替皆從、祓事在之、御內掃

除、

氏經萬度  
祓ヲ其館  
ニ行フ  
橘屋館失  
火

廿一日、番文番忠親、依違例、令失念不參之間、先神拜、交替十人從、其間ニ尙重

番文ヲ(整力)勸進、予十加判、以番出納各進宿館、進被加判、

晴 五月一日、番文予、二、三、四、五、七、八、九、十加判、番兼村、交替皆從、

雨 十一日、番文予、二、三、四、五、八、九、十加判、番兼音、交替予皆從、

晴 廿一日、番文予、二、三、四、五、六、八、九、十加判、番興本、交替予參皆從、

晴 六月一日、番文予、二、三、四、五、六、八、九、十加判、番尙重、交替予皆從、

小雨 十一日、番文予、二、四、五、六、八、九、十加判、番師秀、交替予皆從、

晴 廿一日、番文予、二、三、四、五、六、八、九、十加判、番兼村、交替予皆從、

小雨 七月一日、番文予、二、三、四、五、六、七、八、九、十加判、番兼音、交替予皆從、

晴 十一日、番文予、三、四、五、六、七、九加判、番興本、交替予皆從、○中略、氏綱妻死去、條病ニ收ム、仍皆不參、忌也、然間御祓事相延、

晴 廿一日、番文予、三、四、五、六、七、九加判、番尙重、交替皆從、

晴 八月一日、予、四、五、六、七、九神拜、廳舍番文書等如恒例、三永量神主者少雜熱在

之、仍外院神拜、雖然着廳舍被加判、此儀可爲如何樣哉、二、八、十神主ハ番文吉

書ヲ送館被加判、番師秀、宮司忠康雖參番、二神主服氣、當時無番代沙汰、仍無

神拜



對面

十一日、交替二、番文二、四、五、六、七、九加判、番忠親代、

廿一日、番文予、二、三、七、九加判、自餘送館加判、但八神主ハ不參、番兼村代與本、

交替予、二、三、七、九從、

九月一日、番文予、二、三、四、五、六、七、九加判、番與本代兼音、交替予皆從、八、十於

內加判、

十一日、交替六、番文二、四、五、六、七、九加判、番尙重予ハ夕參、

十六日、物忌父等申、例式宮司エノ狀ニ加判、並目六之連署ニ加判、但一人、

十月一日、番文予、二、三、四、五、六、七、九、十加判、番兼村、交替予皆從、不被司對面、御

綿奉納、九守隆參、予語、

十一日、番文予、二、三、四、五、六、七、八、九、十加判、番兼音、交替予皆從、在祓事、

廿一日、番文十八加判、番兼音、交替皆從、

十一月一日、番文十八加判、番尙重、交替予皆從、

十一日、番文予、三、四、六、七、九、十加判、番師秀代兼音、交替予皆從、五守朝在灸、

廿一日、番文予、二、三、四、六、七、八、九、十加判、番兼村、交替予皆從、

御綿奉納

賀茂社日  
供

十二月一日、番文予、二、四、七、八、九、十加判、番兼音、交替予皆從、

十一日、番文予、二、三、四、五、六、七、八、十加判、番與本代兼音、宮守新物忌俊始從交

替予皆從、

廿一日、番文予、二、三、四、五、六、七、八、十加判、番尙重、交替皆從、

〔賀茂社諸國神戶記〕  
乾 栗栖郷上村

應仁二子年十一月、自上番、文明元丑年十一月至上番、日供引違之事

合貳佰漆拾參貫漆佰伍拾文之內

納合

一、伍拾肆貫文、自去年十二月晦日當年至御服錢、自鴨井方請取之

一、伍拾貳貫陸佰肆拾文、近郷來納請取之

一、壹貫七百文、岩倉上村兩郷夏麥代

一、六貫陸拾四文、下村郷米參石三斗六升六合九夕之代

一、玖貫文、岩藏郷米伍石貳斗之代

一、壹貫四百捌拾文、松崎郷米捌斗貳升三合之代

一、壹貫文、上村郷米五斗二升五合之代

文明元年雜載



稻荷社撫物

已上百貳拾五貫捌百八十七文

〔東寺長者補任〕

五 長者前大僧正嚴寶 三月廿三日、稻荷御撫物、二神主公歲代公之於影前別當執行ニ出合テ、以中綱定金渡之、

〔東寺長者補任〕

用集所收 應仁三 丑 三月廿三日、稻荷社御撫物二、自去西院內、後ニ寶藏ニ奉入之處ニ、神主公歲代官子息公之參西院之、仍御撫物二

取出之、別當法印宗壽、寶輪院、執行權大僧都榮增兩人出合、於影前以中綱定全法橋于時一膳渡之、委手日記アリ、

〔東寺私用集〕

一、近年稻荷祭禮遲々、又延引事、

一、同三年 丑 三月廿二日、稻荷無御出之、其子細者去年御輿散在ノ衆御本地

ヲ御輿ニ奉入、猪熊御宿所處ニ納之、戰亂ニヨリ、御本地ヲ寺家ニ預ケシ

リ、エタ太頭ノ人十一人申事ハ、御宿所ニ御座ノ間ヲ可存知之由、本社ト相論

不事行、依之延引也、又去年ノ御撫物二、御正昧也、委記別有之、三月廿二日自寶

藏ニ奉取出之、神主白砂公歲代官子息權禰宜公之ニ、於影前別當宗壽法印

並執行榮增僧都奉行ヲ至テ、中綱以定金法橋公之ニ渡之、是ハ總大工方ヨ

之、又一ハ五條町ノ橋屋ヨリ觀智院ニアツクル分ハ、自觀智院公之ニ被渡

稻荷社本  
地ヲ猪熊  
宿所ニ納

稻荷祭禮  
中門御供  
頭役

之、

〔廿一口方評定引付〕

〇山城 二月廿一日

一、稻荷祭禮中門御供頭役之事、乘琳就辭中綱彼頭役之事、中綱之巡薦次 仁

可爲沙汰之由、爲兩職堅可有下知之由別當エ可申云々、

三月朔日

一、昨日 晦日 執行別當來臨、宣說云、稻荷祭禮中門御供頭之事、可差中綱次頭

人之由有下知之處、中綱申云、彼頭役之事遠次第 仁 差催之間、爲淨林之由

申畢、雖然淨林兎角難澁仕之由依申、又淨林於召出、難澁之儀不可然之由

爲兩職下知之處、淨林申云、寺住之人爲遠次第之間、私之事 〇久離寺之間

遠次第之儀与申條、無謂子細也申、不隨下知之間、爲供僧中可然樣可有御

成敗云々、此子細披露之處、爲兩職任理非可有下知云々、

同三日

一、中門御供頭役之事、執行別當被申子細令披露畢、

同五日、科

一、稻荷祭禮中門御供頭役之事、爲兩職被申之通披露之處、衆議云、理非樣不



及覺悟之間爲兩職任理非可有成敗云々、

十二月廿四日

一、稻荷中門御供頭役之事、及闕所之處、爲中綱補之、仍可備御札之由申子細披露候處、自春此題目供僧中不可有存知之由、兩職ニ返答之間、所詮爲中綱領主ニ可申之由可有返答云々、

〔見聞雜記〕

記○歷代殘闕日

一、十二月廿一日、稻荷中門ノ御供別當へ送分、

餅折一合、三百十一切定、一膳雜羹、梅干、コ、御箸又、一膳小折四合、シ、花油物、小饅、御

蓋、薄折敷置也

〔廿一口方評定引付〕

○山城

八月十五日

一、本方放生會延引之事、執行宣說云、此兩ヶ年者涯分致祕計、雖爲取沙汰、於當年者方盡之間、所詮夜叉神方收納以後、可取沙汰、御延引有者可爲本意之由、被申通披露之處、無人之間、明日可催申科之評定之由衆議畢、

同十六日、科

一、本方放生會延引、佗事之通重而披露之處、無謂佗事被申之間、所詮廿日以前、可有取沙汰之由、爲別當代執行方、可被申之由、以公人別當代、可

東寺八幡宮放生會延引

申云々、

〔經覺私要鈔〕

九六十

四月廿三日、丁丑、天曇風

一、古市胤榮來、トニカ、長柄ノ民、福智堂ノ民ト確執ノコ、其次申云、今月一日者大和祭也、神輿御幸之時、於御輿內以外鳴動、是奉昇者共消魂畢、又御輿於奉昇居所、其在所如以前振動之間、氏子共怖畏無極、柄下同長柄並福智堂共以布留鄉也、又布留拜殿奉懸三又九筋切云々、是又以外希事也、仍長柄、福智堂煩面々怖畏之處、先屬無爲之條衆人悅也云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

九三十

四月七日

一、小五月錢六十七貫文進上如去年、此外奉行以下方如例、

廿四日、雨下

一、當年小五月會可有始行旨、自奉行方仰遣龍花院一薦所了、得其意云々、

五月五日、雨下

一、小五月會猿樂、宇治七郎次郎殿(一條兼長)下昨日より御座、鷹司前殿(房平)下入御、一獻御後見進上之外、折以下用意之、御手長式部少輔、侍從、大納言、律師、每事如例也、自昨日雨下、自日中晴了、庭大水也、仍仕丁九ニ腰懸木給之了、故實也、

小五月會猿樂

小五月錢

大和祭



七日、雨下

雨ニ依リ  
小五月會  
ナシ

一、今日依雨下小五月無之、祿物廿五貫今日皆下、

九日

一、社頭小五月會猿樂在之、

十日、雨下

一、榎本小五月會如例、

榎本社小  
五月會

〔經覺私要鈔〕六十 五月四日丁亥霽

經覺小五  
月會ヲ見  
ス物セント

一、自禪定院以孝承被申云、明日小五月會、可被來見物哉云々、返答云、態御使

悅入候、老躰之間長座難合期候、然而無指合者、雖片時參候て可見物之由

申遣了、孝承申云、鷹司前關白殿可有入御云々、可相意得由返答了、

五日戊子、雨

會式

一、自門跡被申送云、今日會式依雨可延引歎由存之處、自日中屬霽間、既欲初

可來見之由被申送、又自殿下別而被仰候旨、隨心院巖寶僧正被送狀、其後

又被馳人懇被申送之間無力剃髮、輿昇事仰古市罷出了、予コメノ一重片

山彌三郎、松若、覺朝來、仍召具出了、既被始能、愚老參之由申間隨心院候人

兼良房平  
經覺等見  
物

房平ノ兄  
西殿

等少々罷出招引間、大閣(兼良)樣御座所へ參了、其席四間也、大閣、鷹司前關白殿、  
房平、予三人、次間(尋尊カ)ニハ僧正、隨心院巖寶僧正、禪公、政覺、在永朝臣、御共、松殿  
侍從基顯、尊譽律師、清賢法橋、禪公、次西殿、鷹司殿舍兄也、先大閣、竝前殿申  
禮了、其後有一獻等、濟々藝々能八番了、給暇了、予又令還向了、

七日庚寅、終日甚雨也、

若宮殿小五月、甚雨之間定無之歎如何、

〔大乘院寺社雜事記〕九十 五月四日、雨下

一、明日神事方料理、上下北面致其沙汰了、

五日、雨下

一、神輿入御如例、

六日、雨下、日中以後

一、天滿猿樂如例、

天滿猿樂

〔大乘院寺社雜事記〕十四 八月九日

一、天滿夜宮去七日より、

十日

天滿夜宮



一、天滿神事、七鄉次郎太夫參申、藝能七番致其沙汰了、一獻如形仰付之、每事如常、奉行當番玄深付衣、自餘各小衣、殿下入御、雨氣之間於障子上致其沙汰了、兵士十市自餘猿樂不參了、

廿一日

一、去十日不參、猿樂藤次郎、守菊今日參仕了、每事如例、奉行玄深申沙汰、今日一獻出世間方、

麵一種一瓶 松林院

鳥子一種一瓶 佛地院方

麵一種一瓶 一切經納所

同 勅願納所

種々 一瓶 并承

同 同 緣舜

肴一鉢 繼舜

自餘各一瓶

果子一合一瓶清賢

折大小カ四合、榼一荷、京都衆被持之、

以上、

猿樂方御所果子、並瓶子二出之、御童子力者一瓶進之、

以上、

猿樂藤次郎守菊

御前衆 大間 (經覽) 寺務 予 隨心院 禪公 西殿 松殿侍從 大納言律師 龍光院

以上、

〔經覺私要鈔〕

九六 五月六日己丑、旦程雨下、巳刻霽、夕又雨下、事外甚雨、

於天滿有猿樂云々、

〔經覺私要鈔〕

一七 八月十日辛酉、寅卯刻山鳴了、風少吹了、

一、於禪定院有天滿神事、雖有音信長座難治之間略了、  
廿一日壬申、霽

一、自禪定院以狀申給云、天滿神事不參了、猿樂宇治藤次郎男、並盛喜久、神事可慙由申、可有見物哉之由音信也、老鉢出頭雖可有斟酌事也、徒然又無比類之間、爲養老情罷出了、予穀衣、香ケ一重、關白殿、予、僧正、隨心院嚴實僧正、政覺禪師、其外鷹司前關白殿、舍兄西殿尊譽律師、松殿侍從忠顯、僧龍光等也、藝能五番之後給暇了、於障子上沙汰了、

〔經覺私要鈔〕

九六 四月廿五日、己卯

天滿法樂、心經二十五卷、文殊少呪千反、融通念佛千二百反、留之、〇六月二十五日、

經覽兼良等、猿樂見物

天滿法樂心經



條、同文ナ  
ルニヨリ略ス、

〔經覺私要鈔〕

七十

七月廿五日丁未霽

心經二十五卷讀之、法樂天滿了、並文殊呪千反留之、

八月廿五日丙子、天未霽、但雨不下

一、心經廿五卷讀之、法樂天滿了、又文殊呪千反留之、又融通念佛千二百反留之、

九月廿五日丙午、霽

一、天滿法樂心經等、並文殊呪等如例、

〔大乘院寺社雜事記〕

九十

四月十三日

一、一乘院自今日參籠御社櫟本館云々、

十四日、雨下

一、社頭安居師英淳得業如此間云々、雖寺務相替、長者同御座之間、不及申出

長者宣參籠云々、○經覺、興福寺別當トナリシ、

六月一日

一、信承公自今日瓦屋參籠、當年三十講々師以後、則令參籠ハ、西座輩例也云

十六日

一、自夜前龍光院堯善、社頭ニ參籠了、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十

十月廿九日、雨下

一、當研學覺守得業、爲本談義屋談師參籠之處、一昨日中風斷入、俄ニ社頭ヲ昇出了、北角院坊主也、

一、英淳得業社頭參籠之處、召仕小者取天狗了、辰□時分より不見、戌刻歸參

四十九院、亡然相語云、笠置寺越智之笛吹山以下在々所々一日之内ニ遊

行云々、

〔經覺私要鈔〕

六十

四月十五日己巳、終日甚雨

一、當坊々主昨日歸來云々、伊勢七ヶ日令參籠云々、

十七日辛未、雨止、自日中霽了

一、自去十日神人春日社可參籠之由仰付之間、今朝退出之由申之、神妙旨仰了、用途百疋遣之由經胤申之、

廿七日辛巳、霽



經覺社參

明日可社參之間、從僧一人等身衣、指貫、御幣役上北面一人仰寬圓了、  
廿九日 癸未、霽、旦程雨下

一、昨日廿八日予參御社、付衣清賢法橋自車寄令供奉、等身衣、指貫、覺朝同召具力者  
少々在之、神馬一疋進之、名代祐遠啓白了、祝師同、寺中入堂了、

六月八日庚申

古市胤榮  
參宮

一、古市明日可參宮云々、仍織色青一端爲花向遣了、悅申云々、

〔大乘院寺社雜事記〕九十 五月十四日

一、土佐幡多御所より彦次郎上洛、兩社神馬代等被上之、マ千万疋引領松殿  
可下向旨被仰出、

一條教房  
土佐ヨリ  
春日社ニ  
納馬代ヲ

晦日

(教玄)

一、昨日一乘院社參、帳輿付衣、候人一人付衣、奉幣在之云々、御幣役人等無之、

六月九日、大雨下、電

八幡社法  
樂

十一日

一、新宮社ニ參詣了、

道祖神祭  
禮

〔大乘院寺社雜事記〕十四 八月七日

一、道祖神祭禮如例年、當國秋祭最初云々、  
廿八日、雨下

神坊遷宮

一、神坊遷宮今夜云々、每事清賢法橋沙汰也、

〔見聞雜記〕

記○歷代殘闕日 同十六日、寶泉院ノ鎮守三社ノ夏、充永僧都、時  
主坊今朝寶殿ヲ開テ拜見アルトテ語給ハ、西ノ方ハ稻荷、並十禪寺、中ハ熊野

寶泉院鎮  
守三社ノ  
神座

十二所權現、東ノ方ハ春日四所大明神、三社ノ様如此云々、

〔守矢氏舊記〕

○坤信濃 應仁三年丑花會

井上政滿

一、宮頭 小柳井上信濃守政滿、御符禮三貫三百文、御教書同前使三郎、御頭  
役二拾貫、

藤澤道政

一、御堂 箕輪藤澤遠江守道政、御符禮一貫八百文、使彌五郎

片切光爲

一、儀並 片切兵庫頭光爲、御符禮一貫八百文、使彌五郎、頭役二拾貫、

小田切高  
遠  
宮尾高重

一、前宮 窪寺小田切安藝守高遠、代官宮尾太郎兵衛高重、御符禮五貫六百  
文、御教書同前、使三郎、御頭五拾貫、御教書五貫六百六拾六文、神鷹神  
馬神長取候、



高梨政高  
原貞成

千田康信

河井胤景

五月會

三善義充

小宮山維  
貞

馬場信家

流鏑馬  
鳥羽信家  
廣川忠廣

須田滿位

一、宮頭 狩田高梨政高御符禮合五貫六百文、御教書同前、代官原貞成六、使孫、神鷹神馬代三貫文、井上依弓矢狩田此年不作候へ共、如此沙汰候、御頭役

五拾貫、○井上、須田戰ノコト、應仁二年、五月二十五日ノ條ニ見エタリ、御符九月

一、御堂 四宮千田源康信御符之禮五貫六百文、御教書同前六、使孫、御符九月

マテ預候爲其禮一貫文、御頭役三十貫、神鷹神馬神長取候、

一、礮並 河井下總守胤景御符禮三貫三百文六、使孫、御教書同前、頭役二拾貫、應仁三年丑巳五月會

一、左頭 上田太田三善義充御符之禮三貫三百文、御教書同前五、使與、御頭役

二拾貫、

上田御頭時、海野小宮山維貞五百文別而出之、(同前脫カ)

一、右頭 直里馬場信家御符之禮三貫三百卅三文、御教書六、使孫、御頭役二拾

貫、

一、流鏑馬 大倉鳥羽信家、廣川忠廣御符之禮三貫三百御教書同前三、使、御

頭役三拾貫、(佐力下)

一、矢島 與御頭延引之爲咤須田信濃守滿位、料足二貫文被出候六、使孫

小宮山國  
繁

入澤長助

矢島光友

御射山

大島政綱

深井滋滿

福澤信胤

松岡秀貞

宗像與氏

長門龜尾  
山八幡宮

一、大岩代官小宮山加賀國繁爲御頭延引咤事五貫六百文之禮三、使

一、前官踏入神維國加頭御符之禮一貫八百文六、使孫

一、五月會、入澤長助御符之禮三貫三百文六、使孫、頭役拾五貫、

應仁三年六月取來之

一、佐久矢島御符之禮一貫文、矢島光友御符上祝、

應仁三年丑巳御射山 此年成文明

一、上増 大嶋名子大島刑部少輔政綱御符之禮三貫三百文、頭役三貫文、名

子五貫文、大嶋使二、曾次

一、右頭 海野本郷代官深井肥前守滋滿御符之禮三貫三百文三、使、御鉾本

一貫三百、使一貫、御頭役二拾貫、

一、左頭 塩田庄代官福澤左馬助信胤代、初而御符禮合五貫六百六十文六、使孫

六、頭役五拾貫、御教書禮同前、神鷹神馬御教書禮、福澤信胤五貫六百六十

文、神馬代一貫五百文、四郎殿請取、

一下増 松岡兵部少輔秀貞御符禮三貫三百文上同前、御頭役二拾貫、

〔宗像記追考〕 七十一與氏 文明元年己丑補任、二十七年、

〔長防風土記〕 百九十阿武郡一吉部村 神祠 龜尾山八幡宮 岡田村二鎮



鍾銘

播磨男山八幡宮

赤松貞範守護神トナス

座

申上候支略○中

一、八幡宮鐘之銘、應仁三己丑二月ニ、氏子中ヨリ寄進有之候由候事、  
右享保四年亥四月、神主君谷數馬ハ書出ニ相見え申候處、其後燒失仕候由、  
只今御判物等無御座候事、

〔播磨鑑〕

播磨國社佛閣名所舊蹟 男山八幡宮 山井村ノ上ノ  
井上貢支配

此山昔は妹脊山と云、姫山に對して云とそ、此山の麓に流る、川をイモセ  
川と云、榊原政邦君城主の時、正徳年中雄徳山と改、八幡宮を勸請し給ひて、  
新に社を建、今に顯然たり、姫山の西の山を云、又麓の人家を山井村と云也、

略○中

一、貞和年中、赤松筑前守、姫山ニ初テ城墪ヲ建、此時ニ長彦山ノ神跡ヲ崇追  
シ、八幡宮ヲ崇祠シ、山井川邊采田五十石ヲ此宮ニ寄ラル、雄徳山ト名ケ、  
城中ノ鎮神トス、是當山八幡宮ノ興起ナルヘシ、社家ハ惣社祝リ目ノ次  
弟山井主水佐清秀幣振ハ、堀新之亟務之、本宮方地二間也、拜所島木鳥井

滿祐没落後衰頽ス政則之ヲ修造ス

下野示現太一郎神社 棟札 鹽谷綱好

供所等ヲ建サセラル、山境ヲ神地トス、イモセ川ヲ御手洗ト云、又宇野兵

大夫ヲ宮中守士トス、僧尼ヲ不入、是ヨリ十年餘リ此社有シニ、嘉吉年中

赤松滿祐落亡シ、山名家姫山守護ノ時ヨリ零落ニ及テ、社宮社田モ跡ナ

カリキ、其後二十餘年ヲ經テ、赤松政則姫山守護ノ時、後土御門院文明元

年己巳正月七日、斧初有テ、再ニ新ニ造營アル、方三間本宮應神一神ヲ祭

ラル、島木ノ鳥井ニ一尺拜所御供所ヲ立、采田ヲ附ラル、社司ハ山氏弟山氏

進之允重元、下役小松小太郎、木匠ハ藤原七郎右衛門、一色村棟領奉行志

水宮内也、其後又此社イツトナク古跡ト成、男山ノ本名ハカリニテ、雄徳

山ノ名モ失ヌ、其後池田三左衛門輝政君、新タニ八幡宮ノ社ヲ建玉フ、

〔新編會津風土記〕

百二十 下野鹽屋郡河 示現太郎神社 境内東西二

十五間、村西ニアリ、應仁三年ノ草創ナリト云、○中

棟札

天文十八年己酉五月十三日、惣戒師釋迦牟尼如來、大檀那鹽谷又四郎藤

原朝臣綱好、同老母彦木、前造宮應仁三年己酉五月廿八日、己酉ハ己丑ノ

〔異本塔寺長帳〕

原題長帳 四 文明元年己酉、下野國鹽屋郡中三依邑示現太

文明元年雜載



會津東光寺社修復遷宮

郎明神、五月廿八日祠建祭、會津羽黒山東光寺社共修覆、遷宮有、  
〔阿波國徵古雜抄〕  
祖谷山内所在古器物概略  
祖谷同所十二社權現棟札

阿波營生名十二社權現棟札

敬 金輪聖皇天長地久  
奉造立上蓋之事  
白 御願圓滿正長安穩

〔新編武藏風土記稿〕

麗郡八十三村 高 駒形社 天神地祇日本武尊

寸五分ニリシ銅ノ像ナリ見エカ、イッノ頃ニヤ失ヒテ、今ハ駒ノミ存セリ、長アリ、  
文明元年棟札ノ義ニ、將軍義政公御治世此邊兵火ノ爲ニ盡クア、リテ、以下ノ文字ノ分、  
時灰燼トナレリ又、ト云ヘリ、上下高萩院ノ鎮守ナリ、  
八月廿一日、一木戸之邊ニ京座ヲ

京座

〔一禰宜氏經神事記〕  
立、爲其禮地下若輩等參、  
八月廿一日、一木戸之邊ニ京座ヲ

武田政信

九月廿七日、鎌田上下事、武田兵庫助方へ遺狀、  
十月十日、五位弘吉代始政所申請之、

十一月十八日、宮下行如常、

十二月卅日、忌火屋殿ニ本ノマ、

佛寺、

〔大乘院日記目錄〕  
二月日、宗算爲別會、

別會 供目代

四月十三日、專心爲供目代、  
〔大乘院寺社雜事記〕  
九 三十 四月九日

三目代

一、三目代以下明日可有補任之由被仰出云々、寺務奉行事玄深寺主、繼舜法橋可沙汰旨、被仰付之云々、

十一日

一、昨日學侶使節宗算、寬專兩五師寺務へ參申、就番條間事、學侶評定等連々在之處、專心法師可被召供目代條、爲學侶難義也、其故ハ、專心ハ、番條之一門也、○以上ハ、既ニ六月六日ノ條ニ載、當職事、被延引可被召條、可畏入云々、御榼等代物持參申歟云々、寺務御返事ハ、供目代職事、自類中先途也、可被押之條、不便事也、所詮三ヶ日悅酒以後、速ニ可被辭退之由云々、此返事可然事也、但云則、云六方辭退事、可隨仰事、千万不審事也、然者次座又可

學侶專心ノ供目代ヲ難ズル



蒙仰事不可有、此條歸而可爲寺門物念之基歟云、供目代云、法用僧來十三日、可仰付之旨、被仰出世奉行尊譽律師了、

十三日

一、供目代職事、被仰付專心、於公文所召仰之鈍色五帖、出世奉行大納言律師、付衣五帖也、法用僧事、被仰付兼實付衣五帖、上首指合之間、次座兼實蒙仰了、寺務無御出、

一、專祐爲定衆了、堯順之部屋候了、

十五日、雨下

一、供目代悅酒同前、寺門物念時分無爲條珍重々々、

廿八日

一、供目代職事就番條之事、不可有私曲候之由、於寺家申入御請之間、職事先以不可有子細、學侶内々申入之由、先日寺家御物語在之、今日寺家内々御社參、御板輿、御付衣、直垂、力者少々被召放之、御幣役成舜、付衣、御幣紙以下、御後見沙汰如例、清賢法橋一人參向申入了、等身衣指貫、自餘無殊儀者也、一向内々儀略義也、

〔大乘院寺社雜事記〕

十四 八月五日

一、三藏會事來十六日必定之由、被仰出、○中供目代事、十六日會以後可辭退

申云々、○下

十八日

一、今日八月三日修之、供目代專心爲御代官、次辭供目代職了、

〔經覺私要鈔〕

九十六 四月七日、辛酉

一、法用僧專心號地藏院、圓實房云々職事相尋候間、今分大略可領狀歟、然者供目代事、可申付之由仰含了、

十一日 乙丑

供目代事、以古市歎申間、於寺門返事者、不可有楚忽之儀之由仰了、

十三日 丁卯

今日供目代事、於禪定院可召付之由、仰尊譽律師了、仍供目代專心、法用僧兼實參之由申賜了、

十五日 己巳、終日甚雨

一、導譽律師以狀申云、當供目代者、悅酒後可辭退申由承之間、召法用僧、兼實

專心供目代ヲ辭ス

當供目代ハ悅酒以



急可致悅酒之用意之由仰付候處、不日ニハ難事行之由申之、可爲如何樣哉云々、

十九日 癸酉、霽

一、法用僧事、急供目代用意於可沙汰之由仰遣處、常式五ヶ月間ニ可致計略內存之間、法用僧事則蒙仰了、然俄可用意之由承之間、迷惑仰天仕候、乍去聽可沙汰事者不可得事、可如何哉之由載紙面申之間、相副書狀可披露學侶之由、可仰出世奉行之由仰玄深了、

供目代專  
心辭退ノ  
事ニツキ  
フ何フ旨  
經覺ノ旨

一、供目代專心來裝束鈍也云々、供目代事辭退有無伺申云々、仍法用僧申趣仰聞、可依學侶左右之由仰含了、度々楯以下賜之間、出盃畢、畏申云々、  
一、法用僧兼實、以代官修學者、供目代延引事、猶歎申間事、子細令披露學侶、可仰左右之由返答了、

〔經覺私要鈔〕

十七 八月四日 乙卯、時々雨

供目代專心來申云、供目代事、三藏會十六日被始行上者、聽可辭申、被加御扶持可畏入候、樸楊講樣一大事、非器用身難治事之由歎申間、然者來十八日次座ヲ可召之由返答了、則以狀仰遣出世奉行尊譽律師者、法用僧兼實

專心三藏  
會以後供  
目代ヲ辭  
セシ  
出世奉行

長勝房可致用意由、可仰含之由仰遣了、

〔大乘院寺社雜事記〕

三十 四月七日

一、內山金剛乘院供六口之内、一薦供亮尊他界之闕分、定盛所望之、不可有子細、以任料可申出補任旨返答了、此供ハ任料増減隨宜補之、號一薦供也、  
先例圓重之闕分實慶ニ補之、七貫文進上、文安六年八月四日、實慶之闕分亮尊ニ補之、十貫文進上、康正二年十一月十五日、

〔經覺私要鈔〕

六十 四月十日 甲子

通目代補之、依爲候人遣松若了、涯分翫之用途一緒遣之云々、又補修理目代、(成身院)光宣法印遣北面良祐(順圓)遣了、別而翫之、檀紙一束、扇一本、用途一緒遣之云々、懇儀歎、

一、京南衆補之、并弘僧都宗秀僧都、寬尊律師、宗算五師、順懷五師、慶英、以力者遣之了、此內并弘僧都辭退之所、遣賢英得業了、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十一 十一月八日

一、京南衆事、去比權大僧都并弘、權少僧都宗秀、權律師寬尊、擬講定清、權講賢英、各被仰付之、畏入了、但并弘令辭退之間、其闕被仰付慶英法師、此在所事、

內山金剛  
乘院供

一薦供任  
料

通目代  
修理目代

京南衆補  
任

京南衆

并弘權大



上首次第二上田知行、慶英申分者、辨弘辭退之闕分也、仍如上首之知行、雖末座、上田可知行仕云々、此儀尤也、諸供以下闕分、依其身運不運、善惡ハ不謂上下事也云々、則可爲一番之由奉書申出之云々、依申沙汰定清之宗秀(マ)訴申入趣ハ、雖爲一年令知行、而以後事ハ誠以可入其闕條不能左右、各當年補任也、然者上首次第二上田等可知行也、自今以後者可爲其闕歟云々、此條又有其理者也、必可爲其闕者、申出奉書條、不得其意者也、只掠申故也、不便之由歎申入之、然者定清ハ可成三薦也、至三薦此田地無相違故、如此相論出來、前々不及其沙汰事也、所詮越田尻住人不法故、且近來無正躰者歟、此兩方相論事、寺務御成敗如何、重て可記之、

〔經覺私要鈔〕

六十九 四月十二日 丙寅

通目代任料可爲千五百疋由仰之處、近年大略千疋致沙汰畢、今更之儀迷惑之由歎申云々、玄深申之、

十四日 戊辰、天曇

一、會所目代任料事、以雜掌三千疋事歎申間、重々加問答了、貞和六年(大乘院孝覺)己心寺御房時被仰付子細等、委可申付之由仰了、永享三年第二度時少分致沙汰

了、任其例蒙仰者可畏入之由申云々、然者別而可申御禮云々、猶不可叶之由返答了、内々以經胤歎申者也、

十五日 己巳、終日甚雨

一、通目代任料事、今明可進之由、以若黨申給了、經胤申次了、

一、公文目代補任事、明日之由繼舜法橋被申云々、可得其意之由返答了、

十六日 庚午、雨猶下

通目代任料、且三百疋進之云々、

一、今日公文目代補之、並西金堂大行事同仰付繼舜上座了、使雖可罷向、以扶持之儀可閣之由申間、如然沙汰了、然而片山彌三郎用途一緒遣之云々、可爲可持向使故也、於西金堂大行事補任料者五百疋分所定也、然隆舜上座時三百五十疋、並楡一荷、素麵(第九)等以下進之處、今度以奉行號一向ニ可閣之由雖歎申、不可叶之由嚴密仰之間、三百疋可進之由申之間、則鐘木料ニ可下行之由仰付了、以三百疋勲下云々、

十七日 辛未、雨止、自日中霽了

略○上 又目代任料上分百疋明日可遣之由仰了、今日依爲大赤惡心故也、此



等分事遣御師祐遠雖可啓白事也、付神人職令口入子細在之處、乍領狀構  
矯立事在之間、尤以師事雖可仰餘人、神慮難側之間、如元雖置之、如此德分  
等事者、聊思知旨樣ニ所相計也、仍先遣神人可啓白之由仰之者也、  
一、辨舜權寺主來而、通目代任料員數等事歎申之間、加嚴密問答了、經胤申次  
了、

廿三日 丁丑、天曇風

今日會所目代補之、使印盛也、然而於印盛者只今罪科人也、仍寬圓ヲ遣云  
々、

被補會所目代、可令存知賜之由御氣色所候也、仍執達如件

四月廿三日

權寺主玄深奉

丹波寺主御房

廿四日 戊寅、雨下

略○上又岡負所補任料百疋進之、則遣千座講布施了、

廿七日 辛巳、霽

一、公文目代任料三百疋致沙汰之由畑經胤申之、

丹波寺主  
ヲ會所目  
代ニ補ス

岡負所任  
料

公文目代  
任料

狛野北職

五月二日 乙酉、天曇

一、狛野北職事、御房入道來色々歎申間、於職事者不可相替之由、申含東北院、  
令返答了、

六日 巳丑、且程雨、自己刻霽、夕又雨下、事外甚雨

一、山村武藏房堯善來、修理目代任料事有申遣旨、急可申左右之由仰遣了、

九日 壬辰、霽

修理目代任料事、就光俊成身院代官堅申含之間、涯分所及可致計略云々、又京

都へも申上云々、

一、田村初任料、古市半分以彦次郎分進之由申間、彦次郎ニ織色帷一遣了、畏

申云々、庄器五石餘云々、

十三日 丙申

修理目代々官顯春ト云者ヲ以テ、先再任禮於申、楯二荷進之、目代方任料

五百疋且進之云々、畑男令對合、可能盃由仰付了、

〔經覺私要鈔〕

十七 七月五日 丁亥、霽

寺務自專中鵠事、可爲賢秀幾勲由仰遣了、

修理目代  
任料

田村初任  
料



御分中藹

六日 戊子、齋

賢秀來、御分中藹事畏申云々、

十日 壬辰、齋

一、御分中藹事、被仰付上北面賢秀、可被成補任之由、仰遣學侶了、

十一日 癸巳、齋

一、御分中藹事、今日學侶集會披露了、仍無相違之間、定自供目代可遣補任歟、

學侶返事在之、遣堯勲方了、

一、供目代補任案文覺朝持來問寫留之、

補任 寺務御分中藹事

賢秀 堯勲房

右以人所補任如件、

文明元年 丑巳 七月十一日

供目代專心判

廿一日 癸卯、雨下、及數日了、以外也

一、賢秀中藹事、爲下藹分相支云々、是何事哉、不可說妄也、學侶既出補任了、可

寺務御分  
中藹補任  
案文

唯識講

在子細者可爲學侶之儀、下藹分何可相綺哉、沙汰外次第也、

廿五日 丁未、齋

一、堯勲中藹事、爲下藹分相支之間、於明日唯識講者可延引歟、由禪定院(政覺)僧正

内々有被申旨、然勸進事興發、心院泰尊舍弟泰俊房專堯迷惑之由、色々昨夜

歎申間、遣狀於禪定院、無殊德者、於唯識講者先可被行歟之由、仰遣處、さ程

有歎申旨者、先可被行歟旨、以狀被申間、目出之由、仰遣了、

〔大乘院寺社雜事記〕<sup>十四</sup> 七月八日

一、上北面賢秀可被成御手中藹之由、去五日以奉書自寺務被仰出畢、尤以可

然旨予仰付之、誠被寄思召條畏入者也、一昨日此旨賢秀言上了、

十一日

一、上北面賢秀中藹事、自寺務御披露、不可有子細之旨、學侶返事申入之、則供

目代圓實房專心成補任畢、百正遣之、定例當月唯識講、可新入者也、

〔經覺私要鈔〕<sup>十七</sup> 七月廿四日 丙午、風止、雨霽、但日中又少下

一、中綱慶乘專當可成中綱候、則自公文目代補任狀給之間、辰刻遣了、

〔大乘院日記目錄〕<sup>三</sup> 八月十九日、兼實爲供目代、

文明元年雜載

二〇一

御手中藹

慶乘專當  
ヲ中綱ニ  
補ス  
供目代



都維那

出世奉行

法用僧

北圓堂輪  
轉衆

十一月十六日、專祐爲供目代、於戒齋者專心之次也、  
十九日、俊嚴爲供目代、隆乘爲權都維那、

〔大乘院寺社雜事記〕十四 八月十九日

一、兼實法師今日被召供目代、出世奉行申付之、予對面、裝束申次之、瓶子一雙、兩種送進之、兼實ハ故貞兼僧正弟子也、

法用僧事、召仰俊嚴法師、去十六日、堅者也、俊圓大僧正弟子也、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 十一月四日

一、北圓堂輪轉衆事、兼實辭退、仍興實ニ仰付之、畏入云々、

十六日

一、供目代事、被仰付專祐、鈍色五帖、不經法用僧者也、

十九日

一、供目代職事、被仰付俊嚴法師、鈍色五帖參申、法用僧事被仰懷秀了、

〔經覺私要鈔〕十七 八月十九日 庚午、齋

今日召供目代於禪定院、可召仰之、由仰付尊譽律師了、法用僧□藝長信房供目代兼實長勝房、瓶子一雙、餅一折、蓮根等賜之、賞翫之、由返答了、

已心寺住  
持職

〔大乘院寺社雜事記〕十四 八月廿五日、雨下

一、已心寺住持職事、祐賢良秀房ニ仰付之了、

大安寺之内已心寺住持職事、如前住每事可有其沙汰候也、謹言、

文明元  
八月廿五日

(尊譽)  
(花押)

良秀御房

任料千疋事ハ、淨土寺借下方ニ可付遣之由仰了、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 十月四日

一、已心寺良秀房來、坊主初任千疋、並良均房申置云々、

十一月廿一日

一、就威德院一薦供事、如成敗宗春法師爲滿山二薦、閣一薦、舜忍爲供衆了、去年より種々問答、近日治定之了、次筒井内々申入之、二薦供闕出來候間、一薦舜忍ヲ可入之由事、内々御許可可畏入云々、巨細以堯善仰返事畢、

十二月一日

一、去月廿三日寺務御書被下、大納言律師方供目代以上數輩在之條不可然候、年中可任成業之由趣也、則召番中綱延重給彼御書、自長弘至光俊以口

文明元年雜載

二〇三

威德院一  
薦供

坊主初任  
料



修理目代  
所望

三日  
狀相觸之了、各畏入云々

一、修理目代事、貞覺所望申入歎云々、法隆寺小別當事、色々同所望仁在之云々、大略寺門輩就每事不送時分也、

補任

七日

一、安位寺殿ニ予參申御同道(大乘院)當院ニ入御、筒井參申修理目代事、明舜ニ被仰付之、但名代ニ良勝房擬講立之、補任料三千疋之内現物十貫進之、御使分百疋、此外御楹二荷種々進之、三ヶ庄安居殿居殿庄事ハ、御代官事筒井ニ被仰付之了、畏入了、又伊豆七條年貢事、可沙汰旨筒井請文進之了、

筒井順永  
安居殿莊  
等ノ代官  
トナル

八日

一、安位寺殿還御、

十六日

一、東御塔供奉承法印之闕分令補詮算了、去八月日付也、

廿二日

一、當年田樂頭役事、爲筒井沙汰兩頭分一度勤仕之、希有大儀也、仍助成十五

東塔供

田樂頭役

貫文遣之、畏入云々、

廿三日

一、二條源乘寺住權都維那事、一昨日所望、於公文所今日被仰付之、玄深申次之、但親父兼乘寺主參申承了、次款狀事兼乘捧之、不得其意、爲則躰分可捧之事也、

源乘ヲ權  
都維那ニ  
補ス

〔大乘院日記目錄〕

三 十二月廿三日、源乘、宣舜、各爲權都維那、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四 十二月廿四日、雪下

一、詮算供任料且二貫文進之、蓮花院供僧事、色々子細有之、六方種々取沙汰、可止勤行云々、

廿六日、立春

一、金剛乘院一薦供亮尊蓮教之闕分、被補定盛、長圓繼舜法橋書上之、

晦日

一、北圓堂供、泰承法印之闕分補守弘、

〔廿一口方評定引付〕

四 〇山城

六月八日

文明元年雜載

北圓堂供

金剛乘院  
一薦供

供任料



一、民部卿律師供僧職與奪侍從公之間之事、讓與狀之旨致披露之處、領狀之由可申云々、仍仁和寺御舉之事、亂中之間如何之間、此子細重而調衆可披露申之由衆議畢、

同十一日

一、仁和寺御舉之事、致披露之處、去年既御舉無其煩出上者、如先規被申者可然之由、衆議畢、

一、供僧職補任未補之間、近年之儀、北面之朝夕雖被免之、所詮於自今以後者、如往古軌式縱雖爲未補、於評定並朝夕者、可有出仕之由、衆議治定畢、

〔廿一口方評定引付〕

○四山城 二月十三日

一、寶光院依窮困拜堂難沙汰之間、所詮亂中之間、有延引者可爲本意之由承之通披露畢、仍可催申科之評定云々、

同十四日

一、寶光院拜堂延引之事披露之處、其議不可叶之由、衆議畢、

三月四日

一、寶光院僧都拜堂之事、今月中<sub>仁</sub>可爲沙汰之處、依窮困無其了簡之間、所詮

寶光院僧  
都供料缺  
乏ニヨリ  
拜堂延引  
ヲ望ム

寶光院拜  
堂延引

迄于當年々未有延引者、可爲本望之由被申通披露之處、無人之間可催申科之評定之由、衆議畢、

同五日、科

一、寶光院拜堂之事披露之處、依亂世供料等有無實之間、任佗事之旨、可有延引十一月之由可申云々、然者此旨可被出書狀之由、衆議畢、

十一月廿一日

一、寶光院拜堂延引之事披露之處、重而可披露申之由、衆議畢、

同廿七日、科

一、寶光院拜堂之事、依無供料、來年冬<sub>エ</sub>延引之事、佗事被申間之事披露之處、所詮當月中<sub>仁</sub>以半分儀可有沙汰、殘半分者來年十一月中<sub>仁</sub>可被出、然者此旨以請文可被申云々、次就拜堂之儀、一段<sub>与</sub>可及御沙汰、追而可披露申之由、衆議畢、

同廿九日

一、就寶光院拜堂儀、兩座訴訟之趣披露之處、衆議云、拜堂下行物當月半分、來年十一月中<sub>仁</sub>半分可有下行之由、供料等一向依其被定置之處、難隨其役

拜堂供料  
ヲ二期ニ  
納メシム

拜堂供料  
ヲ納メズ



之由申之條曲事也、所詮訴訟之趣、一切不可有許容、堅爲兩職可有下知之由可申云々、

同晦日

一、寶光院拜堂之事、一圓仁無下行者、不可隨其役之由、兩座訴訟申通披露之處、衆議云、以中庸之儀如此被定之處、緩急之儀申之間、所詮拜堂之事、可有延引之由衆議畢、

〔見聞雜記〕

〇歷代殘闕日記八十四所收

一、十二月廿日衆議云、地頭方奉行、來年ヨリ可

被付十八口方治定了、

〔尋尊大僧正記〕

二 廿日

一、三藏會放請、俊嚴法師、懷秀法師兩人今日給之、別會職事宗算五師云々、各□□□律師申次云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

九 三十 五月九日

一、三藏會事可有始行間、學侶集儀議狀到來、三階業無之故云々、對出世奉行書札恐々と書之、不可然事也、成業之時猶以恐惶也、況僧綱也、比興事也、但筆師越度歟、

三藏會放請

學侶ノ出世奉行ニ對スル書札例

學侶三藏會始行ヲ促ガス

大會並溜州會

六月廿六日、雨下、大風

一、就三藏會事、自寺務御書到來、巨細令言上了、自學侶始行事催促申入云々、法用僧外三階業無之故云々、

廿九日

一、安位經覽寺殿、東南院殿ニ御成、一日御會云々、夕方還御次令成給、大會、並三藏會、溜洲會等事被仰出之、三藏會捧物事、吉殿庄沙汰也、近日播州事不及是非、爲學侶可沙汰哉否哉被仰出候、無爲難治定者、不可奉行旨別會申入云々、如今者珍事々々、

〔大乘院寺社雜事記〕

十四 八月五日

一、三藏會事、來十六日必定之由被仰出、仍僧綱已講以下出世奉行相催之、別會供目代方同申遣云々、供目代事、十六日會以後可辭退申云々、〇供目代補任ノ條ニ收メタリ、仍十七日新供目代事可被召之由治定、

七日

一、三藏會堅者俊嚴懷秀被秘請了、於公文所放請之、各付衣五帖出世奉行尊譽律師同、

三藏會堅者俊嚴懷秀



禪定院ニ  
於テ三藏  
會ヲ行フ

十五日

一、(安位寺經覺)寺務入御、明日三藏會被仰置之、

十六日

一、於禪定院下御所、三藏會始行、奉行繼舜法橋、鈍色五帖表袴、本等身衣指貫也、堂場料理等昨日今日致其沙汰、御承仕專祐、良祐等沙汰也、寺務無御出仕、條々蒙仰之間、予每事仰付之、佛前果子六坏、目代沙汰也、小目代等備進之、佛供二坏、各一升宛仰付、上番御承仕備進之、僧綱已講、成業、果子等懸盤也、小目代備進雜掌歟、豎問座同、但八足ハ自寺務用意、道場等所々正燈等承仕備進之、油通目代沙汰也、燈心御後見、油土器三度入二三十給之、瓦硯二面悉皆亥尅會始之前、別會定清先出仕、次供目代專心、法師出仕、次法用僧出仕、次已講出仕、次僧綱、權律師尊譽出仕、次唄師龍花院以下出仕、次講談登高座、講問以下如例、次一献並次豎者儀如例、新供手長等、僧綱手長孝承、役送泰坊已講、手長秀深、役僧同、成業、役僧、寺務並小中座無出仕、殊更於小中座者無其體之間、不數小中座者也、寺務座果子無之、

一、豎者俊嚴法師

精義寬專五師

問者定寬 榮空 弘 興弘 實

二、豎者懷秀法師

精義順懷五師

問者覺專 訓弘 詮算 訓英 兼祐

講師實心已講 問者兼實法用僧

唄宗算五師 龍花快弘

講師有尊

小中座良家成業無其躰之間、不被相催之、希代新儀、無力次第也、任俊大納言得業定在京之間、不能出仕者也、役人事人數不足間、東南院殿侍秀深

上位寺主被召之了、

〔經覺私要鈔〕

九十六 六月九日 辛酉夕立

自學侶以狀申云、三藏會事、今月廿三四日可被始行云々、然者庄役料紙吉殿事被仰付給主、可有催促候、寺門引違者不可然候、

廿五日 丁丑

文明元年雜載

吉殿莊役  
料紙



藏會影供廻請早々可成之由仰遣定清畢使返云、依所用山内逗留云々、  
(三カ)  
〔經覺私要鈔〕十七 七月九日 辛卯、齋

一、就三藏會事、自學侶有申旨、以前者吉殿庄役料紙事雖延引、先可始行之由申、只今モ無料紙者、不可有始行由申給之間、返答云、兩度書狀大令相違候、以何可爲本哉、不得其意之由御返答了、

十日壬辰、齋

一、就三藏會事、學侶狀繼舜進之、

十六日戊戌、齋

一、自學侶在書狀、三藏會事來廿二三日頃可沙汰、並吉殿料紙事、爲寺務引違可沙汰之由申賜了、

十九日辛丑、齋

一、就三藏會事、有學侶書狀、

八月十五日 丙寅、齋

依重氣此間不罷出、然而明日三藏會可行之間、爲申談向禪定院、予細美直綴裕、直兩瓶一折遣了、條々申授、

十六日 丁卯、齋

今日於禪定院三藏會可在之間遣畑了、巨細者昨日雖申含僧正、爲自然遣了、又念事モ在之、

一、於禪定院行三藏會、供目代專心、圓實房、影供奉行別會、去年也、定清擬講、奉行繼舜法橋、非大納殿寺、務奉行也、等身衣表袴、モケサ、

一、僧綱出仕、尊譽律師少中座無其躰之間不催云々、仍疊ヲモ不敷歟、可尋座始已講定清擬講、

一、役人事、僧綱手長孝承寺主、鈍色五帖、毛表袴、已講手長東南秀深寺主、鈍色、指貫、泰增都維那、鈍色、毛、指貫、

一、承仕門跡北二人、本承仕四人、  
一、豎者二人、俊藝、長信懷秀、延明精義、順懷五師、寬專五師云々、兩豎義五夜

時分事終云々、不可說豎者共也、條々重可尋記、  
十七日 戊辰、天曇

秀深來、三藏會無爲事終了、爲禮來云々、神妙之由仰了、並繼舜法橋、泰增都維那來、



佛生會  
期日

〔大乘院日記目錄〕

三 八月十六日、三藏會始行、豎者俊嚴、懷秀、長谷寺役僧  
出之無之間腹立、自今不可參申之由申切退  
出了、河南、違亂之時者、每度五師中沙汰也

〔經覺私要鈔〕

九六 十月十八日 壬申、霽

一、別會五師宗算、付出世奉行伺申云、佛生會依寺務未補、于今無始行候、寺家  
事治定上者、何日可被始行哉、次千部會事、廿六日、式日候、廻請可成哉、次  
三、候摩御忌日事、去年依料紙違亂無始行、彼是可伺承云々、返答云、佛生會  
事、廿三日歟、廿八日歟、兩日內相計可成廻請候、○下略、千部會、三候、摩忌日、  
事ニカ、ル、下ニ別掲ス、  
十九日 癸酉、霽

玄深來申云、別會五師宗算、就出世奉行申云、佛生會事、廿三日、八日、兩日內  
廻請可認進云々、○下略、上

廿三日 丁丑、天曇風

一、今日佛生會始行、爲此今曉卯刻、寺中鐘鈎之、用脚三百疋、勲下之由公文目  
代繼舜申之、鐘事仰通目代事也云々、佛生會呪願事、自別會方申之間、仰遣  
出世奉行處、於當門跡、寺務者長講會外之呪願事不仰之由、禪定院僧正被  
申云々、其趣自繼舜法橋方申賜了、

佛生會始  
行

長講會

〔大乘院寺社雜事記〕

九三 四月廿二日

一、御後見方所役佛聖覆網布等如例、修理方所役佛聖方並中綱札事被仰付  
之、於印鑑者不被渡之間、印鑑方所役無之者也、明日可有佛生會云々、自兼  
日被仰別會云々、

廿三日、

一、佛生會始行、別會宗算、行香孝乘寺主、每事如例也、

〔廿一口方評定引付〕

〇四 山城 三月晦日

一、來月佛生講就被略、花堂灌佛作法如何可有哉之由披露之處、灌佛作法一  
向可被略之式、伽陀計可被行之由衆議畢、

〔經覺私要鈔〕

九六 十月十八日 壬申、霽

一、別會五師宗算、付出世奉行伺申云、○中次千部會事、廿六日、式日候、廻請可  
可成哉、○中去年依料紙違亂無始行、彼是可伺承云々、返答云、○中次千部  
會事ハ、式日既有餘日事候上者、任例可被始行候、同可成廻請之由可被仰  
遣候、○下

十九日 癸酉、霽

文明元年雜載

東寺佛生  
講灌佛作  
法ヲ略シ  
テ伽陀ヲ  
ミテ行フ

千部會始  
行ニツキ  
テノ問答



玄深來申云、別會五師宗算就出世奉行申云、略中次千部會ハ、式日通可用  
意申候、○下略、コノ後始  
行ノ記事缺ク、

〔大乘院寺社雜事記〕

九三〇 四月廿七日

一、東門院申給寺務之時、中綱諸番札事不給之間、中綱勾當不及訴訟、明日千部會所役事、不可沙汰之由令申旨、自別會五師方申給上如何云々、先度予  
二、被相尋條々内也、注遣了、中綱申狀不可然旨仰了、不定事也、安位寺殿初度、第二度、予初度、貞兼僧正初度、各辭退之時、於札者被留院家了、是近例也、  
又、安位寺殿第三度依申請給之了、

廿八日

一、千部會始行、定日廿六日也、延引了、

〔經覺私要鈔〕

十七 七月二日 甲申、夕立

尊譽律師以狀申云、法花會事、八月樸揚講後、被放請者、可畏存之由實英歎申云々、法花會令放請者、本内二人可始加行之間、彌樸揚講人數可減之間、成立不審之間迷惑云々、則是へも實英有歎申子細、加思案可返事之由仰了、

同會所役

同會始行  
ノ定日延  
引

法花會ト  
樸揚講

法花會延  
引

溜洲會

長講會

方廣會ナ  
シ

三日 乙酉、雨下、入夜霽

一、實英來、以畑法花會始行事延引樣歎申云々、不可有子細由返答了、

八月廿九日 庚辰、大雨

一、子刻有學侶狀、溜洲會事當年可始行候、寺家之儀爲學侶可申沙汰之由、下  
鵠分牒送候前三ヶ月、宥古庄ハ、不叶事早々被仰付候者、明年樸揚講マテ  
無爲之基候、次法花會事、十二月始行跡希歎、然者不可得事哉之由同申賜  
了、仍返答ニハ、溜洲會事、下鵠分内々歎申子細候、御置案衆中就如此被申、  
いゝ様有御了簡可被仰付之由返答了、

〔大乘院寺社雜事記〕

十四 九月四日

一、長講會御願、如例主願擬講ニ被仰出云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四〇 十二月九日

一、方廣會、依番條事無始行者也、○番條ノコトハ、六月  
六日ノ條ニ見エタリ、

〔大乘院日記目錄〕

三 十二月廿四日、就番條事方廣會無之云々、(兼雅)  
松林院僧

正借物故也、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四十一 十一月七日



一、慈恩會、放請六人、覺乘政圓、訓藝、俊算、興尊、貞海、鈍色、自餘、言律師、付衣、其儀如例也、出世奉行大納

八日

一、慈恩會第二反事、春長房所望之、可申寺務之由、仰返事、畏入云々、

〔大乘院日記目錄〕<sup>三</sup> 正月十三日、心經會、予分幡出之、

〔尋尊大僧正記〕<sup>二</sup> 三月朔日

一、講問一座予行之、<sup>○</sup>三日、十一日、二十一日、及<sup>○</sup>廿六日、大乘院寺社雜事記、四月一日、十八日、

二、<sup>○</sup>四月十一日、二十二日、二十四日、六月十一日、十八日、八月十一日、十八日、十一月十一日、十八日、十二月十一日、十八日、

三、<sup>○</sup>七月十一日、十八日、八月十一日、十八日、九月十一日、十八日、十月十一日、十八日、十一月十一日、十八日、十二月十一日、十八日、

四、<sup>○</sup>十一月十一日、十八日、十二月十一日、十八日、

五、<sup>○</sup>十一月十一日、十八日、十二月十一日、十八日、

六、<sup>○</sup>十一月十一日、十八日、十二月十一日、十八日、

七、<sup>○</sup>十一月十一日、十八日、十二月十一日、十八日、

八、<sup>○</sup>十一月十一日、十八日、十二月十一日、十八日、

九、<sup>○</sup>十一月十一日、十八日、十二月十一日、十八日、

十、<sup>○</sup>十一月十一日、十八日、十二月十一日、十八日、

十一、<sup>○</sup>十一月十一日、十八日、十二月十一日、十八日、

十二、<sup>○</sup>十一月十一日、十八日、十二月十一日、十八日、

〔大乘院寺社雜事記〕<sup>九</sup> 三十一 四月三日

一、講問一座予行之、<sup>○</sup>八月五日、<sup>○</sup>十二月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>七月五日、<sup>○</sup>七月五日、

二、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

三、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

四、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

五、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

六、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

七、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

八、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

九、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

十、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

十一、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

十二、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

十三、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

十四、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

十五、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

十六、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

十七、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

十八、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

十九、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

二十、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

二十一、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

二十二、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

二十三、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

二十四、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

二十五、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

二十六、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

二十七、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

二十八、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

二十九、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

三十、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

三十一、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

三十二、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

三十三、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

三十四、<sup>○</sup>八月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、<sup>○</sup>七月七日、

一、講問一座予行之、毘沙門法樂、<sup>○</sup>六月三日、七月三日、八月三日、十一月三日、

二、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

三、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

四、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

五、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

六、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

七、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

八、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

九、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

十、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

十一、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

十二、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

十三、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

十四、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

十五、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

十六、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

十七、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

十八、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

十九、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

二十、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

二十一、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

二十二、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

二十三、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

二十四、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

二十五、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

二十六、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、

二十七、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、<sup>○</sup>五月五日、



彌陀法樂

十五日  
 一、講問一座予行之、(彌陀)法樂、  
 廿五日  
 一、講問二座予行之、五〇六月十五日、二十五日、二十五日、十月十五日、十一月十五日、十一月十五日、略ス、

六月一日

一、講問一座予行之、並社頭代官如每旬也、〇八月一日、九月一日、十月一日、十一月一日、略ス、

七日

一、講問一座予行之、弁才天法樂、北面方講十疋奉伽了、(加)

〔大乘院寺社雜事記〕十四 七月一日、大雨下

一、講問一座予行之、並社頭代官進之、

八日

一、講問一座予行之、藥師法樂爲延命也、

十五日

一、講問二座予行之、彌陀、並當年星分也、

觀音法樂

十八日

一、講問一座予行之、觀音法樂、

八月十一日、大風、雨下

一、來十三日、十四日、十五日分講問等、予行之、

廿二日、夕立

一、講問一座予行之、太子法樂、〇十月二十日、二十一日、十一月二十日、略ス、

〔大乘院寺社雜事記〕十四 十月十一日、(雨下、夜)

一、旬講自今月朔日被始之、(問脫)禪師御房□□(政覺)律師信承公沙汰也、

十一月五日

一、講問一座予行之、深密經三、彌勒經轉讀之、

十六日

一、講問一座予行之、大黑法樂、

十二月一日

一、講問一座予行之、社頭代官如每旬也、

〔經覺私要鈔〕六十 卯月十一日 乙丑

大黑法樂

太子法樂

旬講問



旬講問以下如例、○六月二十一日ノ條、同

廿一日 乙亥

一、旬講問二座如例、○五月朔日、二十一日、七月朔日、十一日、五月十一日 甲午

旬講問先様之二座沙汰了、

〔經覺私要鈔〕十七

七月廿一日癸卯、雨下、及數日了、以外也、

旬講問等如例、○八月二十一日、九月朔日、十一日、二

〔大乘院寺社雜事記〕九十

四月八日、夕雨下

一、夏中舍利講、自今日如例始之、

六月十五日

一、舍利講始行、

〔大乘院寺社雜事記〕十四

七月十五日

導師尋尊

一、舍利講導師予、(尋尊)

〔大乘院寺社雜事記〕一十四

十月十五日

同信承

一、舍利講、導師信承公、○十一月十五日ノ條、同

五段舍利講

十二月十五日

一、舍利講、導師信承公、夕座有之、

〔大乘院寺社雜事記〕三十

四月十四日、雨下

一、五段舍利講予行之、○五月十四日、六月十四日、七月十四日、十月十

〔大乘院寺社雜事記〕一十四

十二月十四日

一、五段舍利講一座予行之、

〔廿一口方評定引付〕四

山城 文明三年辛卯正月廿一日

一、應仁二子、同三丑、兩年御影供舍利講布施成五方之遺足之間、于今支配无

之當時亂中供料以下無其實之間迷惑之至也、依之舊冬有其沙汰、造營方

之足、大卷所廿一口方、エ令借用、可被成彼捧物之支配定也、仍今朝造營方

其足被渡之間、雖而可致支配之由、納所申付之旨披露畢、

〔大乘院寺社雜事記〕三十

五月廿三日

一、西芳寺無縫、(答)各佛舍利信專得業持來、水精之大壺也、今度取物云々、可歎々

佛舍利  
無縫塔  
壺水晶ノ大

〔大乘院寺社雜事記〕十四

八月廿五日、雨下



舍利配分

一、舍利五粒傳愛滿丸了、  
一、東寺舍利六十八粒、自隨心院<sup>(殿寶)</sup>手相傳之、先年相傳ニ相加之了、先年相傳之  
內分散濟々出來了、

光宣法印參申之間、御舍利相傳用也、七粒申請了、榼一双兩種持參了、

〔大乘院寺社雜事記〕<sup>一四一</sup> 十二月六日

一、榮清大舍利殿持參、東寺舍利五粒分隨心院殿ニ申請退出了、六角殿也、納  
水精塔了、

〔尋尊大僧正記〕<sup>二</sup> 三月朔日

一、講堂仁王講、大頭陽淵律師、予清僧三口□□

〔大乘院寺社雜事記〕<sup>九三〇</sup> 四月一日

一、講堂仁王講、大頭權律師成懷、予清僧三口出之、

五月一日

一、講堂仁王講、大頭<sup>(マ、)</sup>

十六日

一、五重門廿一卷仁王講等、寂勝王經等予行之了、五重門讀誦之輩ハ、於三笠

仁王講

五重門  
寂勝王經

山麓令所願成就給無上并可仰可貴、明神座此山事、爲五重唯識守護故也、  
仍予每事讀一段者也、

六月一日

一、講堂仁王講、大頭寬尊權律師云々、予精僧三口出之、<sup>(清下同)</sup>

〔大乘院寺社雜事記〕<sup>一四四</sup> 七月一日、大雨下

一、講堂仁王講、大頭權律師光守、予清僧三口出之、

八月一日

一、講堂仁王講、大頭權律師英乘、予清僧三口出之、

八日、雨下

一、仁王講如昨日、<sup>〇七日ノ條、仁王講ノ記事ナシ、</sup>

九月一日

一、講堂仁王講、大頭光明院權律師、予清僧三口出之、東大頭大納言權律師也、  
仍榼自堂送之、承仕持來云々、

〔大乘院寺社雜事記〕<sup>一四一</sup> 十月一日

一、講堂仁王講、大頭大納言權律師尊譽<sup>(予カ)</sup>□精僧三口出之、



一、仁王講大頭來月分安位寺(經覽)殿御頭條御理運歟、然而二鵝東北院前大僧正方ニ箱事送遣云々、此條不審事也、堂内評定歟、

十一月一日

一、講堂仁王講大頭安位寺殿清僧以下如常導師定清擬講、每事如例、并舜寺主奉行、

十二月一日

一、講堂仁王講大頭東北院前大僧正俊圓、予清僧三口出之、

〔大乘院寺社雜事記〕九三 四月廿二日

一、當年可有樸揚講始行旨、被成奉書於下鵝分一鵝云々、玄深申沙汰了、

六月一日

一、樸揚講加行、自今日始之、

九日、大雨下、電

一、兩勸進代相觸、樸揚講事、本唯識講衆人數不足之間、來八月ニ延引之由云々、大方當年可有始行之由、及其沙汰之條、不審千万事也、

〔大乘院寺社雜事記〕十四 七月廿四日、雨下

樸揚講

加行始

唯識講衆  
不足ニヨ  
リ樸揚講  
延引

一、就樸揚講問事、玄家實英參申、心中巨細仰付之了、

廿六日、雨下

略○上 今日新入宗成善信、爲樸揚講始行新入了、

八月一日

一、樸揚講加行始之、

九日

一、實英、永弘來、樸揚講事、一昨日經禪多空、澄專願乘、申破而退、加行了、下鵝分本衆所勞之間、兩三人不足歟、任先例勞分兩三人加行始之、然而不是非退

加行條、以外次第云々、

一、樸揚講事、無始行上者、法花會事早々可被仰付旨、自學侶書狀到來云々、御返事、今度樸揚講事、任雅意引破之、又此法會始行候、んとても不可有正

躰云々、○實英、樸揚講ノ後ニ、法花會ヲ行

十二日

一、就樸揚講事、罪科人躰事、内々實英注進之由申入之、

〔經覺私要鈔〕六十 卯月十三日、丁卯

加行始

經禪澄專  
加行ヲ退



一定清已講以狀申云、樸揚講事當年可始行候早々可被仰付下膳分論匠一、藹定乘房榮學之由申間、可相意得之由返答了、

六月八日、庚申

一、就樸揚講事、下膳分内實英房舜善内々以辨舜申云、於加行者、自去朔日既始之候處、本人數廿人加行旨よて候間、取つめの事無其跡之由、入狀於兩讀師方云々、以外次第候、所詮誠如申狀候者、被減頭衆可有始行之由被仰付者、可畏存之由申云々、仍可出狀之由、出世奉行方仰遣了、則遣早使了、

十三日乙丑、霽

樸揚講事、八月延引云々、

十八日庚午、霽

一、實英房舜善來、樸揚講事、色々歎申間、遣奉書了、今日淨雄日也、明日日次可書遣由仰含了、打輪一本賜之、自作云々、可秘藏旨返答了、

〔經覺私要鈔〕

十七 八月七日戊午、霽、夕雨下

一、樸揚講新廿日廻請承仕持來之間、令加判遣了、  
八日己未、甚雨、連日之雨、以外事也

一、自法用僧兼實方申云、樸揚講事、不可有之由申上之、供目代被召事、十九日樣蒙仰度由申給了、驚入之由返答了、言語道斷之次第也、

十五日丙寅、霽

一、於門跡千手院實英有申旨、下膳分樸揚講破之、張本事罪科度(マ、)能々令談合可致沙汰之由返答了、

〔大乘院寺社雜事記〕

九十 四月二日

一、三十講朝座講師信承、弁公初問一帖、二問二帖、三問一帖、合四帖答之、尤可爲夕座講師之處、自中藹座相計成朝座畢、不得其意候、同夕座問者、勸之、重難也、鈍色モケサ表袴、引部木紫重之、扈從ニ學侶分一兩輩、付衣相(從カ)云々、  
良家西座ハ、觀禪院計勸之、問者講師各一日ニ勸之、

八日、夕雨下

一、昨日於三十講砌確執、既以可破三十講云々、先以無爲云々、

十五日、雨下

一、觀禪院三十講、至今日無爲珍重々々、

十六日、雨下



一、後夜入堂有之、觀禪院三十講畢、後十六七日之間、二、每々一夜入堂定例也、  
十八日

一、(提カ) 菩提院三十講始行之、

〔經覺私要鈔〕

九六

卯月十三日、丁卯

三十講不  
參ニヨリ  
除帳擯出  
ス

一、自觀禪院、卅講座兼尊陽實房、無故不參之間、除帳擯出由、付出世奉行申觸云  
々、有書狀、

〔大乘院寺社雜事記〕

九三

四月十三日

院入十講

一、恒例院入十講始行、清僧十口、各付衣五帖、供料口別三斗、手巾桶抄等納所  
沙汰也、

一、觀善加行者、第二手衆各參勤、此御講了、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四

八月廿二日、夕立

新供十講

一、新供十講修之、多忍房、多禪房不參觀禪房、舜善房重役了、各所勞之故、代官  
事不申付候云々、

〔經覺私要鈔〕

九六

五月朔日

法花唯識  
講問

略○上 法花唯識講問、同一座修之、

月次唯識  
講

〔經覺私要鈔〕

一七

七月十一日癸巳、霽

月次唯識講廻請承仕持來之間、令加判遣了、勸進泰俊云々、

九月九日庚寅、天曇、又雨下、希代天氣

一、月次唯識講廻請承仕持來、令加判遣畢、還觀進六人云々、(勸カ)

〔大乘院寺社雜事記〕

九三

六月十七日

新唯識會

一、新唯識會始行、證義東院僧正、權官、尊譽律師參勤了、兩日云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四

七月廿六日、雨下

本唯識講

一、本唯識講始行、勸進泰俊法師也、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四

十一月十一日

興善院講

一、依學侶押留去月分、興善院講、唯識講共不始行云々、

十二月一日

一、諸會式被相押之内、唯識講興善院講無之、唯識講者十月分雖申出御判不  
始行、自十一月ハ不申出御判者也、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四

七月八日

夏中龜講

一、夏中龜講、今日結願之、修中無爲無事珍重、可喜々々、爲現到二世之所願成



就也

〔經覺私要鈔〕

十七 七月十八日庚子、齋

今日念佛講在之、可爲十六日之處、無水之間、令延引了、予等入了、

廿四日丙午、風止雨霽、但日中又少下

一、英弘僧都來之間、色々物語共爲之、其內遂講事、若事闕者可沙汰歟、否事仰

試了、雖有色々申子細、爲後生者非無其望云々、但成否者不存知之、由返答

了、慮來之間能小盃畢、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四 十月廿四日

一、長谷寺八講櫃八合、白布代一貫二百文到來了、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四 十二月十九日

一、向淵御講米當年分十五石可沙汰云々、不可叶旨仰了、可爲三十石、但爲廿

五石者可始行旨仰了、納所實心注進之、

〔塔寺八幡宮長帳〕

〇四 岩代 應仁三年己正月八日開白、同十日

初百內 千代若丸

周防阿

念佛講

長谷寺八講

向淵講

塔寺八幡宮修法開白結願

仁王講分

- 參百內 初夜導師、後夜導師、後夜導師、可有、  
安防智光
- 肆百內 初夜導師、可有、  
乘珍御房
- 伍百內 陸百內 尾張阿闍梨
- 陸百內 紀伊御坊

仁王講分

- 十部百座 順炭畢 熊野宮
- 十部百座 順炭畢可有 少貳阿闍梨
- 十部百座 順炭畢

大乘經分

- 大乘經分 順炭可有 泉殿
- 寺僧分 紀伊殿 智嚴 民部 正現

〔見聞雜記〕

〇歷代殘闕日 一、同十八日、俊雄公試講ノ、闕取了、

〔尋尊大僧正記〕

二 三月朔日

一、千卷心經、導師大納言律師、〇大乘院寺社雜事記四月一日、六月一日、七月

千卷心經

略



〔大乘院寺社雜事記〕九十 五月一日

一、千卷心經、導師信承公、○十月一日、十一月一日、十二月一日、條同、文ナ、ルニヨリ、略ス、

〔經覺私要鈔〕六十 五月朔日

一、千卷心經讀之、

〔經覺私要鈔〕六十 卯月十八日壬申、霽

小觀音經卅三卷、並小呪等留之、法樂長谷寺了

〔經覺私要鈔〕七十 七月十八日庚子、霽

一、小觀音經卅三卷讀之、少呪等如例留之、法樂長谷寺了、安位寺觀音へも、同

樣ニ少呪等留之、

八月十八日己巳、霽

一、小觀音經三十三卷讀之、法樂長谷寺了、並少呪等如例沙汰了、

九月十八日己亥、雨

一、小觀音經卅三卷、少呪等留之、法樂長谷寺了、又安位寺觀音少呪等留之、手

向了、

〔經覺私要鈔〕七十 九月十日辛卯、雨下

長谷寺ニ  
小觀音經  
ヲ法樂ス

一切經轉

夜叉神修

牛王紙

白牛王紙

一、召別會五師宗算處、恒例一切經轉讀在之、其後可有學侶集會之間、其後可

〔東寺執行日記〕十 應仁三年己丑 正月大 四門、住連、法松、住二門、住三門、住小住、連拜堂

十日夜叉神修正事、早旦

檀紙也(王カ下) 牛王廿四枚 導師執行 中綱十一人、現任 柵守 職掌三人、現任 鐘突二人、大炊一

仕一人 行同方 役廿四人 地下職事一人ハ執

白牛王紙廿四枚ハ柵守方役也、雖然守存知之間、此方ヨリ出之、雜紙也、牛

王ハ大小四十六本ハ鐘突役、

代 導師宰相律師 初獻三種酒肴、マメ、コン、ハウ、ア、(ラセ)メ、ニ、文、カ、ナ、カ、ケ、赤土器、

拜善中綱敬觀、當座中綱中ニ差之、歟、

机花香ハ柵守方ノ役也、然間以內々敬觀雇之也、

中綱 定金 乘琳 淨琳 敬觀 久既爲牢籠、去年淨忍、淨光父子

同不參 定任 定觀 乙夜叉丸 愛夜叉丸 依爲童子、兩人ハ 職掌ニ、孫

太郎一人 同不參 與左右次郎 右衛門次郎 鐘突二人、福善 地下職

事一人 都合廿四人、現任、

文明元年雜載

二三五



初献二種酒肴

マメ、アラメ、赤土器ニモル、各々ウスラシキ一枚宛ニハシラスユル也、各々ナラフル也。

二献燒餅二枚

一枚燒餅御子等分進之候、去年ハ寺邊ニハ宮野ノ駿河乗不任候也、進之候、昨日アツサ一鐘突以鏡二善法師中綱一蔭定金方亂、一向餅

此邊ノ鏡餅御子等分進之候、去年ハ寺邊ニハ宮野ノ駿河乗不任候也、進之候、昨日アツサ一鐘突以鏡二善法師中綱一蔭定金方亂、一向餅

三献コフ、カキ、カヤ三種、一物ニ入被出之、

同買物事

百文 酒 十六文 清酒導師用之 二文フチタカ、日 二文カナカケ、日 十六

文牛王紙 十文 同白牛王紙 五文コフ 五文カヤ 二文ス 四文木

三文赤土器七十 〇百六十シヘ

此外不買物 大コン、カキ、スミ、餅ナキ間 アラメ、小疊ハ宮仕部屋ニテ借之、

取渡物ハ酒ナヘ、テウシ、二マ、タ 金輪一 杓一 火鉢一 悉色々鉢入ヲ

濱之、(渡カ)

同十一日、導師方へ常ハ鏡二五種カサリ有之、ハ可然、當年依物走無之由送(念下同)

申候、但到來方候者、無等、閑可進之由同送之申、

同十七日、導師方へ圓鏡一枚五鏡、カサリ一、大コン、トユ、〇、送之、兎角殘一枚事

被申也、面八寸計(マ、)アツサ一寸計也、世上物走之間、去年モ一枚遣之、

同十九日、兩座方へ二枚送之、鐘突一蔭請取之、中、面七寸計、アツサ一寸計、

二枚送之、正月十日修正ノ更ニ依動亂不進入之間、兼日公人中ニ人遣延引

テ渡出之、

廿八日、講堂修正有之、牛王三枚、卷數一如例出之、又棚守方役分赤土器五百

トウスミ三人分、檀紙二帖、各廿枚ツ、四十枚也、紙用出之、

同夕方目代懸備後、大炊定全、職事、職掌一蔭、定使一人得祐、目代下人(マ、)人下六

人、法式數也、

一献、(冬瓜カ)タウフカン、(アカ)フエ物二、白土器カン入之、ソエ物赤土器、

二献、餅未曾都エクキソ引酒肴、一ハ大コンヲモミテ、

三献、菓子二、フチタカ、下三人ハウスヲシキト去ニテ、(正月カ)

廿八日、修正、世諦無之、

同夜土器數大小、赤二百分、シソク一帖、キク、トウスミ三人分、

中綱 定忍法橋 淨琳 定觀 敬俊 乘俊 小入

廿九日、酒肴者此方奉行之時無之、棚守有之時、令致沙汰之由聞及、



千手堂修

二月三日、千手堂修正有之、

大圓鏡六枚、花平等八寺內屋敷六屋敷廻番支配ノ日記別在之、

牛王三枚杉原出之、執行役別當、導師、執小牛王紙檀紙、依四十八枚、棚守役

代十文、牛王木鐘突中役、

〔大乘院寺社雜事記〕九三十五月十二日

兩堂修正

一、自昨日兩堂修正始行、自十日造花等立之、役者等參籠云々、依所出違亂吉祥御願不修之、自今夜可有歎色々、寺家御問答云々、吹田庄所出事也、

尋尊第四

〔尋尊大僧正記〕明十七應二年修正始行 文明元年五月十一日 第四度

〔大乘院日記目錄〕三五月十一日、兩堂修正始之、手水所東性、舜房、宗恩、房、小

淨房、延

〔經覺私要鈔〕九六十四月十四日戊辰、天曇

矢田莊番

昨日修正事、廿日頃可始行、可致其用意由、以行事僧可觸仰旨、仰遣尊譽律師畢、於日限者相尋道者之間、就申狀重可仰之由申遣了、

頭米

一、繼舜法橋來申云、昨夕西金堂注進申修正事、可有始行之條珍重候、就其矢田庄番頭米事無沙汰候、急可究濟之由御下知哉、由申云々、則以奉書矢田

修正

庄下司方へ可申遣之由仰之間成奉書了、廿日以前不沙汰者、可付神人之由同仰了、以公事仕丁可遣云々、

十五日己巳、終日甚雨

略○上 又修正事、自廿日頃可被始行之由觸仰之處、餘不日候、自來晦日有始

行之樣候者、可畏存之由手水所衆申云々、

廿四日 戊寅、雨下

造花

一、修正事、自來晦日可始行、由加下知之處、造花難出來之由申問、今分晦日始行不可叶之由、可披露學侶仰付繼舜了、

矢田莊番頭米

一、矢田庄番頭米事、可加下知之處、急可窮濟旨、下司致請文了、而未沙汰之由、歎申之間、重嚴密可下知旨、同仰繼舜畢、以公事仕丁可仰遣云々、

廿五日 己卯

一、修正事、矢田番頭米未進、並手水所事等、堅可申付之由、繼舜仰含了、

廿七日 辛巳、霽

一、矢田庄番頭米、加嚴密之下知之處、矢田親類賢弘學延、以狀有歎申旨之間、

肝要四十石分者、不滿足者、修正事不可始行、由西金堂訴訟申問、加嚴密下



知了、相構今分ハ致沙汰候様可致計略之由返答了、

廿八日 壬午、霽

米 堂方番頭

一、修正事、來月十日ヨリ被始行之様、堂方並番頭米事可被仰詰旨、學侶以狀(大和生駒郡(庄野))申問、矢田方へ嚴密可仰遣之、次堂方事同可存知旨可召仰談進旨返答了、

廿九日 癸未、霽、旦程雨下

一、修正事、學侶有申旨、仍堂家へ被問答由奉行申賜了、所詮於堂家所存者、四十石分不究濟者、修正事堅可訴申入云々、又學延矢田親類也有申旨、經胤遣返事畢云々、

五月四日 丁亥、霽

一、修學者賢弘學延、以狀申云、矢田庄番頭米事、以卅九石可行修正之由、學侶問答時、堂家領狀目出候、修正事、自來十日始行不可有煩之由申給了、尤可然之由以狀經胤申遣云々、

九日 壬辰、霽

一、矢田庄番頭米、以卅九石者、修正事可行云々、西金堂承伏了、

十日 癸巳

兩堂花以下風流

一、自今日東西兩堂修正始行之、  
十六日 己亥

兩堂花各木花也、風流以下驚目了、

〔經覺私要鈔〕

九六

五月六日 己丑、旦程雨、自己刻霽、夕又雨下、事外甚雨、

吉祥御願

一、吉祥御願廻請中綱持來、此御願事有思案之子細之間、重可來之由仰了、  
十一日 甲午

一、吉祥御願事、自昨日不始行云々、布施訴訟也、  
十二日 乙未

一、吉祥御願事、自昨夜可始行云々、下行事追可記之、  
十四日 丁酉

同下行物

吉祥御願下行物事、自繼舜法橋催促之間、可下行之由仰付畑了、

十七日 庚子、霽

一、吉祥御願事、自去十二日歟始行、今一兩日分ハ修中ニ重可行入之由、西金堂者申云々、然者於西金堂今朝修正と同時に結願歟、東金堂之儀如何、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四

十二月二日







中直祓

文明元年雜載

二四四

普賢延命呪、三身合行呪、各千反留之、中直祓爲之、又自讀千卷心經如例、

八月朔日壬子、霽

一、五夜以後起、懃行等沙汰了、中直祓爲之、

九月朔日、雨止、壬午

千卷理趣

中直祓爲之、三身合行呪、普賢延命呪、各千反留之、又千卷理趣分始之、

十六日丁酉、雨  
理趣分十六卷、普賢延命呪、三身合行呪、各千反留之、依爲齋日也、

〔經覺私要鈔〕

九十六 五月廿二日乙巳、霽

如意輪呪千反留之、

〔經覺私要鈔〕

十七 七月廿二日甲辰、大雨下、珍事連雨也

一、如意輪呪千反留之、法樂太子了、○八月二十二日、九月二十二日、略ス、

〔大乘院寺社雜事記〕

九十三、四月十三日

一、五重門讀誦之、慈恩法樂、○五月十三日、六月十三日、七月十三日、十月十日、略ス、

〔經覺私要鈔〕

九十六 卯月十五日己巳、終日甚雨

恒例念佛六万反留之、○五月十五日、九月十五日、略ス、備進舍利佛供了、

恒例念佛  
舍利佛供

慈恩法樂

太子法樂

如意輪呪

八角堂恒  
例念佛

〔大乘院寺社雜事記〕

十四 八月廿日

一、來廿五日より八角堂恒例念佛廻請加判了、當方院家者

三藏院 阿耨院 修學坊 十輪院 藏光院 東林院 律藏院 大

菩提院 東中院 勝願院 淨興院 冷水坊 東淨興院 和光院

廿五日、雨下

一、自今日放光院念佛世俗、一乘院沙汰也、於大御堂成之、

廿六日、雨下

一、念佛世俗、越田尻井殿兩庄云々、(有脱カ)未曾水方兩日分十疋、院社ニ下行了、

廿七日、雨下

一、念佛世俗、九條使節小林

〔經覺私要鈔〕

十七 八月十二日癸亥、霽、夕雨

一、自今日恒例彼岸百万反留之、自昨日可沙汰處忘却了、今日廿万反、

廿五日丙子、天未霽、但雨不下

○上略、天滿法樂、又文殊呪千反留之、又融通念佛千二百反留之、

〔大乘院寺社雜事記〕

四十一 十一月廿五日

文明元年雜載

二四五

文殊呪  
融通念佛

恒例彼岸

下行

念佛世俗



文殊

一、中院文殊五十万返之内一万返唱了、  
〔大乘院寺社雜事記〕九三 四月七日

一萬座愛染法

一、爲一天並寺門祈禱、於西大寺一万座之愛染法可有始行之由、自學侶申付之、供料五千疋令下行了、自來十日可行云々、道場者光明真言堂也、百座壇可立之云々、必定然而自六方不可然、旨申送之、押留了、今度番條之長懷法師與學侶公事故也、○下略、學侶ト番條ト争ヒ、ト、六月六日ノ番條ニアリ、

〔大乘院寺社雜事記〕十四 八月十九日

光明真言始行

一、昨日より西大寺光明真言始行、  
廿二日、夕立

一條兼良之三赴ク

一、令參成就院、自其西大寺光明真言ニ御共申了、(一條兼良)殿下御板輿、御小直、松殿直垂乘馬、諸大夫以下異形風情也、入會過より御出、(大カ)人番大行道ニ御參合了、御丁聞所長老沙汰也、大番事畢後長老、予松殿、自丁聞所出禮堂、拜見佛舍利等、西室井御影、同鐵塔等御拜見了、還御大雨也、迷惑、予小衣板輿、上下北面衆等令召具之、各異形步行、輿昇六人、兩分所六十疋下行、

〔經覺私要鈔〕六十九 卯月廿四日戊寅、雨下

地藏勤行

地藏勤行如例、○五月二十四日、九月二十四日、六月二十四日、七月二十四日、八月二十四日、略ス、

内山供

〔尋尊大僧正記〕二 三月四日

一、就内山供事、禪徒順忍法師捧□□□取繼之、尙々可糺明旨仰付之了、目安□□□三昧供以下ニ入了、限法供可不知行條不便□無其謂事也、  
七日、雨下

一、經義來、内山供事尋申入之、

〔大乘院寺社雜事記〕九三 四月一日

一、就内山威德院供事、自筒井方一鴈順忍法師申狀進之、無殊儀者也、肝要就威德院供事、先途未滿者可入供歎否事、不分明事也、

禪徒一鴈供條々

本堂 一、六口三昧之内一供、順忍知行、

一、威德院供二供、自一鴈至二鴈、

一、藥師院供五供、自一鴈至五鴈、順忍同知行、

一、尺迦院供五供、自一鴈至五鴈、順忍知行、

一、明王院供四供、自一鴈至四鴈、順忍知行、

内山威德院供



一、觀音院供五供、自一薦至五薦、順忍知行、

已上一薦、知行之分也、順忍悉知行也、威德院之一供、計遣訖、已上諸供、皆

一薦之進止也、更行方先途之混亂無之、威德院供事、元亨三年□□□日

寄進之、次一薦二薦、可爲供衆云々、

五日、夕雨

一、經算來、內山威德院供事、巨細申入之、去朔日一紙、可相尋南座、猶以不可事

行事也、所詮、（カ）ハ南座衆ニ悉以懸二世致、咎文、可取合點之由仰了、此儀

尤旨、經算申入了、次威德院申狀在之、此條ハ以外事也、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四十一 十月二日

一、內山威德院供事、去春頃より一薦、舜忍與二薦、宗春相構子細在之、雖然、（舜）

□□途已滿、可爲宗春之由仰付一山了、訓英□□舜忍方ハ筒井申入者

也、

七日

一、內山返事到來、可相觸南座云々、

十一日、雨下、夜  
番、舜專

舜忍宗春  
ト勤行ヲ  
争フ

大供

一、內山威德院供兩關分、勲行事、結崎南方より押留之、由院主注進之、一代威  
德院嘉曆比より惣山南座方ニ寄進兩供也、爲當威德院沙汰可落取之云  
々、三寶寄進物可成人物支度也、希代事也、如此被成下者、一山寄進物面々  
各々ニ可落取之間、可滅亡、基也、彼南ハ當威德院之縁者故云々、以外次第  
也、爲南座可致訴訟之由仰付之、於門跡不可有等閑儀者也、南座使節覺賢  
云々、繼舜法橋申次之、

十二月廿六日、立春

一、就內山威德院供事、結崎南狄竹庄御米押留之云々、末代至極也、無力、威德  
院並上乘院兩人不可通之者也、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四十二 十一月二日

一、大供事、來十六日十五可令始行之、由仰遣供目代方、十九日則兼實禪學得

請、專祐供目代、廿一日俊嚴供目代事仰定之、令伺寺家御儀了、專祐ハ不經

法用僧故也、三ヶ日分御許可、

八日

一、大供事、學侶許可未申御返事、傳聞尙以可押留云々、



學侶大供  
ヲ抑止ス

學侶又大  
供ヲ行ハ  
ントス  
一事兩様  
ノ議  
供目代大  
供勤行ヲ  
辭ス

九日

一、大供始行事不可叶旨學侶集會書狀令到來、神事法會皆以可押留之上者、大供事同篇云々、供目代事同不可被改之由申入之、仍研學得請事同可延引者也、專祐法師、俊嚴法師内々、悅酒等事致用意云々、不便次第也、

十四日

一、大供事可有始行之由學侶集儀狀到來云々、不得其意事也、一事兩様集儀以外次第也、近日寺門之様、每事不弁先例、希代珍事也、仍被仰付供目代兼實之處、不日之間不可得旨、堅辭退申入之、尤事也、或又不可始行之由及異儀輩ハ、供目代雖相催、不可出仕之由令申供目代有之云々、旁以不可成立之由兼實申入之、無力次第也、於兼實者雖不行大供、來十六日可研學得請之由所望申入之間、不可有子細旨、寺家御許也、○兼實、研學トナルコト、及悦酒ノ研學ト、上ノ補任ノ條ニ見エタリ、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四十一 十一月四日

一、香舜房、香專房兄弟來、御粥等持參了、自先日供事、不可有子細之由畏入云々、

大乘院留  
守供

大乘院三  
味供

十二月二日

一、大乘院三味供事、稱借物方々より催促之、不可然、本主供衆方々可沙汰之

由、芋川百姓ニ下知旨仰千當了、三味供田ハ

(天和北葛城郡)

河合庄二口一丁、春圓大、

(同磯城郡) 草川庄二口一丁、定顯

(天和添上郡)

神殿庄四口二丁、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四十四 七月十四日

一、供料方五疋下行、

廿七日

一、召内山年預、金剛乘院供事加下知了、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四十五

十二月廿二日

一、内山金剛乘院供公私禮物十五貫文筒并殿進之、一薦供之間、不可進之由、雖令申、近例有之間、仰切之間、則進之、筒并送狀有之、

〔廿一口方評定引付〕

一四十六 山城

十二月五日



興福寺僧  
死スルモ  
ノ多シ  
藥師圖繪  
始行  
百僧供養

信貴山昆  
沙門堂供  
養ヲ行ハ  
ントス

信濃善光  
寺塔供養  
五部大乘  
經法事ノ  
次第

一、自去年爲立願之間、聖天供自今月五日觀智院於住坊被勸修畢、  
〔尋尊大僧正記〕二 (正月カ) 廿八日

一、當年寺僧共他界、以外事也、然之間今日任例藥師圖繪始行、導師淨法院僧  
都、主願權別當法印、綱所寬貞威徳、孝乘、百僧供養□□六方堂衆如例也、一圓學  
侶沙汰也、四□□□□繪所官食等如例、於寺務者所役□□□□□別  
會五師寬□□□□□每事□□□□

〔大乘院日記目錄〕三 十一月廿日、藥師圖繪供養云々、

〔大乘院寺社雜事記〕十四 八月十日

一、信貴山毗沙門堂建立以後、無立柱上棟之儀之間、爲供養來十一月廿三日  
可有之云々、覺心上人勸進、○本書十一月二十三日ノ  
條之ニ關スルノ記事ナシ、

〔新選和漢合圖〕文明元年己丑、善光寺塔供養、本願慈觀上人、

〔見聞雜記〕○歴代殘闕日  
記八十四所收 一、五月八日、鎮守五部大乘經ノ法事ノ次第、五  
部ノ軸ノ中ニ先花(嚴)經ノ第一ヲ取テ導師始給、又結願ノトキハ(涅槃)經ノ

終ヲ取テ導師讀給フ、與ヨリシテ上首次第ニ支配シテ讀給フ、  
一、遮扁公同十日ヨリ出仕了、

地藏院台  
藏傳受  
率都婆造  
立

上醍醐ヨ  
ヲ諸道具  
院東寺西  
ス返付

寶藏ニ納

〔見聞雜記〕○歴代殘闕日  
記八十四所收 一、同十九日、地藏院殿被台藏御傳受云々、今日

ヨリ予文日率都婆造立之初、但去十五日ヨリノ分後日ニ造入了、  
(七月)

一、同廿三日、中京へ罷出、御道具之中瓶一口、火舎蓋ニ、花皿一、乘珍法橋乞買  
得進寺家了、

一、同廿八日、上西(醍醐下同)西へ爲御道具御迎、年預等被參了、仍十二天八幡宮ノ額重  
等被渡了、

一、八月三日、地藏院殿上西西常圓在所ヨリ大津へ御出ニ候、

一、同四日、殘御道具上西西ヨリ當寺西院へ被返渡了、

朱唐櫃一合、本尊箱二合、一ハ七祖五大尊、  
一ハ兩界四補十二卷ノ繪、年預宗壽代參執行、  
榮増兩座ノ公八兩雜掌等、

一、同五日、於西院朱唐櫃、並七祖、十二天、五大尊、兩界等ノ箱ヲ開、悉拜見了、カ  
タシケナクモ三國附屬御道具觸手目條、宿習ノ至難有者也、

一、同六日、御道具悉被納寶藏了、

一、同十五日、地藏院殿累代附屬御納橫皮、同打鳴聖教櫃二合、上西西ヨリ當  
坊へ被渡置了、



- 一、同十二日ヨリ同十八日マテ一七ケ日、地藏院殿様御灌頂悉地成就ノ御祈禱ノタメニ入堂申了、
- 一、同廿一日ヨリ同廿八日マテ、同御祈禱ノタメニ、ヒサ門供百座沙汰了、
- 一、九月六日、上西酉ヨリ御聖教櫃十四合被取渡了、
- 一、同十二日、門主様御灌頂ノ糸(繕カ)送了、
- 一、同十六日、淳玄來臨、
- 一、同十七日、西院道具少、並觀智ノ道具等渡之、
- 一、同十一日、寶藏ノ道具、並増院ノ道具渡之、
- 一、同十九日、大津へ進御迎、申剋御入寺、御非時已後初夜□□其後御入堂、御歸院ノ後入□、
- 一、同廿日、當日御時已後御點心、其後三摩耶戒、其後御非時已後初夜、
- 一、同廿一日、御時已後御還御、
- 一、同廿三日、就御灌頂滿寺召請朝飯用意了、
- 一、同日、就御灌頂无爲御祝着候也、爲御使駿河上座來臨、御横繪二(鋪カ)補法印へ被送下了、

一、同廿六日、爲御禮大津へ法印御出參了、

〔東寺執行日記〕<sup>十</sup> 應仁三年己丑正月大朔日、早朝參御影堂、

毎年一古持參之處、當年ハ兩年之依動亂諸事□□之間、無其儀之入堂(マ、)  
 神供二前給之、珍重々々、夕方惣禮如常、小衣(依亂也)北面ノ惣禮餐無之、(應仁元年)  
 定金法師之時如此、破之、三月五日、改元應仁元、万石一舛下行之、  
 至當年三ヶ年無之、當頭人還中綱、淨琳法師、元、(今)今時分不可事行候哉、然  
 二日、神供二前給之、(備進之、下久庄年貢不出候也)者彌山伏方可難澁之條、勿論存候如何、尤存候、別當返答、仍此分惣寺ニ自執  
 行方可被尋申候云々、

七日、神供二前給之、人夫無之間、人お遣取之、

四月廿八日、同空方有之、御供モチイ一積二折敷取之、御供守分御供一積一折敷有之、

〔尋尊大僧正記〕<sup>二</sup> 三月朔日

一、朔日事、御後見進之、予成就院ニ參了、

〔大乘院寺社雜事記〕<sup>三十</sup> 四月一日

一、朔日事如例、



御後見

五月一日

一、朔日事御後見調進

六月一日

一、朔日事御後見沙汰如例

〔大乘院寺社雜事記〕<sup>十四</sup>

七月一日、大雨下

一、朔日事御後見進之如例

八月十五日

一、今日一献御後見役如例

九月一日

一、朔日事御後見調進之、如例也、○十二月一日ノ條同  
文ナルニヨリ略ス

〔大乘院寺社雜事記〕<sup>四十</sup>

十月一日

一、朔日事御後見調進之、○十一月一日ノ條同  
文ナルニヨリ略ス

一、亥子御後見調進如例

廿五日

一、亥子御後見調進之、

亥子

粥備進

十一月八日

一、御粥頭縁舜法眼各今日相觸之了、

九日玄深寺主 十日孝承寺主 十一日繼舜法橋 十二日辨舜寺主

十三日泰弘寺主 十四日專賢法橋 十五日盛舜 十六日賢秀

十七日覺朝 十一日清賢法橋、可備進御宿御所之由仰付之了、

十二月廿五日、雪下、  
節分

一、節分一献御後見進之如例、於成就院越年、爲作事也珍重々々、

〔尋尊大僧正記〕<sup>二</sup> 三月三日

一、節供如例、予禪師各付衣、手長尊譽律師役入泰坊等身衣、(指貫カ)使役以下次

第如年始也、

〔大乘院寺社雜事記〕<sup>三十</sup>

四月廿八日

一、蓬自今日立之了、(蓬カ)

五月五日、雨下

一、節供如例

〔大乘院寺社雜事記〕<sup>十四</sup>

七月七日

五月同上

三月節供

節分



梶葉

七夕

彼岸

菖蒲ヲ葺ク

一、梶葉芋露、木守進之、

一、節供御後見調進如例、

八月十二日

一、自今日腹藥始之、諸庄沙汰也、自昨日彼岸、

〔經覺私要鈔〕

九六十一 五月四日丁亥、齋

南都仕丁來、昌蒲葺之、米三斗並用途一連可給之、由雖申之、先度寺務時十

疋下行之間、只今モ其分可下行之由仰付了、

五日戊子、雨

一、節供如例、御後見調進之、予着藝衣令祝着了、役送覺朝對馬、小衣着之隨役

了、

〔經覺私要鈔〕

十七 七月七日己丑、齋

早旦浴水、七酌、心經七卷讀之法樂二星畢、又梶葉七枚ニ先之歌ヲ七首讀

之、同雖法樂、既及八旬高齡之間、自今年梶葉七枚ニ念佛七反書之、同法樂

了、抛狂言謔言之戲、欣西方極樂之望間、梶葉ニモ書念佛了、

一、仕丁中綱節供事、仕丁吹田庄役、中綱狹山庄役也、料所違亂之間若□冬無（今カ）

七夕心經

梶葉ニ歌  
竝ニ念佛  
ヲ書ス

節供下行

少花粥

八朔ノ儀

爲號有所濟者可下行、不然者不可有下行、由可仰含旨、仰遣公文目代了、

一、節供自御後見調進如例、予着藝衣祝着了、役送覺朝少衣、

八月朔日壬子、齋

一、有小祝着之儀、花粥等也、  
（鷹司政平）、

一、禪定院、並作人共有八朔之儀、如形遣扇等了、

九月九日庚寅、天曇又雨下、希代天氣也、

一、次節供事、如形加下知了、

一、自御後見節供進之、如例年、予着直綴祝着之、覺朝少衣、役送之、召仕者共以

殘面々祝之云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

九三十一 六月廿九日

一、六月輪事、可調進旨、自殿下被仰幸德井三位畏入、必々可調進旨捧御請了、

一、辨舜寺主申、恒例六月輪造事、永享十年記披見、爲賦沙汰申付森守云々、去

年木守申入子細在之間、却先例云々、其分水守ニ可申付旨仰了、

晦日

一、六月輪如例、予濟々各付衣五帖、手長專晋付衣、役送泰坊付衣、大納言律師

六月輪



付衣五帖入之、每事無爲無事、珍重々々、

〔大乘院寺社雜事記〕一四十一 十二月十五日

一、幸德井友重、八卦並新曆進之、二十疋下行之、

〔心宗禪師錄〕上

文明元年七夕之垂示 今夏九旬向解夏、寒山子作麼生、諸人各請下一轉語、

代語云、諾諾、

文明元冬至之垂示 僧問古德云、如何是冬來事、德云、京師出大黃、代語云、

是放開、是捏聚、

文明元臘八之垂示 釋迦老子雪山六年苦行、逗到臘月八夜、一見明星叫成

道、雖然恁麼、畢竟眼至星邊乎、星來眼裏乎、諸衲乞下一轉語、代語云、高捲吟

中筥、濃煎睡后茶、

〔大乘院寺社雜事記〕九三十一 四月廿三日

一、堯善天川參詣了、倉庄傳馬一疋召給之、

五月七日、雨下

一、自昨日大佛御經在之云々、

幸德井友重、新曆ヲ贈ル、  
妙心寺宗願ノ七夕垂示

冬至ノ垂示

臘八ノ垂示

堯善天川參詣

大佛續經

尋尊新宮參詣

淨土寺參詣

福寺參詣

長谷寺參詣

淨土寺參詣

五月十一日

一、新宮參詣、法花經事仰付之、

六月一日

一、淨土寺愛染王參詣了、其次令參成就院了、築地事仰付清賢、七郷人夫等事、寺務ニ申了、

〔大乘院寺社雜事記〕九三十一 六月七日

夜ニ入福寺ニ參詣、步行、

十九日

一、昨日長谷寺詣、大人數云々、

廿八日、雨下

一、愛染王參詣了、

〔大乘院寺社雜事記〕一四十四 七月廿五日、雨下

一、淨土寺參詣了、先年借物之内、今日且五百疋返弁、坊主悅喜了、近日大儀作事致其沙汰了、近頃興隆仁也、

〔大乘院寺社雜事記〕一四十一 十二月十三日、夜雨

文明元年雜載



松殿忠顯  
清賢下長  
谷寺參詣

入堂

經覺福寺  
辨才天ニ  
詣ス  
辨講御供

定使

一、淨土寺ニ參詣了、

十六日

一、松殿侍從、清賢、長谷寺參詣了、

〔經覺私要鈔〕九十六 五月十六日己亥

虫所勞聊雖得減、食事等不本法之間、雖虫怖畏、入堂事沙汰度々間、酉刻參  
寺中了、予一重衣、布薄板輿、八十人計召具了、歸路向禪定院、然被候關白御  
所成就之由、禪公被サ出對演說之間、自其向彼所邊、僧正欲罷歸之處、自殿下一條兼良  
有召之由、隨心院被申之間、片時懸御目退出了、

六月七日己未、霽

日出以前參福寺辨才天了、予板輿、經胤以下五六人召具了、於福寺二階坊  
主出酒了、祝着、又入夜有弁講御供等、面々祝着了、

廿日壬申、霽

一、召長谷定使、千菊召之、明日可參之由仰付了、依老足難供奉之由申間、今日  
可罷下由仰付了、

廿一日癸酉、霽

宿願果ト  
シテ經覺  
長谷寺ニ  
詣ス

阿彌陀院  
經藏下事  
ヲ爭フ

爲果宿願、卯初點出迎福寺參長谷寺、予乘女輿、見聞六惜故也、共者山村尊  
藤、乘馬、其外召仕者共三四人步行、少者一人在之、不及日中沙汰、輿昇三人  
在之、已初點付長谷寺公坊也、則御膳以下沙汰出畢、先參觀音堂了、其後付  
宿坊畢、

一、旬講問二座、於輿內修之、自餘勲行等大畧略之畢、老屈故也、

一、公坊出一献了、爲痛之、橫坊定雅、長學、阿執行弘賢、尾崎等來、對面了、

一、夕參觀音堂入僧座了、予穀衣一重、香ケサ共者共僧限マテ來、不入內、

一、立風呂之由申之間入了、散窮屈了、

廿二日甲戌、霽

今曉卯初點始寅刻ニモ可出門之由自宵加下知之間、聞曉鐘欲起之處、老  
屈故歟、禰過問、卯下刻目ヲ覺了、共者共來歟之由相尋處、此間阿彌陀院與  
經藏限目論在之事儀以外ニ成下之間、只今秋山令折中處、未事行候、マケ  
テ一左右之間、幸參詣事上者、被開合處候者可畏入之由、經藏舍弟來歟申  
間、然者雖所用多可勘忍之由返答之間、畏入之由申罷出了、然又やうて來  
申云、兩方へ御奉書不可有卒爾之儀之由被仰付候者、可畏入之由申間則



書遣了、爰兩人臙來、失面目之間、無力次第之由申間、各召愚前教訓了、其後御膳以下食之、召仰執行、相構不可有卒爾之儀之由、能々可入魂旨仰付了、則召出興昇以下處、又出一獻之間、其後參巡禮了、以次向與院處、長老出合入內、茶以下服用了、令還向了、夜坊主來、茶卅袋持來了、然後一獻以下服用之後、則參與喜社、依爲路次、十穀僧庵見之、頗有興故也、茶十袋遣之、瓜以下出之間、暫休息了、其後聞日中九立長谷了、送者十人計執行給之、悅遣了、至岩田召具了、自其返遣之、又傳馬三疋仰之、內者共足ヲ損之間、乘之畢、酉初點下着迎福寺了、

一、自寺雜紙甘束賜之、

至興昇頃出之云々、以外事也、

一、公坊色々煩爲痛間、織色帷一遣了、畏申云々、又料足百疋給之、雖返遣、如何様之由申之間、無力召置了、

〔見聞雜記〕

〇歷代殘闕日記 八十四所收

(十月)

一、同十七日、俊雄公金界ノ加行結願了、明日十百一ヶ日ニ相當云々、雖然爲惡日之間、運時ニ沙汰了、仍又今夕ヨリ初行金界始也、

〔尋尊大僧正記〕

二

〔三月十九日カ〕

一、井山坊公事八人召返之、山々小木□□到來了、河原者一人參申、

〔大乘院寺社雜事記〕

九三

四月二日

一、夜前社頭新造屋下、藹分部屋へ小盜入、袈裟念珠等取之、末代至也、  
八日、夕雨下

一、昨日幸鄉盜人住屋自衆中進發了、進發以前爲集儀令申案内者也、此躰事、  
(議)  
去年爲衆中罪科之處、安養院多空房押而免之間、則躰所存ハ、寺門向事無爲之由相存歟、然而衆中一向不存知云々、仍重而新屋破却之、不可然旨申送多空方云々、

廿四日、雨下

(順永) (被以下)

一、衆中進發在之、轉害中御門鄉、(順永) (被以下) 今在家之鳥屋之弟、次男、先日明王院學賢房披官人殺害之了、仍鳥屋之三男相語十方、可押寄明王院之由及其沙汰、以外緩怠之間、彼三男之住宅進發云々、筒井一向失面目者歟、殺害之上ニ又進發、剩彼三男事、筒井披官放之由、明王院ニ出狀歟云々、希代事也、筒井近日無力之間、如此成下了、則衆中進發儀、筒井取成之云々、彼殺害人非披官人由、學賢房先日出狀了、雖然加扶持條、無其隱之間、彼兄弟可押



寄旨令申歎云々、

〔大乘院寺社雜事記〕一四十一 十二月九日

古市胤榮  
順永下會

一、古市來筒井与會合之次云々、

十三日、夜雨下

明王院被  
官又筒井  
殺ノ被官ヲ

一、夜前筒井披官人被打了、明王院披官人所行云々、失筒井面目了、古市色々計略、如形無爲分云々、弓矢取分ニハ近比不思儀事也、

〔大乘院寺社雜事記〕九十三 五月九日

山田古市  
ノ被官人  
喧嘩

一、夜前於鵲鄉喧嘩事在之、一方中院郷住人也、各定使等付遣之了、山田ト古市ト披官人也、無殊儀旨山村申入之、

〔經覺私要鈔〕六十九 五月八日辛卯、希代甚雨也、

古市被官  
負傷

一、今夕古市被官人住鵲郷玄深召仕者と口論、古市被官負手了、仍夜中自玄深方以人可相勞被官者、如何様ノも雖可懇望申、山田本主付申禮計也、付能躰兔も角も可被相計由申遣云々、

〔經覺私要鈔〕十七 八月十九日庚午、霽

田原本南  
中山ヲ襲  
ヒ寺坊ヲ

一、去十六日（大和磯城郡）田原本南押寄（山邊郡）中山寺坊六間切居、在家數十間燒拂處、及晚鳴貝

毀チ民家  
ヲ燒ク

鐘、寄手ヲ追懸之間、五六人打取云々、子細未聞、爲門跡管領在所縱雖有如何様子細、私沙汰以外次第也、可被行所當罪科之條、可當理如何、○大乘院社雜事

記ニハ、十八日ノコト、セリ、

〔大乘院寺社雜事記〕十四 八月廿日

一、去十八日田原本南押寄中山、在家燒拂、僧坊破却、堂塔立具以下悉以取之、一山如無及苜田之間、云地下、云郷内、蜂起及合戰之間、南方語勢共被打了、以外次第也、昨日此子細注進之、

〔大乘院寺社雜事記〕二十四 文明二年三月十五日、雨下

一、中山寺与田原本南相論間事、自安位寺殿被仰合（經覺）十市子細在之云々、十市申入分者、檢料事並散所人夫事ハ、如元可致其沙汰、其餘惣山へ事ハ不可申入違亂云々、此分可被仰山寺云々、内々聞寺所存ハ、於向後者一切不可入立南方之由一決云々、

〔大乘院寺社雜事記〕四十 八月八日、雨下

一、中山ニ正願院田六反在之、甲乙人不可有違亂由、札昨日給之了、百姓等申入故也、田原本南与中山公事故也、

經覺十市  
遠清ニ命  
ジテ争ヒ  
ヲ止ム



學侶六方  
調停ス

興福寺田  
原本南ヲ  
調伏シ中  
山僧ヲシ  
テ歸寺セ  
シム

蜂起集會

新造屋供  
料ノコト  
ニツキ學  
侶六方高  
島辻子住  
屋ニ進發  
セントス  
衆徒ノ住  
屋ニ進發  
ノ例ナシ

九月二日

一、傳聞、田原本南就中山寺事、學侶六方及評定、自學侶及度々申入之、其子細兩方へ仰遣之了、種々及評定云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

五十四 十二月廿四日、雨下

一、田原本南事、爲寺門可調伏上者、中山僧等早々可歸寺旨、學侶書狀昨日到來、則加下知了、

〔大乘院寺社雜事記〕

一十四 文明元年十二月十六日

一、蜂起集會在之、住屋破却、先日俄事故云々、  
廿九日

一、就新造屋供料等事、高島辻子住屋可進發之由、學侶六方一同蜂起云々、衆徒分住屋進發事無其例之間不可叶旨、衆徒一同一決、有進發者可追返旨、支度之間、學侶六方退散了、於衆中者其身羅名、或下人住屋發向ハ無力、於住屋者一向不可叶云々、於上古者六方學侶衆中自他平坊發向不能左右、一段三輩申合、於重過者可爲披官之由、以後ハ不可有其例者也、誠以學道申狀不可然也、

住宅資財  
沒收

〔大乘院寺社雜事記〕

一十四 十二月廿一日

一、上總庄之内堂供僧淨順法師、榎本西披依有不法、自井戸方召籠之、住宅資材等悉以取之云々、地下檢料ハ近來大略地下沙汰也、不得其意旨給主萩別所令申云々、當庄下司ハ榎本辻子也、井戸沙汰次第以外事歟、

〔經覺私要鈔〕

九十六 五月十三日丙申

一、依醉過今夜新下人於長井長井九郎左衛門下人口論、今市新下人被殺害了、仍武者馳廻云々、

〔經覺私要鈔〕

一十七 七月十四日丙申、霽

一、只今聞、夜前尊譽律師侍美乃親父、依口論負手、美乃親者古市下人也、仍就主人欲寄之處、敵方白土以緣懇望之間不及寄云々、

〔廿一口方評定引付〕

一四 〇山城 正月十四日

一、板倉方公事之子細披露之處、衆議云、十六七日比增長院召具雜掌被出、大和方可然樣被申、依其儀可被渡贓物歟之由、衆議畢、  
一、乘觀手代事、可召仕敬俊之由、申通披露之處、不可有子細之由、可申云々、  
同十六日

板藏大和  
ノト乘觀ト  
ノ公事ト  
和方ヲ大  
サシム



一、板藏大和方一獻足貳百疋、鄉原五十疋秘計難叶之由、乘珍申通披露之處、明日法會以後、重而可披露申云々、

同十七日

一、板藏大和方一獻之事披露之處、今度之公事之事、乘觀請于身公事之間、大和方一獻之事者、乘觀可出申、但勵私力彼方之事可成無爲否之事、實生院与相共可申付之由衆議畢、

同日

一、板藏大和方一獻料事、乘觀返答云、今度一獻之事、爲私可致沙汰之由蒙仰之條、迷惑之次第也、五十疋百疋之分者、何共致了簡雖可進候、二三百疋之事、只今可進之事一向無其了簡候所詮一獻料事無其足間、大和方エ可有私於御出候歟、不然者私之住宅（活却方）被却脚、可被成其足候歟、可然樣奉憑御扶持之由申趣、實生院与相共聞繼致披露之處、衆議云、大和方之事、乘觀爲私償之儀有之者、無斟酌之儀可致其了簡、不然者爲寺家可有御沙汰之間、先一獻料三百疋之分可進、仍此兩條猶々可尋決之由衆議畢、

同十八日

一、彼一獻料事、可爲沙汰之間事、乘觀重申含之處、返答云、爲私可致無爲之了簡事無其儀候、爲寺家大和方可然樣被仰者可畏存也、於一獻者、三百疋可其沙汰、但百疋事者則可進、相殘二百疋者、來秋以得分可被押召之由申旨披露之處、一往乘珍申、重而猶乘觀仁可申付云々、

同廿日

一、板藏大和方エ昨日日十九增長院召具兩雜掌被出之時之一獻料、大和方エ貳百疋折番、鄉原之右京亮方レ百疋現錢被持、大和方留守之間申置、鄉原被歸畢、此趣披露之砌、自板藏大和方以鄉原申云、昨日增長院來□承趣、召布賣ル申含之處、彼之返答云、殺害人之兄乘觀可渡給者也、不然者今度之贓物之注文此方有之間、悉可有返納、次此外乘觀仁百貫可被出之由彼等申云々、追而致披露、自此方可申之由、以兩雜掌自衆座返答畢、

一、今度之一獻料參百疋、涯分致秘計可進、但秘計不叶者其時佗事可申歟、不可有等閑之由、乘觀申趣披露畢、

同廿一日

一、自板藏大和方過事儀申之間、寺家之了簡難及、所詮乘觀爲私屬無爲之樣

大和方殺人ヲ返カスノ要ス  
大和方殺人ヲ返カスノ要ス

大和方一獻料ハ乘觀ニ貢ム

乘觀其資ヲナキテ陳ス



可致了簡之由、以內談之儀寶生院与相共申付之處、畏存之由返答之趣披露之處、自衆座以兩使乘觀方レ早々可有了簡之由被申遣畢、

一、大和方一獻之事、至于今者不可存知之由、乘觀申趣披露畢、

同廿七日

一、就一ヶ條公事、板藏大和方之事、乘觀爲私可致了簡之由雖申、于今無一途之儀之間、以兩使乘上繼今日明日之間、早々屬無爲之樣仁可致計略之由被

申遣畢、又最結句仁爲懐乘觀暫可立忍歎之由被申遣之處、可致思案之由

申畢、

二月三日

一、就一ヶ條之儀、自大和方昨日二日增長院工申云、自寺家于今無一途之御返事之間、所詮自今日可被止御齋之由、申子細披露之處、無人之間、明後日

五日可催申科之評定之由衆儀議畢、

一、自增長院此公事之事、自今以後者不可有存知之由、承通令披露畢、

五日、科

一、一ヶ條之儀重而披露之處、明日六日增長院大和方レ被出、以前之折番代

貳百疋被遣、可有佗事之由衆議畢、

一、乘觀爲私上邊之儀雖可届之由申、于今無一途之儀、然間爲敵方自然寺內之物、可取人質歎之間、寺家之大事不可過之、所詮一獻入足進之者、爲寺家可有了簡之由、以兩使敬連乘觀方工被申遣之處、計會之間、可致其沙汰之事雖爲難儀之子細、涯分者可爲沙汰之由返答申畢、

七日

一、昨日六日宰相律師被出大和方、彼返答趣、自寺家不及一途之御返事、剩又乘觀以強縁口入申條曲事也、一向爲寺家御所行之間、難心得之由申子細披露之處、乘觀上邊之儀既届之間、于今者率爾之儀、自大和方不可爲沙汰歎之由衆議畢、

〔東寺百合文書〕

十之部 十八至廿五

如仰吉兆尙不可有際限候、幸甚々々、仍一昨日預御尋候ける、罷出候て御使之不懸御目候、就一件之子細、今日可有光臨之由蒙仰候、可奉待候、十五日過候者、是より可被申候處、依公私之取亂レ候て、于今不被申候、但光臨候共、一篇候レハ難事行存候、可有御覺悟候、彼死人之一族親類共足輕共レ申合、



企之子細共ありき候彼等より申事より、殺害人之兄之淨觀を可被召籠事肝要之由切ニ歎申候、一途之御了簡御座候ハ寸ハ、淨觀を可給まての由、能々申とて候、巨細尙奉期拜願候由、可得御意候、恐惶敬々、(白カ)

應仁三

正月十九日

(郷原左京亮)  
資近(花押)

御同宿御中

〔東寺百合文書〕

七アノ部 至七十九

先日者預御使候、則致披露候處、入道御返事申入候き、仍左様之御返事、此御返事ニ承候て可致披露候、委細ハ先日之御使ニ心中之通念比ニ申入候つる、定而可有御申候、恐々敬白、

應仁三

二月九日

資近(花押)

增長院らる

御同宿御中

〔東寺執行日記〕

十(正月) 同廿日、淨忍去事ニ官領御内ノ板倉之使者有之、

〔廿一口方評定引付〕

〇山城 四月晦日

一、去年盜人贓物之事、可成山訴之由、玉泉坊申間、所詮布賣方江可被渡歟之由、宮内卿僧都被申通披露之處、衆議云、贓物之事、主護方並板藏方之儀如何之間、率爾仁不可被渡布賣方之由、衆議畢、

六月十四日

一、東福寺眞珠庵與增長院相論猪熊敷地之事、自齋藤次郎衛門方申間之事、以增長院之支證致披露之處、衆議云、召出彼方之支證、以內談之儀、任運可有成敗云々、

一、胎藏院被申教令院支證之事、如彼所望、世間靜謐以後、自奉行方乞出可有返進之由、〇年預一行之由、衆議畢、

〔廿一口方評定引付〕

〇山城 正月廿四日

一、美濃、岩見兩人來申云、不斷時事可被略問之事、去年纏而雖可訴訟申候、依月迫不申候、所詮一向被略者、夏衆堪忍之儀難有之間、不斷時之事、如元被引、於供料者所在之分、被下行者、可畏存之由、兩人申通披露之處、衆議云、寺家過法窮困、依無其足被略之間、訴訟之通難許容云々、



妙英遺跡ノ處分

同廿六日

一、故妙英上人遺跡庵立具家具等、任遺言之旨、如注文請取之由、聖三人來被申通披露之處、衆議云、故妙英寺家ニ寄進之間、不及案内爲私被渡之條、難心得子細云々、

五月十八日

一、故妙英遺跡住持之事披露之處、行慶房爲一鵝之間、可有移住之由可申云々、

六月廿一日

一、聖三人來臨訴訟云、故妙英上人遺跡之事、地藏堂跡江爲寺家可被引渡、但今時分可被引之事不事行者、所詮壹段之下地、如元可返給、以其致修理、可全住持之由被申通披露之處、壹反下地之事者可被渡云々、次所預置年貢□者爲聖中可引渡之時可有返弁云々、

〔廿一口方評定引付〕

○山城 二月十二日

一、去十日自若衆中以兩使乘連被申送、山城紀伊郡實相寺之搆破壁致通路、山吹之彦九郎子通之條曲事也、所詮彼之親屋内ニ檢符之由承之通披露之處、可申

實相寺ノ構内ヲ通路トス屋内檢符

西院夜番

付公文所之由衆議畢、

同廿一日

一、西院夜番、去年被沙汰之仁有之由、敬連申通披露之處、注人數可爲披露云々、

卯月六日

一、西院夜番之事披露之處、不入之方科分可被出之由衆議畢、

〔廿一口方評定引付〕

○山城 二月廿一日

一、實相寺依亂世窮困過法、出仕等難叶之由連々宣說之間、既及八旬云宿老、旁出仕之難義被推察申之間、所詮自今以後者以別段之義、諸法會之出仕可被免申、但隨意仁可有出仕之由可申云々、○實相寺雜舍賣却ノ條ニ見ユ、

卯月十六日

一、來月八日、八名三昧實相寺就被申、先可被略之由衆議畢、

九月五日

一、實相寺坊跡之事、公方樣爲御坊處不及于案内、以自專之儀、竹木等伐取、被立自用之條、難心得次第也、於向後者、下苜之外者、竹木不可被切之由可申

實相寺坊跡ノ竹木ヲ伐ルヲ禁ズ

兵亂ニヨリ實相寺ヲ窮困過法住持ノ諸法會出仕ヲ免ズ



云々

〔廿一口方評定引付〕

○四山城 六月廿六日

一、款冬町金阿彌家之前井之事、駿河申云、町人等訴訟之通者、彼井之井筒破損之間、爲惣之町人出合可加修理之由、金阿彌(仁)申之處、金阿彌依不成各出之衆各々堀井畢、而彼井前(仁)大石有之、取此石置溝川、物洗之踏石可爲沙汰之由、町人申處、金阿彌相支云々、雖然町人任申旨、可爲踏石之由衆議畢、

十月十六日

南小路與三太郎逐電ニツキ、其家ヲ檢符ス

一、南小路太郎兵衛子與三太郎夜前逐電之間、爲寺家可爲屋(齋)檢符之處、新右衛門方之者押而令檢符之間、自寺家又欲檢符之處、彼方之者相支之間、新右衛門方(仁)以雜掌可申之由衆議畢、

同十八日

一、與三太郎住宅檢符之事、爲不入之地之間、任先規爲寺家可致檢斷之由、新右衛門方(仁)可申之由衆議畢、

〔尋尊大僧正記〕

ニ(正月カ) 廿六日、雨下

音信往來

一條政房

一、(一條政房)福原御所より御書到來日ニ、政房、兵庫ニ遭フコト、本年十月十六日、應仁二年七月二十六日

三月二日

鷹司房平

一、(殿實)隨心院殿同道、行向珍藏院了、  
一、(房平)鷹司前殿入御、楹三荷、折二合被持□□□殿上人一人、式部少輔、俄入御之間、自珍藏院□□御盃進之、泰英可申入之、則還御□□□英者也、

三日

一、(尊譽)大納言律師、付衣、爲御禮令進鷹司殿了、

(十九日カ)

一、(一條兼良)殿下入御□□□以下同、予□□□□先度御返報也、

廿日

一、此兩三日廣壽院殿被下向坂本邊物念故云々、可□居佛地院云々、上下四十八人計云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

九三十四 四月一日

一、成就院ニ參申了、  
八日、夕雨下



筒井順永

(順永)  
一、筒井來對面、

十三日

東門院孝祐

(孝祐)  
一、東門院僧正光臨見參楹以下被持來、

廿六日

經覺一條兼良及尋尊ヲ訪フ

(經覺)  
一、安位寺殿御出殿下へ御參云々、次此門跡へ御出了、御楹以下濟々被持之、  
(重藝)  
一、袖留木法橋來、

廿八日

善阿之參申一人、

五月一日

一、予成就院ニ參申、

二日

一、善阿之至今日參申、

一、昨日十市遠清來對面、先日禮云々、

六月二日、雨下

一、光守律師、興弘來、一獻給之、畏入云々、

十市遠清

相應院門主等越前ニ往ク

十三日

一、成就院參申、宇治龜大夫參申、

廿四日

一、覺心上人來、當院三殿事仰合之、

廿七日、雨下

一、昨日姫君<sup>十六</sup>下向云々、

一、相應院門主以下門下悉以越前國河合庄<sup>(吉田郡)</sup>ニ下向云々、

〔大乘院寺社雜事記〕<sup>十四</sup>

七月一日、大雨下

一、殿下御所ニ參申、

八日

一、東門院僧正來、於大納言律師部屋在一獻、

十一日

一、成就院ニ參申、日中物進之了、

十五日

一、東御方入御、兩寺御巡禮次云々、無殊儀者也、



光宣

廿八日  
一、光宣法印來對面了、無殊儀、  
晦日

光宣兼良  
二、謁ス

一、光宣法印令參殿下、御楹等進上之云々、御對面、祝着畏入云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

一四十一 十月一日

尋尊兼良  
二、謁ス

一、予參申成就院了、殿下御對面、

福住八箇  
雙ノ仁無

一、筒井大東之息福住、昨日自京都下向、此三ヶ年令在京、爲一度不下向、隨分弓取也、近日筒井一門之内無双仁也、

西坊城氏  
奈良下向

廿二日  
一、西坊城 營家 廿日參申安位寺殿、在京迷惑、半ハ逐電儀歟、

十一月一日

一、殿下御宿ニ參申、

五日

一、殿下ニ參申、卜一檢校祗候了、

六日

一、香舜、香專兩人參申、

十一日

一、參申殿下、今夜粥頭清賢法橋ニ仰付了、

廿五日

一、報恩院有俊僧都弟子若君同道、對面了、十五歲云々、勸修寺教秀卿息云々、

十二月一日

一、榎一、双兩種進之、

九日

一、經算來、子細仰付之了、

十二日

一、長谷寺執行爲歲末禮參申、見參了、

十五日

一、卜一檢校、曾一檢校來、

廿一日

一、長谷寺執行爲歲末禮參申、見參了、

勸修寺教  
秀ノ子

一、榎一、双兩種進之、

十二月一日

一、榎一、双兩種進之、

九日

一、經算來、子細仰付之了、

十二日

一、長谷寺執行爲歲末禮參申、見參了、

十五日

一、卜一檢校、曾一檢校來、

廿一日

一、長谷寺執行爲歲末禮參申、見參了、

歲末ノ禮

一、長谷寺執行爲歲末禮參申、見參了、

曾一檢校

一、卜一檢校、曾一檢校來、

廿一日

一、長谷寺執行爲歲末禮參申、見參了、



豐岡豐田  
歲末ノ禮

一、豐岡、豐田來、歲末禮各付衣、見參了、  
(大和生駒郡(同宇陀郡))

一、鳥見福西來、歲末禮云々、

一、昌懷來見參、條々令申、

廿四日、雪下

一、吉田息來、折一合、榎二荷持參、不寄思次第迷惑也、

節分  
廿五日、雪下、節分

萩別所  
一、萩別所歲末御禮參申、

廿七日

窪城  
一、窪城爲歲末禮來了、

十市新次郎  
一、十市新次郎參對面、

廿八日

一、今市新參申、

井上若狹公  
一、井上若狹公參賀了、

廿九日

一、東門院僧正光臨、對面了、

古市胤榮  
長田家則

一、光守律師參、

一、已心寺坊主、守弘室、春覺律師(胤榮)(長田家則)古市、筑前守各參申、

晦日

一、東北院僧正光臨見參、

吉田來見參、任英得業同、權大工、正大工同、經算、經禪同、實英同、

一、松殿侍(忠顯)從來臨、

一、慶猷上洛無殊儀、但不及尋、

〔經覺私要鈔〕九六十 卯月十一日乙丑

一、陽淵律師(少衣)順懷五師(付衣)實心得業來賀禮云々、仍老僧也、對面了、

十五日己巳、終日甚雨

一、雨中之間有素麵等、面々會合了、

廿六日庚辰、霽

一、爲申禮於關白殿出南都(一條兼良)香(付衣)五帖、板輿先參成就院(當時關白)、則出御(御直)、少松殿侍(直)申次了、榎一双、素麵折一合、藺豆折一合進之畢、

五月朔日甲申、霽

經覺一條  
兼良ヲ訪



一、專實、繼舜法橋、并舜權寺主、泰弘權寺主來、夕玄深權寺主來、各能小盃了、

六日己巳、且程雨下、自己刻齋、夕又雨下、事外甚雨

一、玄深來繼舜法橋來、

廿二日乙巳、齋

一、春圓大來、條々有申旨、

六月朔日癸丑

一、孝承寺主、繼舜法橋、泰弘寺主來、北面堯勲來、

十六日戊辰

古市來、被箱以下持來了、

十七日己巳、龍門庄內夕立

勝觀房向大藏寺云々、

廿三日乙亥、齋

東南院覺朝僧都被來、愚老可來之由爲申也云々、過分之由返答了、夕被歸

了、折節依無物不及翫者也、瓜一荷賜之、

東南院覺朝

一、東南院被來、夕被歸了、  
廿九日辛巳

依招引向東南院予細美直綴、板輿、烟經胤、喜久法師、三郎召具了、楡二荷、素麵一折、瓜一荷遣了、先鷹司政平內府同入御給、後直垂白、御輿者自東南院被進了、色々煩也、爲痛、

□安樂坊順覺得業來、盛海按察已講來、但於□奈者楡一双、素麵一折、瓜一盆、賜之、不思寄儀方□也、予夕歸了、內府御留、歸路向禪定院□令以下事談合了、

〔經覺私要鈔〕十七 七月小朔日癸未、夕立

一、孝承、英舜、泰弘來、

一、平清水藤若來、

九日辛卯、齋

一、自禪定院檢校曾一召給了、平家三口語之、能小盃了、  
八月十日辛酉、寅卯刻山鳴了、風少吹了

東南院被來、

十七日戊辰、天曇

覺朝鷹司  
政平及比  
經覺ヲ招  
待ス

曾一檢校  
平家ヲ語  
ル



一、春圓大雖來、繼舜條々伺申旨在之間、重可參之由申之退出云々、  
廿三日甲戌大雨下

今日木阿爲下田舍申暇之間、自明日雖當番給暇了、仍次番春阿也、讓之處、  
番ハ讓次トモ捨置トモ、心(必カ)我身有所用間、可下田舍之由返答云々、言語道  
斷、緩怠之返答也、給恩時可思知歎、有所用何不申暇哉、

廿八日己卯雨

一、後開門跡ニハ、隨心院嚴實僧正(教秀)勸修寺御妻正光庵主、鷹司西殿等會合云  
々、

隨心院嚴  
實正光庵  
主等大乘  
院二會合  
ス

一、楠葉元次男夜部罷下云々、

楠葉元次

〔經覺私要鈔〕六十 卯月九日癸亥

今日內山本願正忌也、如形奉訪了、

內山本願  
正忌

〔大乘院寺社雜事記〕三十 四月十七日

一、三保摩御忌日無之、

〔經覺私要鈔〕六十 四月十八日壬申、

一、別會五師宗算付出世奉行伺申云、略中次三保摩御忌日事、去年依料紙違

三保摩御  
忌日  
ヲ以テキ

ハズ

亂無始行、彼是可伺承云々、返答云、略中次三保摩御忌日事者、依布施物未  
到、去年無始行歎、然者當年も可爲同篇事、

十九日癸酉、

玄深來申云、略中次三保門御忌日事者、縱料紙雖未到、有御始行可然云々、

〔大乘院寺社雜事記〕三十 四月十八日

一、後已心寺忌日始行之、

大乘院孝  
尋忌日

〔經覺私要鈔〕六十 四月十八日壬申、

一、後已心寺御房正忌也、仍如形奉訪了、

同正忌

五月十八日辛丑

一、後已心寺御房月忌也、如形奉訪了、略六月十八日、七月十八日、八月十八日、  
〔經覺私要鈔〕六十 四月廿一日乙亥

九條經教  
忌日

故大間御忌也、備進靈供、讀誦法花品畢、

五月廿一日甲辰、

故大間正忌也、然依念劇忘却之間、僧等招請事議不叶、仍地藏堂法花所へ

茶並用途少事遣了、北圓堂御燈進之、

同正忌



同月忌

〔經覺私要鈔〕

十七 七月廿一日癸卯雨下及數日了、以外也、

一、故大間月忌也、備進靈供、讀誦壽量品畢、〇八月二十一日略ノ條、同文ナルニヨリ略ス、

九月廿一日壬寅雨下

一、故大間月忌也、備進靈供、讀誦法花品了、

〔經覺私要鈔〕

六十 四月廿六日庚辰、霽

一、故御房並禪尼忌日也、備進靈供、讀誦法花品了、〇五月二十六日、七月二十日、同文ナルニヨリ略ス、

略

六月廿六日戊寅午未刻雨風、折木吹了、雨ハ甘雨云々、

故御房並禪尼忌日也、備進靈供、讀誦兩品畢、

〔經覺私要鈔〕

十七 八月廿六日丁丑聊屬霽

一、故御房並禪尼忌日也、備進靈供、讀誦法花兩品、壽量、令廻向了、〇九月二十日、同文ナルニヨリ略ス、

文ナルニヨリ略ス、

〔大乘院寺社雜事記〕

三十 五月六日、雨下、日中以後

一、孝戒院殿御忌日也、仍殿下御精進云々、

八日、雨下

大乘院孝  
圓並二禪  
尼忌日

孝戒院忌  
日

康和大僧  
正忌日

足利義教  
忌日

光明皇后  
御忌日廻  
請位所ノ書  
様

大乘院覺  
尊忌日

九條滿教  
忌日

新宮忌日

一、康和大僧正御忌日、於一乘院長講堂修之、

〔經覺私要鈔〕

六十 五月廿四日丁未、霽

一、又普廣院御忌日也、如例奉訪了、被懸御意故也、

六月廿四日丙子、霽、極暑也

〇上 普廣院御忌也、如形奉訪了、恩人故也、〇八月二十四日ノ條、異事ナキニヨリ略ス、

〔經覺私要鈔〕

六十 六月五日丁巳、霽

光明元后御忌日廻請中綱持來、令加判遣了、但權別當位所不宜之間、則使  
中綱仰了、別會只、今書載分ハ、權長官大和尚位法印大僧都ト書之、權長官  
法印大和尚位大僧都ト可書也、

十一日癸亥、霽

一、五大院忌日也、如形奉訪了、

〔經覺私要鈔〕

十七 七月四日丙戌、天曇午刻地震、夕雨

一、後三緣院月忌也、如形奉訪了、

十一日癸巳、霽

一、新宮忌日也、如形奉訪了、〇八月十一日、九月十一日、同文ナルニヨリ略ス、



經覺墓參

又諸家ヲ  
歴訪ス

亡魂手向

靈供備進

不比等忌  
日

十二日甲午、齋

一、申下刻參墓、大安(大乘院孝覺)寺已心寺御房後已心寺御房等也、又參御影念殊了、雖出干

飯等、日既及晚之間、如形受用還向了、自其參極樂房禪尼墓了、故禪尼、竝兩

所墓也、又曼陀羅堂南柱自西第二柱ニ故僧正ノ唯骨在之念殊了、(遺方)自其向

禪定院僧正、令見參談諸事、返樣ニ參成就院殿下御所、爲申禮也、然既御寢

之由聞之間、令對面隨心院僧正、亥下刻歸古市了、月明兮路次優美了、

十四日丙申、齋

一、酉初點手向水於亡魂燈明六燈蓮葉以下如例、法相傳來躰ヲ初手向候了、

十五日丁酉、齋

備進靈供、故大閤後已心寺故御房母儀禪尼、按察局、故御房母儀、以上六前、

其外乳母、並故吉河靈供能之畢、吉河事、奉公異他者也、仍如此沙汰了、

〔大乘院寺社雜事記〕十四 八月三日、雨下

一、本願淡海公御忌日如例、但後日開之、十日下行云々、

〔經覺私要鈔〕十七 八月十六日丁卯、齋

一、八月三日御忌日之廻請中綱持來來十八日可沙汰云々、則令加判遣了、就

廻請位所  
ノ書樣

其權官位所書樣違先規之間注遣了、只今別會書載樣ハ、權別當大和尚位  
法印大僧都卜居之、

舊記樣ハ

權別當法印大和尚位大僧都卜在之、此分書遣了、

十八日己巳、齋

一、今日八月三日御忌日在之、

〔大乘院寺社雜事記〕九十一 六月廿日

一、樸楊大師忌日、(智周)

〔大乘院寺社雜事記〕十四 七月十三日

一、今日寶峯院御忌日也、大般若無之、龍花院新田年貢事、小泉無沙汰故也、珍

事々々、自去七日可始行事也、六日、

十四日

一、大乘院御忌日、釋迦多寶供養如例、於放光院修之、供料楊本庄所出了、

十五日

一、御靈供進之、供御所沙汰也、後已心寺、(大乘院孝圓)後寶峯院分合二前、

同隆禪忌  
日

大乘院尊  
信忌日

樸楊大師  
忌日



〔大乘院寺社雜事記〕一四 十月十六日

一、自去十日無垢講經每日一卷、今日又一部轉讀之、大職冠御忌日也、十一月十三日

一、慈恩大師忌日、五重門等讀誦之了、

十二月十一日

一、(慧沼) 淄州大師忌日、懃行如形、

〔尋尊大僧正記〕二 (正月) 廿八日

一、遊樂坊逆修始之、

三月三日

一、法花寺殿御□□□成就院□□□□御見參(二條兼良) 入了殿下御對面云々、□

□□被進之、爲逆修御丁聞云々、

〔經覺私要鈔〕九六 五月十七日庚子、齊

一、逆修今日結願了、申刻立時也、殊庚子也、所願成就無疑者也、可資可信、

〔廿一口方評定引付〕四 山城 正月廿日

一、切聲佛事、如根本軌式懃之、終仁必可被行云々、

法會切聲

錄足ノ忌

慈恩大師ノ忌日

淄州大師ノ忌日

遊樂坊逆修

御影供ニハ切聲ヲ爲サズ

佛事ト捧物

一、自來月諸法會、如去年切聲可被行、但於御影供者、如本式可被行之云々、七月廿四日

一、祐賢法橋七年忌佛事、可被行阿彌陀三昧之由、依望申貳百疋乘觀進之、仍披露之處、捧物以貳百疋之儀、阿彌陀三昧可被行之事、且者雖爲聊爾之至、彼等所望申之間、依爲寺官、以別儀今度之事者、先可被行、更不可成後々之例之由衆議畢、

十二月十七日

一、十二月十九日、爲妙英追善、自當年每年百疋宛、自金勝院可有沙汰之旨披露畢、

〔本國寺年譜〕六 十二月廿一日、朗師百五十年忌、營大法會如先規務之、世上不穩大爲祥、

〔東院年中行事記〕四 □□年十月十七日條裏書

敬白 請諷誦事

三寶衆僧御布施

右奉爲二親尊靈並與五郎男春龍女亡靈往生極樂、頓證菩提、捧一紙達、嘍驚

諷誦

日朗百五十年忌



十力高聽仍所修如件

文明元年六月十二日

小保丸 敬白

〔高野山文書〕

又續寶簡集三十二

嵯峨聖信上人御忌日請定

嘯請

道師 阿闍梨 長任 奉

讚頭 阿闍梨 祐嚴

經頭 入寺 藏惠 奉

右明日廿七於御影堂陀羅尼後可令參勤給之狀如件

文明元年七月廿六日

行事入寺環尊

年預阿闍梨貞實

嵯峨聖信  
忌日

宗頓ノ諸  
大功德主  
逆修下火  
法語

〔心宗禪師錄〕下 爲諸大功德主逆修下火法語  
一片虛凝絕謂情威音那畔已圓成人人具足般若力不動于戈致太平所以父母未生以前本來面目昭昭乎哉入火不燒入水不溺寂而常照皇皇如也在聖不增在凡不減靈而妙明轉轉活鱗不得狀不得名脫躰現成時不留朕蹟去來無象處彌亘八紘漏泄彌勒家風江上數峯翠打開文殊境界洞中斷烟輕

正恁麼時舉步兮撞著鼻孔轉頭也刺破眼睛或七事隨身指揮三軍師旅或一劍照雪精練十萬雄兵輔弼君門則永作國家棟幹衛護法社則親提佛祖權衡直得閻羅大王股慄阿旁羅刹魂驚說甚地獄天堂石人空裏擊鼓論甚菩提煩惱木童水底吹笙龜毛繩繫對頭風坐斷毘盧頂兔角杖挑漂底月踢倒涅槃城舉火把云這箇是諸人平生自由三昧也雖然恁麼百年後脫却穀漏子向何處去山僧卽今爲諸人指出轉身一句擲下火炬云看看紅爐焰裏碧波生 文明元年八月八日

宗頓ノ諸  
大功德主  
拈香法語

爲諸大功德主拈香之語

此香連根株於金剛水際布枝葉於三千大千觀之者眼睛瞎聞之者鼻孔穿畢竟這箇惡氣息從那裏起雲門一曲臨濟三玄

索訶世界南瞻部洲大日本國濃州路諸郡鄉居住菩薩戒弟子諸大功德主文明元年八月初九日就于金寶山瑞龍精舍啓帑揮金令闔山苾芻自初至今月念七日逐一奉書寫大乘妙經或頓或漸若干部及課誦經呪施設水陸會蓋預修當來妙果者也今日散場特營辨伊蒲珍膳謹拜屈現前尊衆諷演大佛頂光

瑞龍寺ニ  
大乘妙經  
ヲ書寫ス



聚摩訶悉恒多般陀羅無上神呪次仍命山野焚此寶香供養盡十方婆伽梵徧法界賢聖衆所鳩善利專冀諸大功德主頓脫多劫輪回苦因速證無上菩提者共惟諸大功德主精神卓爾志氣超然人人領略釋迦飢來喫飯箇箇乎欺達磨困來打眠或靈鑑懸胸照破無明窠窟或智刃在掌截斷聖凡蓋纏是故諸法寂滅相不可以言宣點檢將來一場漏逗到這般田地歷劫未明事忽爾得現前說甚靈鷲雄機霜前楓葉麗論甚少林密旨節後菊花妍孤迥迥峭巍巍上透宵漢淨裸裸赤洒洒下徹黃泉正當恁麼時十聖三賢四生九類以至森羅万象草芥人畜情與無情同一悲仰同一慈力剎那無有生相剎那無有滅相一味平等密無中邊雖然未是向上宗乘事作麼生是向上宗乘事踏破澄潭月穿開碧落天咄這箇且置山野有一偈卽今爲諸人伸真法供養去齋僧供佛惡因緣酒肆魚行活祖禪以香擊爐云生死涅槃百雜碎無根鐵樹吐香烟

心海如貞禪定尼拈香語

一瓣梅檀價莫論無陰陽地託靈根拈來插向博山上巖巖黃雲覆九垓索訶世界南瞻部洲大日本國濃州路山縣郡富永庄居住奉三寶弟子孝男土州太守

宗頓心  
海禪定尼  
七回忌香  
語  
美濃山縣  
郡富永庄  
居住土州

太守永家

永家文明元年八月念四日伏值先妣心海如貞禪定尼七周之忌辰預於日前頓寫大乘經王全部及施設水陸大會正當今日就私第營辦伊蒲珍膳而謹以伸供佛齋僧之儀仍而拜屈現前尊衆諷演大佛頂光聚摩訶悉怛多般陀羅無上神咒之次命瑞龍小比丘宗頓焚斯妙兜樓婆奉供養本師釋迦如來大覺世尊三世十方諸大調御現座道場圓通大士當忌阿闍如來微塵刹土不可說諸大薩埵西天東土歷代諸祖師人間天上一切諸賢聖衆梵釋諸天大小神祇等專冀憑此殊勛淑靈徑向摩訶衍海駕起法身船運濟大地群生者也共惟先妣心海如貞禪定尼坤儀潔白天質忱恂奉事父母則而孝心厚撫怜老幼則以慈育均邦閭皆威德遐邇盡歸仁加之蚤歲受信衣於栢堂室中堅持菩薩之淨戒末後需法語乎大雲山主親結般若之勝因剩安苾芻清衆傾庫藏孰若須達長者布金銀可謂具丈夫氣何妨現婦女身是故威音那畔空劫以前一著子不假修證本自天真混沌未分先彌綸十虛而無向背混沌已分後廓通三際而絕踈親全無五障可除梧桐秋色冷有甚三從可厭菡萏露香新經卷藥爐全提祖師意朱簾玉案撥轉正法輪恁麼時節會憎愛一如未必菴提遮之逸格亡真俗二諦無望馬郎婦之芳塵一杵華鯨木人驚破夢七年夜雨石女暗傷神大用現前



濕紙裊金毛獅子，全機活脫，單絲控玉角麒麟，咄，恁麼告報，且置家門興盛，一句如何指陳，少林一笛太平曲，永祝南山億萬春。

〔春浦錄〕

妙安大姊廿五年忌

宗熙ノ妙  
安大姊二  
十五年忌  
香語

這香安樂田園，固帶深根，氤氳香氣，充塞乾坤，南瞻部州大日本國攝津州四天王寺有慶禪庵住持苾芻尼妙榮，文明初元十一月黃鐘十八日，密遇先妣某之辰，就于當庵，具百味珍饈，供大和苾芻，虔營辨香花之儀，以竭追慕之誠，日前圓通懺摩一座，謹拜請現前雲侶，同音諷演，無上法印，清淨海眼，白傘蓋神咒之次，借手於小比丘某，焚此妙薰，以奉供養，三世出興十號，具足本師釋迦牟尼大和尚濡首遍吉二大薩埵，西向四果鍊根聖者，西天東土傳灯列祖，現座道場過去正法明如來，當境旺化豐聰太子聖廟，所萃善利，為覺靈資冥緣，共惟先妣妙安大姊貞操水潔，淑茂春溫，家譜光前，史兵權般後昆，守女子箴，以克務慕菩薩慈以為尊，蹈斷末山欺，志閑呈懺袋，追配無着，咲出菴弄精魂，無位真人乾屎橛，正法眼藏破沙盆，妙安大姊如此見得，喚男呼女，抱子弄孫，如此愛用，在鼻嗅香，在口談論，在手執提，在足運奔，盡是本來面目，無不自己心源，難々八角磨盤空裡走，易々九曲黃河徹底渾，也不易枝南吐鵲前之玉，堂北留在日之萱，五障頓脫，八遵何

攝津四天  
王寺慶禪  
庵住持尼  
妙榮

存，正與麼時，妙安姊現大人相，突出諸人眉毛，眼睫上，建立無量妙義百千法門，看麼妙榮禪人與諸昆弟，各出隻手，修此盛事，為罔極恩，更有報恩句，諸人聽鸚鵡寶能言，舉香云，千眼大悲，看不破，金香爐下，鈇崑崙，團。

〔京花集〕

小補東遊後集

月桂明公庵主率都佛事

月桂庵主  
率都佛事

五百丈高蟾窟桂，斫成率都與人看，圓明自性不留味，雲破天邊月一圓，共惟月桂明公庵主，靄靄和氣，凜々忠肝，遠出小倉之先用兵，逞小范老武略，近承大町之後，繼踵開大馮君門關，子弟不愧江左玉樹，富貴何羨洛下牡丹，世皆烏合蟻聚，公獨鯤化鵬搏，蚤修極樂往生因，尋舊盟於白菡萏，晚學比丘安摩法，譬丹頂於紫梅檀，已能入真入俗，遮莫遺聲遺安拜，悟空塔婆，則機關比蘇內翰，無異齊大寂流脉，則鼻孔與龐居士一般，豎奉頭自稱庵主，結跏趺以効壁觀，鬪諍堅固二千餘年，真善解脫，惠善解脫，生滅去來七十四歲，大乘涅槃，小乘涅槃，到這裡論甚司馬，歸兜率陀出入內院，管甚擒虎，作閻羅王，指麾冥官，鑊湯爐炭，如幻三昧，佛界魔官不涉兩端，信手截斷，色受想行識之五陰，清寥々白的々，驀頭築著，不釋文普地之諸聖，明歷々黑漫々，佛事門中，雖分累七諱日，真如海裡全是無二波瀾，易々難々，更有那一着子，聽唱我萬年觀，喚，小春自在梅花上，風雪山中



吹不寒

同法華經跋 三七

同三七日  
忌法華  
經ノ跋

釋迦老子在菩提樹下成等正覺於是三七日思惟如是事是名華嚴二千年後  
今日今日余又思惟是事(如龍力)時毛錐子突出曰子錯此經法華也非華嚴也今日適  
當月桂庵主三七日之辰書之以爲經題目耳余咲曰自其異者視之法華亦則  
圓頓大也自其同者視之華嚴亦開示悟入也且夫華嚴法華之二宗以三七之  
義或名之法華或名之華嚴其實皆不然也衲僧門下頭々物々法華便華嚴々  
々便法華是真一佛乘也汝參得黑豆子和尙作這見解可咲遂責毛錐子書一  
語於上云如是我聞伯勞饒舌作禮而去鸚鵡能言筆未揮先寫經畢梅花面目  
鍊崑崙

同法華經跋

同四七日  
忌法華  
經ノ跋

經曰家星之中月天子寂爲第一此法華經亦復如是原夫大覺明之性如滿月  
輪照四天下無盈虧之相無黑白之異且約衆生迷妄之見以致十方昏暗之鎮  
而已吾釋迦古佛現法身則作清淨月現報身則作圓滿月現應身則作牟尼月  
一卽三々卽一々乘之時義大矣哉文明初元十一月七日適當月桂明庵主斷

七忌辰孝子某等拜請大慈翦衆磨四大海硯染須彌筆書此經以追薦冥福鳴  
乎釋迦古佛四十九年唯說一乘之法月桂庵主四十九日又唯說一乘之法希  
有々々到這裡釋迦之爲月桂乎月天子之爲法華乎不可得而知也嗤不知却  
問天邊月

〔京花集〕

三東游續集 月桂菴主法華銘 並序

同大祥忌  
法華ノ銘  
木ヲ紙ト  
ス

(文明三年)辛卯九月十八日乃月桂明公菴主大祥忌也孝子某等筆折之骨墨瀝之血以  
木爲紙書寫妙經蓋木紙云者所謂月桂歟吁何以言之法華會上佛說桂香明  
八百功德其根柢也屈蟠月中其枝葉也覆蔭天下明歷々鬱葱々八天百万乘  
聞薰力住世七十四年法生產業皆實相也心華開矣覺果結矣與彼白侍郎入  
如滿社黃太史參晦堂禪不可同日而語也則月桂之所以爲月桂不亦大乎作  
經之銘々曰

夫十法界元一精明是曰妙法天竺先生三根融會二覺圓成我明菴主有實有  
名離真俗諦絕聖凡情如紅蓮華出泥而清超生死海登涅槃城日迫三周孝子  
盡誠書七軸者追福以營塵々刹々鷲峰崢嶸

〔京花集〕

四小補東遊後集



書前石州太守愚翁大居士率都寺衛門請

我佛有四種支提其一曰般涅槃支提々々見在鶴林園中古者涅槃言不生樂言不滅誠哉此言原夫大覺明之性在諸佛不增不減在衆生無大無小且約種熟脫根機各別示有生死相而已矣前石州太守愚翁大居士蚤入龍安丈室聞所謂不生滅之法可謂在家頭陀七十三年前不生而來七十三年後不滅而去生死岸頭遊戲自在豈不異乎闍維之後其地累土爲墳特刻率都一基建之其上以表般涅槃支提之義嗚乎如在之敬至矣哉釋景三謹題拙偈以充供養云生佛不曾分自他三千刹界率都婆故家喬木秋風暮子葉孫枝遺愛多 文明初元己丑九月廿日

〔大乘院寺社雜事記〕

九三十一 五月十八日

一、今度就松林院再興事學侶六方沙汰人

- |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|
| 春圓房五師 | 長信房   | 陽春房律師 | 禪榮房五師 |
| 覺恩房五師 | 願圓房擬講 | 願信房   | 陽專房   |
| 舜慶房律師 | 良觀房   | 陽忍房律師 | 松源房   |
| 學延房   | 延明房   | 良勝房擬講 | 琳乘房   |

- |     |          |       |       |
|-----|----------|-------|-------|
| 禪良房 | 觀實房      | 顯舜房五師 | 定專房五師 |
| 長勝房 | 以上學侶 不階次 |       |       |

- |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|
| 長賢房 | 觀禪房 | 源舜房 | 願禪房 |
| 賢信房 | 貞覺房 | 榮恩房 | 榮學房 |
| 源松房 | 願源房 | 夕□房 | 願舜房 |
| 源禪房 | 舜行房 | 陽實房 | 夕空房 |
| 宗觀房 | 長教房 | 舜善房 |     |
| 追加衆 |     |     |     |
| 舜教房 | 實俊房 | 長觀房 | 榮賢房 |
| 琳光房 | 禪願房 | 琳舜房 | 實源房 |
| 順圓房 | 善順房 | 倫觀房 | 專覺房 |

以上六方 不階次

〔異本塔寺長帳〕

原題長帳  
續年日記

四

文明元年己丑會津火難ヲ防尊佛有是ヲ建

寺安置ス號地藏山善叶寺法光院是開山宥襲也則名善叶町



會津正洞寺建立  
會津滿福寺再建

同夏井邑正洞寺ヲ天慶建、  
同藤澤邑滿福寺、宗海建替ル、是ハ正治二年ノ草創也、  
〔會津舊事雜考〕五 文明元年、密徒宥襲建於黑川今若松地藏山善叶寺法光

院矣、此由舊有地藏堂、世人祈於事則善叶、故稱叶地藏、號因茲云、  
曹洞徒天慶建於稻川莊夏井正洞寺、慶者常州産也、  
凡例 密侶宗海、中興耶麻郡藤澤村滿福寺、

飛彈一念  
教寺建立

〔飛州志〕六 大野郡 寺院部 一念教寺

(小八賀) 在于同鄉三谷村、同宗同寺未開基始祖釋道了、文明年中建之、本尊裡書云、方便法身尊形大谷本願寺釋實如在判、文明元年己丑□□白川善俊門徒飛彈國川上鄉三谷願主道了、

種子島時  
氏本源寺  
ヲ建ツ

〔薩藩地誌拾遺集〕中 大隅國 一、文明元年、時(種子島)氏建立本源寺山號吉祥山以淨光院日良爲開山、

武藏藥王  
寺建立

〔新編武藏風土記稿〕二十三 葛飾郡 龜行村 藥王寺跡此寺元寶持院ノ末ニ云ルカ起立スル處ナリシカ、明和五年廢寺トナリシト云、其跡今ハ藥師堂除地ト云、本尊藥師ハ眞福寺ヘ移シ置リ、

〔尋尊大僧正記〕二 (三月二十三日カ)

人夫

七郷奈良  
巡人夫

一、自立野人夫進之、爲庭也、

〔大乘院寺社雜事記〕九 三十 四月廿日

一、七郷奈良巡四人召仕之、

〔大乘院寺社雜事記〕十四 八月晦日、雨下

一、大宅寺人夫、奈良巡二人參申、

九月二日

一、奈良巡出雲一人、横田一人、大宅寺二人、高田二人、新木二人、

三日、大雨下

一、奈良巡人夫、

〔大乘院寺社雜事記〕一 四十 十月廿四日

一、人夫六人、自松林院召給之、三味夫云々、早朝より入會まで召仕之、嚴密之

公事也、

廿五日

一、人夫六人、松林院より召進之、

廿六日、雨下



一、松林院人夫六人召進之、依雨下則返遣之、

廿七日

一、松林院より人夫六人召給了、

十一月廿三日

一、人夫六人、自松林院召給之、

十二月十一日

一、自松林院人夫六人召之、明日二人可進云々、合五十人也、

〔經覺私要鈔〕

十七 七月九日辛卯、霽

今日自東南院爲池掃除人夫事被申問、元興寺領九人、七郷二人召遣了、

十一日癸巳、霽

一、七郷人夫三人、自關白室家明日御所望、可召進之由、仰遣繼舜法橋了、

〔尋尊大僧正記〕

二 三月三日

一、風呂在之、(一條兼良)殿下入御、

〔大乘院寺社雜事記〕

九 三十 四月二日

一、風呂在之、一切經納所役也、殿下入御、

東南院池掃除

一條兼良ノ夫人

風呂

一切經納所役

芋川莊役

出湯

菖蒲枕  
蕨湯  
行事役

大市莊役

十九日

一、昨日風呂在之、芋川庄役、

五月四日、雨下

一、風呂如例、出湯自今日進之、

一、菖蒲枕蕨湯、行事役也、

十七日

略○上 風呂在之、堯善申付之、

六月二日、雨下

一、風呂在之、清賢頭、御湯供御等如例、(一條兼良)大間並(經覺)寺務渡御、

十七日

一、風呂在之、大市庄役也、

晦日

一、風呂新役、

〔大乘院寺社雜事記〕

十四 七月三日、雨下

一、今日古市風呂在之、寺住衆少々招請之由、堯善相語者也、



七日

一、風呂在之、三井庄役、殿下入御

八月三日、雨下

一、風呂在之、殿下等渡御、

九月九日、夕小雨

一、風呂在之、羽律里井庄役云々、

〔大乘院寺社雜事記〕一四十一 十月九日

一、風呂在之、合木

十六日

一、風呂在之、隨(殿實)心院殿被仰付之、豐岡來了、

十一月十八日

一、風呂在之、緣舜法眼頭、殿下入御、

十二月八日

一、風呂在之、楊本庄役也、

十九日

楊本庄役

神殿莊役

立春

一、風呂在之、神殿庄役云々、

廿六日、立春

一、出雲庄風呂料足、御茶用途、御疊用途、且致其沙汰云々、

晦日

一、風呂在之、行事役、女中入御、

〔經覺私要鈔〕九六十一 卯月十九日癸酉、霽

一、有風呂入了、

廿二日丙子、霽

一、有鄉風呂入了、前(九條政忠)內府樣同令入給了、

廿九日癸未、霽、且程雨下

一、有風呂入了、先內府樣同令入賜了、

五月五日戊子、雨

一、有鄉風呂入了、先內府同令入賜了、

十五日戊戌

有鄉風呂入了、〇七月二十九日略ス、  
同文ナルニヨリ略ス、

文明元年雜載



廿日癸卯

一、俄立風呂之間入了、

廿九日壬子、霽

有鄉風呂入了、(應可政平)内府様同入御了、

六月四日丙辰

有功徳湯入了、彦次郎母第三年云々、於私宅百万反念佛在之云々、先内府依持病無入御、

五日丁巳、霽

一、在風呂入了、(マ、)下部一人召置之、

九日辛酉、夕立

一、今日風呂入了、

十二日甲子、霽

有風呂入了、

十五日丁卯、霽

有鄉湯入了、

郷湯

功徳湯

郷功徳湯

廿四日丙子、霽、極暑也

當故播州胤仙十七年之間、令作善等、有郷功徳湯入了、内府入御了、

〔經覺私要鈔〕十七

七月七日己丑、霽

一、有風呂入了、水無之間下湯ヲハ略云々、

十三日乙未、霽

今日風呂依無水無之云々、

十六日戊戌、霽

風呂釜破損之間、三千疋計煩云々、仍以勸進可沙汰之處、○下略、奈其踊ノ

歳ノ條ニ

八月九日庚申、霽

一、隨心院嚴寶僧正、一、前東寺長者、松殿侍從忠顯、清賢法橋、北面五六人被伴來、令同道入風呂了、一、献席被時了、(非カ)休息之後夕被歸畢、

卅日辛巳、雨

郷風呂無之間、自是燒之入了、

九月四日乙酉、霽

隨心院嚴寶  
松殿忠顯

風呂釜破損



水湯

自今日湯治爲之、先水湯也、先內府樣同入御了、行事松若也、

五日丙戌、霽、天曇

自今日五木一草藥湯也、七鄉並野田元興寺領人夫召出了、行事林教仰付了、先內府並松若入了、楠葉備中元次同入了、

十一日壬辰、雨下、降雨及廿日、希代天氣也

今日水湯也、地藏堂圓藏法師燒之、此間入藥風呂悅也云々、

廿一日壬寅、雨下

一、依小瘡立風呂入了、東南院同被入了、

八月廿四日乙亥、大雨

夜前夢、自龍門松二本賜之、道場東邊ニ植之由見了、吉凶之間難辨物也

〔大乘院寺社雜事記〕

一四十一 十月十八日

略○上 今曉夢相、拜兒觀音了、

十二月十日

一、夜分夢ニ、春日檢記繪一卷ヲ、於殿下御前令披見了、繪殊希有也、不件二十卷繪也、

尋尊夢ニ  
春日驗記  
繪卷ヲ一  
條兼長ク  
前ニ披ク

夢

五木一草  
藥湯

贈答  
年始禮物  
竝卷數

虫火

唐斗檯

十一日

一、夜部夢、長谷寺觀音拜見、寶冠之神變等見了、又於御前祈念、我嘗所造文唱之了、

〔廿一口方評定引付〕

一四〇 山城 正月十四日

一、年始被遣寺奉行禮物之事、如何可有沙汰哉之由披露之處難叶通路云々、  
其上浮足方一向其足無之間、今月末重而可致披露之由衆議畢、次御讀經御卷數、今月末造榮方之御卷數与一度可進云々、

〔尋尊大僧正記〕

二 廿六日、雨下

一、河口使武友虫火十疋進之、友清ハ相□□

廿八日

一、經算檯二荷三種持參了

三月四日

一、斗檯五荷、唐布三合、公方八舛、檯二□□二合、日野殿今日上之、人夫田舎□服院入、高田、小吉田合五人□□持之了、當年未進故也、辛彈正陣□服傳馬一疋、治部卿上洛時進之、馬ハ□人夫ハ中二日分也、



躑躅

廿日 一、自中河寺蕪坊躑躅五本進之、先日□□故也念比ニ悅仰了、彼寺他門跡御知行也、雖然就勾田庄事有子細之間、當方事□□見所者也、

〔廿一口方評定引付〕

○山城 四月九日

一、明日十日、左衛門太輔方ニ百疋相添卷數可被遣、次彼被官高橋、原將監兩入少分可遣云々、各三十疋宛也、

〔大乘院寺社雜事記〕

○三十九 五月七日、雨下

一、長谷寺覆盆子五十合進之、

九日

一、自井山報恩院筭二本、榼一荷進之、

晦日

一、興弘榼一双兩種進之、

六月九日、大雨下、電

一、自學侶榼五荷折二合進之、

十二日

覆盆子

卷數

筭

越智家榮

一、榼三荷一種越智彈正(家榮)一荷一種歡禪院二荷一種鳥屋(マ)一荷下遣之、堯善下

向了、

一、榼一双一折訓英進之、

十五日

一、自學侶御榼三荷、瓜一荷(一條兼良)殿下進上、使節宗算五師、寬專五師御對面云々、

廿二日

一、三女より御文到來、

〔大乘院寺社雜事記〕

○十四 七月七日

一、長谷寺進物榼一、麵一折如例、

廿七日

一、榼二荷兩種遣光宣了、

八月一日

一、御後見進物白布二反、袷一、三合、二鉢、唐布一合、瓶子二、

以上

檀紙一束新御所

檀紙

白布

檀紙



以上

一、慶英一瓶一盃 訓英榼一雙一盃 覺心上人白布一反 辨舜白布一反

一切經納所白布二反ッ、ラ 佛地院白布一反、雜紙五束 孝承茶二

十袋 專實同 繼舜同 泰弘十袋 大納言律師筆十官(管) 松林院瓶子

鉢御菓子一、御 盆等三十枚

一、古市恆例所進 大筒一 麵一折敷 色々籠三 連根

以上

一、今日一獻御前衆、予、隨心院殿、禪師御房、鷹司西殿、龍光院、松殿侍從、大納言

律師、役者孝承、役送泰坊

一、侍白布二反 (雜カ) 新紙一束出之、

一、予殿下ニ進上御鈴口竝一獻色々、參申御禮了、社頭白布一反、雜紙五束進

之、白布一反給訓英方了、

一、安位寺殿白布一反ッ、ラ、茶十袋進之、御返白布ッ、ラ、(脱字カ)五明本

四日、雨下

一、東門院、僧正二瓶兩種持參、

茶 筆 菓子 大筒 蓮根

鈴

五明

木練柿

松茸

行基作、  
八祖影、

筒井順永

七日

一、興弘木練一籠進之、

廿六日、雨下

一、榼一雙、(甘脱カ)松一盃、自東北院送給了、

一、松茸一盃、光守律師進之、

廿八日、雨下

一、松茸事如例、但松林院依計會不調進、御前衆、予、隨心院、禪師、西殿、勤修寺中納言御妾龍光

晴雲、松殿、大納言律師、

九月一日

一、自己心寺松茸一盃進之、

〔大乘院寺社雜事記〕(幅カ) 一、四十 十月四日

略上 中宗八祖影一福持來了、對面、行基作云々、訓英榼二雙二盃持參、天野供

事仰付之、孝承口 口

七日

一、榼三雙、折二合筒井持參、宿堯善部屋了、松林院之藤若參申、

文明元年雜載



十九日、雨下

一、興弘一獻等持參了、

十一月二日

一、(一條兼良)殿下御自筆月清集二帖被下之了、畏入者也、末代重寶也、

六日

一、小川中務少輔弘光楨二十本掘進之、

十一月廿四日

一、安養院經尊楯一双兩種持參、實英同送之、

十二月一日

一、天川御師桶二、並クルミ進之、五十疋下行、每年之儀也、

十二日

一、楯二荷兩種豐岡、楯二荷一種豐田方遣之畢、使者堯善秀舜、

一、先日船遣古市、所望故也、

十三日、夜雨下

略○上 參成就院、殿下仰、自持濟院方二千疋、並復御服進之、仍爲御禮可有御

小川弘光

一條兼良  
自筆月清  
集

天川御師  
クルミ

船

一條兼良  
上洛セン  
トス

鬼園山  
沙

俵炭

屏風

柿

上洛云々、相尋吉日、來廿日廿三日可然云々、則人夫傳馬等事仰付之了、

大市一疋 高田一疋 清沈(マ)一疋 小吉田 服 院入 倉庄 出雲

横田各一人、來十九日京上、十八日夕上中五日分、

十六日

一、雪賞翫、一瓶兩種并舜進之、

十九日

一、鬼園山沙、吉祥院田樂頭屋より所望之、

廿日

一、長谷寺例進俵炭八荷進之、此外二荷奉行分、執行送狀有之、

廿二日

一、屏風二双筒井借用、爲頭役所也、

廿三日

一、井上若狹公玄專歲末炭一荷進上之、

廿六日、立春

一、新禪院大柿、並卷數進之、



蜜柑

河内太子

柑子

茶

一、檜原糖一桶昨日進之、

一、中院法印卷數、並榼一双、蜜柑進之、

一、河内太子より家門ニ御炭二荷、卷數進之、毎年儀也、兵庫福原庄内一名太子ニ御寄進故云々、

一、自多武峯柿柑子進之、就御當職毎年儀云々、中御門奉行也、今日到來、

一、木阿ニ炭一荷進之、歲末也、

廿八日

一、宗秀僧都一面一瓶進之、

一、淨土坊主來、茶廿袋持參、

一、長屋庄納所英還得業茶廿袋進之、

一、己心寺大柿一連、卷數進之、

廿九日

一、大安寺卷數、並蜜柑、正豐寺炭一荷、卷數、吉田舜善房各炭一荷、

晦日

一、英寬參、炭一荷進之、慶英參、一盆二瓶進之、訓英參、一盆一榼一荷進之、山村

圓鏡

花餅

炭一荷進之、見塔院參、炭一荷進之、經師、御經進之、佛師、玉持參之、

一、長谷寺上林代百疋圓鏡三面到來、

一、家門御宿進物、御鏡十面、此外又二面、餅百枚、龍光院方一面、花餅五十枚、條々巨細仰

付納所堯勲了、

一、御宿毎日雜用方、當年分悉皆五貫文未進分也、今日悉以進上之、殿下公物、內先以申

出者也

〔經覺私要鈔〕

九六 十月十一日 乙丑

一、榼一荷、蘭豆一籠、專心圓實、賜之云々、

十三日 丁卯

一、自供目代兩瓶、折一合、素麵、茅卷一籠、賜之、悅遣了、悅酒上分云々、

十四日 戊辰、天曇

一、堂家賴清覺順、榼一双、花柑子一折敷、素麵一盆、持來了、寺務禮云々、對面了、

廿四日 戊寅、雨下

一、俊藝陽信、兩瓶、素麵一折、蘭豆一盆、令持參了、

廿六日 庚辰、霽

花柑子

茅卷

蘭豆



滿中

一、隨心院嚴寶僧正毘沙門谷回祿後、一向被住南都間、以次榼一双、菌豆一折、遣了、爲悅由有謝答、又關白殿室家號東御方一樽、並滿中一折進了、於關白御前一器之後、令退出之處、清賢法橋罷出、可服茶之由申問、戌亥角在所回遊之處、湯(漬カ)積以下出之畢、爲痛、○毘沙門堂兵火ノ條ニ見エタリ、

一、爲次向禪定院、庭以下沙汰直後好見之、於清賢宿所有小盃之由申之間、如說一器、令祝着、條々令談合還向了、榼一双、素麵一盆、菌豆一盆、遣了、(政覺)禪公所一樽、並滿中折一合遣之、仍有賞翫之詞、以次禪公學問事無沙汰、無勿躰之由諷凍了、(諫カ)

五月朔日甲申、霽

柿苔

一、古市一瓶、一鉢、柿苔賜之、則來餅對合畢、一餅祝着了、

五日戊子、雨

赤飯

一、古市一瓶、チマキ一鉢、赤飯一鉢、賜之、仰祝着之由了、

筍

六日己丑、旦程雨下、已刻霽、夕又雨下、事外甚雨、一、繼舜筍一束、賜之、悅遣了、

枇杷

十三日丙申

一、就傳法院事、修學者覺弘觀松房來、榼一荷、麵五束、比巴一盆、持來、初來間、令對面了、聊得少減故也、

十七日庚子、霽

一、今日來舜善、茶廿袋、賜之、仰悅喜之由畢、

六月朔日癸丑

古市胤榮  
山桃  
長田家則

一、古市胤榮一瓶、一鉢、正月山桃一盆、給之、仰祝着之由了、則古市以下一祝兵(族カ)長田家則庫以下來、

十四日丙寅、霽、月爲明々

十市遠清

一、十市所、遣覺朝了、進官等並松南院領御米無沙汰事、仰遣了、以次榼二荷、瓜二籠、素麵一折、遣了、遠清令對面、述所存云々、

廿日壬申、霽

一、狛野沙汰八榼、一荷、(ア、)阿古狀一荷、賜之、可賞翫之由仰含了、

一、五色一荷、進殿下了、

〔經覺私要鈔〕

十七 七月朔日癸未、夕立



瓜子

一、古市一瓶、瓜子等賜之、仰祝着之由了、

一、餅祝着了、古市已下對合了、

六日戊子、霽

東門院孝

一、東門院孝祐僧正榼一双、瓜二籠賜之、不思寄者也、祝着賞翫之由返答了、又

經胤方へ茶十袋送遣云々、

七日己丑、霽

一、古市素麵一鉢、瓜一鉢、汁一瓶進之、仰祝着之由了、

一、仕了葱一折敷持來、下行事申之、不分明之間、旁相尋可下行由仰了、先段下

行跡見出問一連下行了、

八日庚寅、霽

蓮根

一、經算琳乘房榼一双、素麵一折、蓮根濟々賜之、不思寄事也、不堪賞翫之由申遣

了、

廿一日癸卯、雨下及數日了、以外也、

一、東大寺々務被來、進素麵並供御等了、夕被歸了、

廿九日辛亥、霽

素麵

枝大豆  
檀紙

一、英弘僧都八朔之儀歟、一瓶、枝大豆一盆、一折敷賜之、檀紙一束、扇一本遣了、

一、白布二端、蘿箱一合、一切經納所給之、八朔恒例之課役也、不及和禮者也、

白箱  
胡桃

一、龍門圓尾胡桃五百賜之、八朔禮云々、仍杉原一束遣了、

小刀

一、寬圓小刀一作唐木進之間、扇一本遣了、

八月朔日壬子、霽

一、古市兩瓶、瓜、茄子以下一鉢、蓮根三本賜之間、白布一端、蘿箱一合遣了、

廿五日丙子、天未霽、但雨不下

唐船

一、昨日唐船一艘遣禪定院(政覽)禪公了、使松若也、

廿八日己卯、雨

一、於門跡有松茸事云々、一切經納所英算松茸一折、一瓶、肴一鉢賜之、仰賞翫之由了、

九月朔日、雨止、壬午

一、古市一瓶、一鉢、柿等賜之、賞翫之由令返答了、

一、餅祝着了、

松茸



一、自己心寺松茸一盆賜之、未忌中歟、所進如何、但以直狀故坊主事警仰了、可訪之處、忘却之間于今無沙汰、仍乍次仰了、

九日庚寅、天曇又雨下、希代天氣也、

一、古市赤飯一鉢、一瓶、粟等給之、仰祝着之由了、

十四日乙未、雨止

成身院光  
白壁

成身院光宣法印罷向古市次歟來、對面了、櫬二荷、白壁一合、一籠、柿賜之、俄之間出盃了、見參之時、香合一遣了、

廿六日丁未、霽

具足唐櫃

一、今日畑方へ古市若黨三人、自是片山才若遣了、寺一人、人夫二人遣之、具足唐櫃楯以下遣之、

〔大乘院寺社雜事記〕

三十一 六月十四日

若槻莊日  
次瓜

一、若槻日次瓜、昨日今日合十合進之了、

十五日

一、日次瓜五合到來、十六日、二十日ノ條、  
同文ナルニヨリ略ス、

十七日

一、日次瓜十五合到來、二十一日、二十二日、二十三日、  
同文ナルニヨリ略ス、

十八日

一、日次瓜十合到來、

一、一切經納所京上瓜十合、自奉行方進之、

一、瓜五合、鷹司前殿進上之、

十九日

一、若槻莊日次瓜十合到來、

一、高田瓜十合、宗藝律師進之、

廿一日

一、佛地院瓜十合到來、

廿二日

東北院瓜五合送給之、

廿三日

一、四川瓜一荷五十進之、

一、東北院瓜一荷送給之、

四川瓜

東北院瓜

佛地院瓜

高田瓜



廿四日

一、日次十合、至今日百十五合到來、五合未進

廿六日、雨下、大風

一、辰市瓜一荷進之、

廿七日、雨下

一、光守律師瓜一荷進之、

廿九日

一、長谷寺恒例瓜十合、

一、筒井方より瓜二折進之、

〔大乘院寺社雜事記〕十四 七月八日

一、楊本莊瓜三合昨日到來、

九日

一、楊本莊瓜二合進之、

十一日

一、經算南郷瓜一盆進之、

長谷寺恒  
例瓜

楊本莊瓜

南郷瓜

未熟瓜

〔經覺私要鈔〕九十六 六月朔日癸丑

一、未熟瓜三、自修理目代賜之、

十九日辛未、夕立

一、越田尻公事瓜十合、吉田公事瓜五合令沙汰了、

廿日壬申、霽

英算僧都、一切經納所、長鞆南、並少塔院各瓜一荷賜之間、各仰賞翫之由了、

一、幸徳井三位友幸瓜一荷賜之、賞翫之由遣返事了、

廿二日甲戌、霽

一、修理目代瓜三百果今日沙汰云々、又仕丁武友五色一荷給之云々、

廿三日乙亥、霽

一、曲川瓜一荷賜之、仰賞翫之由了、

廿六日戊寅、午未刻雨風折木吹了、雨ハ甘雨云々、

一、瓜一荷遣隨心院嚴寶僧正方了、在南故也、

〔經覺私要鈔〕十七 七月六日戊子、霽

一、狛野沙汰入瓜一荷賜之、

越田尻公  
事瓜  
吉田公事  
瓜

曲川瓜



一、此瓜少々遣大乘院禪公政覺方畢、相副松若遣了、  
九日辛卯、齋

一、修理所進瓜千果候處、三百果分進之條、いゝ様候哉、何庄依無沙汰如此哉、  
由相尋之處、近年進之由以先規申間、至應永九年ハ千果進由見記錄、近來  
事外減少、不得其意之由返答了、

自二月四日寺務實照僧正也、内々教之、

一、大乘院殿御寺務、應永十八年三百果突鼻了、不可  
説注進也

慈恩院寺務、應永廿年三百果、

十日壬辰、齋

楊木瓜三合自御後見賜之、賞翫之由返答了、

〔大乘院寺社雜事記〕四十十一月八日

一、美乃國エ書狀遣之、下一檢校卜檢弟子下向次也、新御所御事雖下未聞、申遣是心院  
殿了、

廿六日、雪下

一、(教玄)大乘院御返事、不可有子細之由内々訓英令申、修南院僧正方事可計略云

一、大乘院教  
玄、修南院僧

卜一檢校  
弟子ニ信  
書ヲ託ス

正

梅津殿

覺心上人

袖留木

榮壽丸出  
家

寶輪院同  
宿童形出  
家

大安寺長  
老、大乘院  
坊主トナ  
ル

十二月十一日

一、梅津殿御書到來、去月廿四日御文也、

廿三日

一、覺心上人方ニ遣書狀了、

廿五日、雪下、節分

一、巨細書狀遣袖留木方、

〔見聞雜記〕〇歷代殘關日  
記八十四所收

一、(三月)同廿一日榮壽丸出家了、

〔廿一口方評定引付〕〇山城三月廿五日

一、寶輪院同宿之童形當年十五歲、被申出家之案内之間、彼法印書狀誓文狀、任應仁  
貳年十一月廿一日評義旨、得度以後致披露畢、

〔大乘院寺社雜事記〕十四八月十九日

一、近日大安寺長老被成當院坊主、(通尙)久我殿伯父也、

〔大乘院寺社雜事記〕四十十一月廿四日



今市新子出家

一、今市新子出家參申、對面了、十二月廿三日

上座繼舜ノ子出家

一、上座法橋繼舜之息、今日初參、十五同出家、法名宣舜、伊与出家次第如常、予

出仕、役人泰坊、剃手、紙燭、役等融算、戒師東金堂舜圓、大、道場料理以下、ハ下

北面方、催番宗順之沙汰也、如常油五合下行、令參寺務、寺住三綱事所望、無

相違御許可也、今日兩人寺住了、現任三綱職、躰

上座二口、寺主六口、都維那三口、權都維那二口、合十三口也、去應永廿六

年以後ハ無此儀者也、

〔宇和郡舊記〕

宇和郡之事

笹山觀世音寺觀音堂、脇立書付寫

伊豫笹山觀音堂本尊彫造

謹奉彫造豫州觀自在寺御庄笹山神宮寺

本尊左不動明王也、右毘沙門天王也、于時應仁三年巳六月十八日敬白

大檀那法眼宗祐和尚奉祈當來作佛者也、大願主赤岸山興禪寺住持比丘宗

諡判、

〔廿一口方評定引付〕

○山城 正月五日

吉事披露

不斷時

夏衆

賴俊

佛生講花堂造立

食堂供花

供花

一、一天泰平、寺院安全、人法繁昌等、吉事條々令披露畢、

〔見聞雜記〕

○歷代殘闕日 記八十四所收

一、二月一日、寺家不斷時ノ夏、當年正月一日ヨリ可被指置候也、舊冬奉行渡ノトキ治定了、雖然夏衆等以敬神之儀、去月中計吹貝了、依同月ヨリ無之、

(三月)一、同廿八日、賴俊籠衆ヲ於九百九十九ケ日ニ相當云々、

一、四月八日、佛生講花堂造立事、當年始而被略之歟、

一、同十五日、食堂供花ノ事、依無、上野莊ノ檀香計ニテ有之、仍別當方ヨリノ

下行物被減云々、

〔廿一口方評定引付〕

○山城 四月十日

一、夏衆申云、供花之事、如先々可有始行歟、但上野莊役檀花如今者不可入之

歟、縱雖無花、以備香計之儀、可引時之由、申子細披露之處、衆議云、申付兩代

管(官)可入花之由、庄家次可致下知云々、若花不入者、備香計可結夏之由、可申

付夏衆之由、衆議畢、

〔東寺執行日記〕

十

一、九月十八日、大炊定金法橋送文云、去十四五日取納

守分之由、一名五斗三舛二合佛餉方へ納之、請取アリ、又定金カ南内繩本分



國方へ引之、殘分又佛餉方へ、

〔廿一口方評定引付〕

○山城 十月十二日

一、御影堂年始造花之事、自戒光寺尊(住カ)重院每年進之、此二三年一向無沙汰之間、如何可有沙汰(候カ)之哉、之由披露之處、彼下地名主分之年貢可押置之由衆議畢、

十一月廿日

一、戒光寺造花之事、仍無沙汰下地被押置之間、自寺侘事申通披露之處、不可叶之由衆議畢、

同廿九日

一、就年始造花之事、戒光寺自尊住院以書狀被申通披露之處、衆議云、彼書狀文言不慥之間、所詮子丑寅三年者可預免、自卯年之正月分如元可造進、万一猶令無沙汰者、可有下地於勤落之由、可被出書狀之由可申云々、

十二月廿四日

一、戒光寺尊住院就造花之事、一行之事、如案文可有沙汰之事難澁之上者、彼下地年貢致催促、可有寺納之由衆議畢、

御影堂年始造花

戒光寺造花

造花

廿一口奉行點定

勤進代僧綱出仕

大織冠影像開眼

花見

〔廿一口方評定引付〕

○山城 十二月廿日

一、來年廿一口奉行合點、寶嚴院一、正覺院五、寶輪院十一、仍寶輪院治定畢、  
一、大納言阿闍梨別當代經曆(歴カ)之間、諸奉行合點被除之、並觀智院補作(佐カ)之儀之間、兩人共被除合點衆畢、

〔大乘院寺社雜事記〕

九 三十 六月二日、雨下

一、兩勤進代僧綱出仕事相催之、大納言律師兩日共以可有出仕云々、光明院律師同催之云々、就中寺家御出仕有無尋之云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

十四 七月十六日

一、去夏奉圖繪大職冠御影、今日開眼師隨心院(嚴寶)前大僧正、

〔尋尊大僧正記〕

二

一、上座法橋出仕、當年勤之、

廿四日

一、世間出世方花見如例、於成就院賞翫了、□□殿下白毫寺ニ入御、悉以御共申了、夜ニ入テ還御、

三月六日



一、龍花院間事、學侶書狀到來、取進殿下、不得其意事也、御返事在之、可遣供目代歟、

〔大乘院寺社雜事記〕九三〇 四月二日

一、飯高海石仰付法貴寺一黨、召寄之了、

五日、夕雨下

一、當月者神南院御油五舛也、名主光舜僧都方より送進之、彼御油號行恩房

御油、行恩房ハ東藏院一門也、可爲西座之處、依則躰所望成住侶了、候人爲

一家之間、彼名主被仰付之、光舜同相傳之、

〔別紙端表書〕  
神南院御油送狀應仁三

神南院御油五舛進上申候、此由可有御披露候、恐々謹言、

卯月二日

光舜

御奉行所

八日、夕雨下

一、自安位寺石橋二召寄之、俱志羅持進之了、御悅喜之旨念比ニ仰返事、

十日

長谷寺小社上尊

一、就長谷寺小社上尊事、當門跡庄檜皮師之内、以器用五人召下云々、此條難

義之由、座中等歎申入之間、可加下知旨仰付了、

十四日、雨下

一、京上正陣法師、自長者被上之、

廿二日

一、自明日可懸鐘木之由、堂童子ニ被加御下知、奉行繼舜法橋任例常住日次

佛聖用之、仍別ニ不下行云々、鐘木者花山水也、食料五斗合所、白布三反、國

布三反、葎六十兩、合四色、代一貫五百文、又童子腰差代一貫五百文、都合三

貫文被下行了、每度此儀也、然而童子申入之、一貫五百文外ニ食料五斗可

有云々、無其儀、去寬正二年加食料五斗、一貫五百文分堂童子請取有之、其

子細仰之間、領狀申了、每度儀也、如此申狀不審々々、花山水事者、衆中沙汰

衆方ハ折紙、則給堂童子了、

一、白毫寺山石仰付、五ヶ所十座持之、上下北面衆致奉行者也、

廿六日

一、白毫寺山石、今日十座五ヶ所持之了、至今日、

鐘木

鐘木ハ花山水

國布腰差代

白毫寺山石



木阿彌愛  
滿丸ト縁  
ヲ結フ

廿七日  
一、昨日石共今日仰領内持之、  
廿八日

一、木阿ミ與愛滿丸可成縁之由仰付之、畏入了、今日治定申入了、  
晦日、雨下

一、發心院等事、巨細以兵庫仰古市、  
(長田家則) (亂榮)

六月十九日

尋尊西尾  
ノ寶藏ヲ  
開ク  
寶物  
蓮糸万陀  
羅

一、早旦移社頭、但兩度、辰刻本承仕一薦申入案内間、西尾經藏ニ行向令開寶  
藏了、予一衣自餘同前、拜賀寶物者、佛舍利上人御房奉納云々、六粒入水精  
壺、應和宗論之時、仲算大德所持扇、付首黒西方万陀羅二幅、方一尺計梵網經表  
紙云々、此万陀羅ハ蓮糸ニシ織之、仲將姫万タラ如當曆、(麻カ)希代物也、如唐織  
物織之了、所詮不可思議者也、石磬一面有子細、金泥大般若一部、龍宮  
弘法大師 嵯峨天皇御筆 道風筆 天神御筆 藤原經平卿筆 關東  
將軍書下、平田庄 一座證義事量舜奉書等 清成公寄進大般若一部、每

弘法大師  
嵯峨天皇  
等ノ筆蹟

於安居坊  
拂出云々、  
此外

同田夜聖殿 天台六十卷抄等 慈恩會出仕帳籍 法成寺豎義等記  
季御讀經仁王會等記、條々記錄等不知其數者也、

廿四日

一、合木在之、

廿五日

一、主殿指圖遣覺心了、

面九間、奥六間、一丈八尺丸柱二十六本、一丈六尺四方柱二十七本、八寸三間ノ角  
木四支、一尺、二間ノナケシ六十支、八寸ケタ二十六支、八寸ニ  
キヲヒ二十支、カヤヲ、ヒ二十支、各二間、ヒエシカケ、  
廿六日、雨下、大風

一、傳聞、勸學院(マ、)宜移事可沙汰旨、六方四座猿樂ニ申付之、又一方衆不可叶旨  
申付之、無之云々、

〔大乘院寺社雜事記〕

十四 七月四日、雨下

主殿指圖

勸學院



上京路次  
難義

六方衆覺  
心上人ヲ  
シテ不空  
院ヲ修理  
セシム

丹後仁木  
氏

新淨土寺  
上下所立  
棟

神人不法  
ニヨリ住

文明元年雜載

三四二

一、可京上之處、路次難義之間難叶者也、十日

一、覺心上人事、先年六方より停止奈良中出入了、仍外様ニ無出入儀者也、今度不空院修理事、自衆中申付之、就其彼上人進退事、自衆中令申六方之間、免除之由、昨日六方書狀到來、衆中悦喜也、則申遣覺心方云々、珍重々々、十九日

一、就賢秀新入事、下薦分申入尋在之、

廿日、雨下

一、宣旨殿被申置手箱等事、自丹後仁木方取來之間渡之、長雲院下女云々、八月三日、雨下

一、新淨土寺下所立柱上棟也、祝者共送進之、

十二日

一、就講師坊事、自寺務重て御催促付、宗算五師進之、

九月八日

一、坪江下向神人兩人不法之間、住宅共以進發之、以外不法、珍事々々、

屋ヲ毀ッ  
土佐足摺  
ヨリ本尊  
一鉢ヲ所  
望ス

神人橋左  
衛門下藤  
七喧嘩

植師

立具紛失

猪屋

資支

住屋ヲ典  
ス

一、自隨心院殿本尊一鉢、尺迦愛土佐幡多足スリヨリ所望申云々、昨日召下了、

〔大乘院寺社雜事記〕 一四十一 十月十四日

一、神人橋左衛門與藤七喧嘩、藤七□□□橋左衛門負手了、半死半生、橋左衛門之父同負手、以外次第也、寺住衆徒大略以參籠時節之間、馳向兩人住宅給公人了、地下人等各其儀如例也、

一、三輪内山より植師召寄之植了、

廿二日

一、廿日夜公文所立具四間分(紛)粉失了、希有事也

廿三日

一、就猪屋事、千手院申子細、以成就院並堯善仰遣極樂坊了、

十一月五日

一、古市千貫資支今日在之、如去春也、今日安養院取當之云々、但五人合云々、十二日

一、河上住屋事、爲借物方、東門院侍上野与琳乘房(破)披官人、兩人方ニ令支配之

文明元年雜載

三四三